

K-864

下小松古墳群 (1)

大塚初重 編
小林三郎

山形県川西町

下小松古墳群 (1)

明治大学

大塚初重 編

小林三郎

山形県川西町

序

川西町は、置賜盆地のほぼ中央に位置し、西方に南北に延びる丘陵地帯をもち、素晴らしい自然の地形と景観に恵まれた“緑と愛と丘のあるまち”であります。

又、私たちが現在住んでいる郷土の文化は、われわれの先祖が築きあげてきたものであり、下小松古墳群はこれまでの調査からまさしく、その先祖の聖なる地であると確認されました。

本町では、この貴重な文化遺産を保護・保存すると共に、正しく後世へ伝承する責務があると考え、平成5年度まで当地古墳群用地を取得しながら、今後、当地の保護・保存整備を図ると同時に、史跡公園整備に向け取り組んで参る所存であります。

このたびの本書は、川西町が学術調査として、昭和60年から下小松古墳群の発掘調査を行った成果と、平成2年より明治大学考古学研究室との合同調査を行った資料を、明治大学の大塚初重、小林三郎両教授に編纂していただき、これまでの調査結果をまとめたものでありますが、学術研究、教育活動などにおいて、皆様が埋蔵文化財に対する認識の高揚と理解の一助になれば幸いに存じます。

最後に、これまで実施してまいりました発掘調査並びに、この度、調査成果を報告書として編纂していただきました、大塚、小林両教授に深甚なる敬意と感謝を申し上げますと共にご協力いただきました関係各位に対し衷心より厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

川西町長

高橋和男

例 言

1. 本書は山形県東置賜郡川西町下小松にある下小松古墳群の中、小森山支群第40号・第61号・第64号・第65号・第77号・第98号墳、鷹待場支群第105号・第106号・第186号墳、栗師沢支群第143号・第145号墳の調査報告書である。
2. 調査は、1983年から1989年にわたる川西町教育委員会の調査と、1990年から1994年にわたる川西町と明治大学との合同調査による調査とをあわせて一冊とした。
3. 調査は、川西町教育委員会の調査費のほか、下記の研究助成金を得ている。
1990～1992年度
明治大学人文科学研究所・重点研究
研究課題「東日本における群集墳の研究」
研究代表者 文学部教授 大塚初重
共同研究者 " 小林三郎
4. 本書の執筆は大塚・小林が中心となり、明治大学大学院学生、新井悟・加藤俊吾・猪谷千香・山本美野里・栗林誠治（OB）が分担した。
5. 川西町教育委員会の調査分は、川西町文化財専門員、藤田宥宣が分担し、大塚・小林の責任において再編集した。

第40号墳調査団構成

- 1 遺跡名 下小松古墳群・小森山支群第40号墳
- 2 所在地 山形県東置賜郡川西町大字下小松大堤沢
- 3 調査期間 第1次調査 1993年7月18日～1993年8月10日
第2次調査 1994年7月15日～1994年8月11日
- 4 現地説明会 1994年10月2日
- 5 調査主体 川西町教育委員会・明治大学考古学研究室
- 6 調査担当 川西町教育委員会・明治大学考古学研究室
- 7 調査総括 大塚初重（明治大学教授）
- 8 主任調査員 小林三郎（明治大学教授）
- 9 副主任調査員 新井悟・加藤俊吾（明治大学大学院生）
- 10 調査員 猪谷千香・山本美野里（明治大学大学院生）・斉藤敏明・田村隆太郎・
野田裕二・岸美由紀・月村桂子・遠竹陽一郎・古屋紀之・
安中哲徳（明治大学学生）
- 11 作業協力 井上桂子・齋藤千恵子・鈴木仙助・長沢昌幸・米野五郎
- 12 事務局長 社会教育課課長 情野正弘
- 13 事務局員 竹田利雄・藤田宥宣
- 14 川西町嘱託 高橋啓一
- 15 調査協力 川西町文化財保護協会・まつかせ荘

第61・64号墳調査団構成

- 1 遺跡名 下小松古墳群・小森山支群第61・64号墳
- 2 所在地 山形県東置賜郡川西町大字下小松字舞台山1914-11
- 3 調査期間 1985年5月13日～1985年7月25日
- 4 調査主体 川西町教育委員会
- 5 調査総括 藤 島 正 康（社会教育課長）
- 6 調査主任 藤 田 宥 宣（文化財専門員）

- 7 調査補助員 月山隆弘
- 8 特別調査員 柏倉亮吉(米沢女子短期大学学長・県考古学会会長)
大塚初重(明治大学教授)
加藤稔(県考古学会副会長)
- 9 調査協力 山形県文化課・大道工務店・川西町文化財保護協会
- 10 調査参加者 高橋宏平・黒沢一利・鈴木仙助・井上吉助・青木光雄・中島正巳
小松智・岩見和泰・江尻潔・佐藤進・蒲生重夫・高櫻恒雄
茂出木民子・横野幸司・小林英喜・伊藤玲子・佐藤直利・小林孝
棚村順子・佐藤敬一・大崎郁子・藤藏徳夫・高橋啓一・高橋誠
- 11 地権者 渡辺昭三・横山武幸
- 12 事務局 佐藤 肇

第65号墳調査団構成

- 1 遺跡名 下小松古墳群・小森山支群第65号墳
- 2 所在地 山形県東置賜郡川西町大字下小松字舞台山1914-11
- 3 調査期間 1988年6月17日～1988年11月10日
- 4 調査主体 川西町教育委員会
- 5 調査総括 本田 富(社会教育課長)
- 6 調査主任 藤田宥宣(文化財専門員)
- 7 特別調査員 柏倉亮吉(県考古学会会長)
大塚初重(明治大学教授)
加藤 稔(県考古学会副会長)
- 8 調査協力 山形県教育庁文化課・川西町文化財保護協会・大道工務店
- 9 調査参加者 藤倉徳夫・高橋啓一・鈴木仙助・草刈広一・伊藤成美・高橋宏平
塚田健一・黒沢一利・西山龍法・平田よしえ
- 10 調査指導 山形県教育庁文化課
- 11 用地協力 横山武幸・福牡丹酒造株式会社
- 11 事務局 小方信一(社会教育課長補佐・文化遺跡係長)

第77号墳調査団構成

- 1 遺 跡 名 下小松古墳群・小森山支群第77号墳
- 2 所 在 地 山形県東置賜郡川西町大字下小松字舞台山1914-11
- 3 調 査 期 間 1989年7月6日～1989年7月31日
- 4 調 査 主 体 川西町教育委員会
- 5 調 査 総 括 本田 富 (社会教育課長)
- 6 調 査 主 任 藤田宥宣 (文化財専門員)
- 7 特別調査員 柏倉亮吉 (県考古学会会長)
加藤 稔 (県考古学会副会長)
大塚初重 (明治大学教授)
- 8 調 査 協 力 山形県教育庁文化課・川西町文化財保護協会・大道工務店
調査参加者 鈴木仙助・竹田忠吉・金子藤次郎・井上吉助・水野哲・高橋安平・
塚田健一・黒沢一利・西山竜法
- 9 調 査 指 導 山形県教育庁文化課
- 10 用 地 協 力 横山武幸・福牡丹酒造株式会社
- 11 事 務 局 小方信一 (社会教育課長補佐・文化遺跡係長)

第98号墳調査団構成

- 1 遺 跡 名 下小松古墳群・小森山支群第98号墳
- 2 所 在 地 山形県東置賜郡川西町大字下小松1907番地
- 3 調 査 期 間 第1次調査 1990年8月18日～1990年9月6日
第2次調査 1991年8月21日～1991年9月18日
第3次調査 1992年7月25日～1992年8月8日
- 4 調 査 主 体 川西町教育委員会・明治大学考古学研究室
- 5 調 査 担 当 川西町教育委員会・明治大学考古学研究室
- 6 調 査 総 括 大塚初重 (明治大学教授)
- 7 主 任 調 査 員 小林三郎 (明治大学教授)

- 8 調査委員会委員 加藤稔・川崎利夫・川西町長・教育長
- 9 副主任調査員 鈴木直人・伴瀬宗一・吉村日出東・平田楨文・栗林誠治（明治大学大学院OB）
- 10 調査員 牛山英昭・田川憲（明治大学大学院OB）・三室戸元光・新井悟・加藤俊吾・山本美野里（明治大学大学院生）・小林高・北原裕美・吉田裕子（明治大学OB）・小南裕一・齋藤敏明・野田裕二・北島大輔・瀧川渉（明治大学学生）
- 11 作業協力 黒沢千恵子・鈴木仙助・米野五郎
- 12 事務局長 社会教育課課長
- 13 事務局員 今野貢・藤田宥宣
- 14 川西町嘱託 高橋啓一
- 15 調査協力 川西町文化財保護協会・まつかぜ荘

第105・106・186号墳調査団構成

- 1 遺跡名 下小松古墳群・鷹持場支群第105・106・186号墳
- 2 所在地 山形県東置賜郡川西町下小松字舞台山1933-33~34 字藁師沢1938-1
- 3 調査期間 1986年5月19日～1986年9月18日
- 4 調査主体 川西町教育委員会
- 5 調査総括 平賀 精 一（社会教育課長）
- 6 調査主任 藤田 宥 宣（文化財専門員）
- 7 調査補助員 月 山 隆 宏
- 8 特別調査員 柏 倉 亮 吉（県考古学会会長）
大 塚 初 重（明治大学教授）
加 藤 稔（県考古学会副会長）
- 9 調査協力 山形県教育庁文化課・川西町文化財保護協会・大道工務店
- 10 調査参加者 藤倉徳夫・高橋啓一・黒沢利一・高橋宏平・鈴木仙助
- 11 調査指導 山形県教育庁文化課
- 12 地権者 石田隆一・横山憲一・鈴木三右衛門・島貫盛雄
- 13 用地協力 横山武幸・平田忠雄・平田英雄
- 14 事務局 佐藤 肇（文化遺跡係長）

第143・145号墳調査団構成

- | | | |
|----|--------|---|
| 1 | 遺跡名 | 下小松古墳群・薬師沢支群第143・145号墳 |
| 2 | 所在地 | 山形県東置賜郡川西町大字下小松字薬師沢1936-1 1936-9 |
| 3 | 調査期間 | 1987年6月15日～1987年8月6日 |
| 4 | 調査主体 | 川西町教育委員会 |
| 5 | 調査総括 | 平賀 梢一 (社会教育課長) |
| 6 | 調査主任 | 藤田 宥直 (文化財専門員) |
| 7 | 調査指導委員 | 柏倉 亮吉 (山形県考古学会会長)
大塚 初重 (明治大学考教授)
加藤 稔 (山形県考古学会副会長) |
| 8 | 調査協力 | 山形県教育庁文化課・川西町文化財保護協会
財団法人元興寺文化財研究所・大道工務店 |
| 9 | 調査参加者 | 高橋宏平・黒沢利一・鈴木仙助・鈴木新三郎・平田源一
平田よしえ・竹田東一・小形まき子 |
| 10 | 地権者 | 平田辰雄 |
| 11 | 事務局 | 大沼豊雄 (文化遺跡係長) |

山形県川西町下小松古墳群(1) 目次

序	例言	
第1章	下小松古墳群研究の意義	
第1節	下小松古墳群研究の意義	19
第2節	下小松古墳群調査・研究抄史	20
第3節	調査にいたるまでの経過	22
第2章	下小松古墳群の概観	
第1節	下小松古墳群の地理的環境	28
第2節	下小松古墳群の歴史的環境	28
第3章	下小松古墳群の概要	
第1節	小森山支群の概要	31
第2節	鷹待場支群の概要	31
第3節	薬師沢支群の概要	31
第4章	下小松古墳群の調査	
第1節	小森山支群の調査	35
1.	第40号墳	35
2.	第61号墳	49
3.	第64号墳	60
4.	第65号墳	63
5.	第77号墳	66
6.	第98号墳	70
第2節	鷹待場支群の調査	86
1.	第105号墳	86
2.	第106号墳	88
3.	第186号墳	92
第3節	薬師沢支群の調査	96
1.	第143号墳	96
2.	第145号墳	107

第5章 考察

第1節 下小松古墳群の年代と性格	112
第2節 薬師沢支群第143号墳出土漆整飾の製作技法	116
第3節 小森山支群第98号墳出土の葎	122

挿図目次

第1図 下小松古墳群周辺の遺跡と地形	29
第2図 小森山支群分布図	32
第3図 廣待場支群分布図	33
第4図 薬師沢支群分布図	34
第5図 第40号墳墳丘測量図	36
第6図 第40号墳トレンチ配置図	37
第7-1図 第40号墳セクション図(1)	38
第7-2図 第40号墳セクション図(2)	39
第8図 第40号墳横内部横断セクション図	42
第9図 第40号墳主体部平面図	44
第10図 第40号墳西側主体部	45
第11図 第40号墳東側主体部	46
第12図 第40号墳出土遺物	48
第13図 第61・64号墳調査区	49
第14図 第61・64号墳墳丘測量図及び調査区配置図	51
第15図 第61号墳セクション図(1)	52
第16図 第61号セクション図(2)	53
第17図 第61号墳主体部	55
第18図 第61号墳出土遺物(1)	56
第19図 第61号墳出土遺物(2)	57
第20図 第61号墳出土遺物(3)	58
第21図 第64号墳セクション図	61
第22図 第64号墳主体部	62
第23図 第64号墳出土遺物	62
第24図 第65号墳墳丘測量図及び調査区配置図	64
第25図 第65号墳セクション図	65
第26図 第65号墳出土遺物	66
第27図 第77号墳墳丘測量図及びトレンチ配置図	68
第28図 第77号墳セクション図	69
第29図 第77号墳主体部	67
第30図 第77号墳出土遺物	70

第31図	第98号墳丘測量図	71
第32図	第98号墳トレンチ配置図	73
第33図	第98号墳頂部トレンチ配置図及び炭化材分布図	74
第34-1図	第98号セクション図(1)	76
第34-2図	第98号セクション図(1)	77
第35図	第98号墳セクション図(2)	78
第36図	第98号墳セクション図(3)	79
第37図	第98号墳主体部(1)	81
第38図	第98号墳主体部(2)	82
第39図	第98号墳主体部炭化材出土状況図(1)	83
第40図	第98号墳主体部炭化材出土状況図(2)	84
第41図	第98号墳出土遺物	85
第42図	第105・106号墳調査区	87
第43図	第106号墳丘測量図及び調査区配置図	88
第44図	第106号墳セクション図	90
第45図	第106号墳主体部確認プラン	89
第46図	第106号墳出土遺物	91
第47図	第186号墳調査区	92
第48図	第186号墳丘測量図及び調査区配置図	93
第49図	第186号墳セクション図	94
第50図	第186号墳出土遺物	95
第51図	第143号墳丘測量図及び調査区配置図	97
第52図	第143号墳セクション図	98
第53図	第143号墳主体部	100
第54図	第143号墳出土遺物(1)	102
第55図	第143号墳出土遺物(2)	103
第56図	第143号墳出土遺物(3)	104
第57図	第143号墳出土遺物(4)	106
第58図	第143号墳出土遺物(5)	107
第59図	第145号墳丘測量図及び調査区配置図	108
第60図	第145号墳セクション図	109
第61図	鉄器計測部位模式図	111
第62図	第98号墳主体部出土取実測図	123

第5章第3節 挿図・写真図版目次

写真1	漆整桶のX線透過写真	116
写真2	漆膜面の断面写真(資料No2整桶)	116
第1図	漆膜面の含有顔料の分析結果(資料No2整桶)	121
第2-1図	糸の縛り方(資料No1整桶)(1) 頭部中央部	117
第2-2図	糸の縛り方(資料No1整桶)(2) U字型部分	117
第2-3図	糸の縛り方(資料No1整桶)(3) 歯の基部	117
第3-1図	構造復元図(資料No2整桶)	118
第3-2図	糸の縛り方(資料No2整桶) 頭部中央部	118
第4図	七廻り鏡塚古墳出土漆整桶	119
第5図	糸の縛り方復元図	120

表 目 次

第1表	鉄器計測表	111
-----	-------	-----

写真図版目次

- 第1図版 下小松古墳群航空写真
- 第2図版 1. 下小松古墳群遠景(南東より)
2. 小森山支群第61・64号墳(西より)
- 第3図版 1. 小森山支群第40号墳調査前全景(西より)
2. 小森山支群第40号墳墓壇プラン検出状況(西より)
- 第4図版 1. 小森山支群第40号墳墓壇横断面(西より)
2. 小森山支群第40号墳墓壇横断面(東より)
- 第5図版 1. 小森山支群第40号墳西側主休部墓壇横断面(西より)
2. 小森山支群第40号墳西側主休部墓壇横断面(東より)
- 第6図版 1. 小森山支群第40号墳東・西側主休部墓壇検出状況(西より)
2. 小森山支群第40号墳西側主休部木棺プラン検出状況(西より)
- 第7図版 1. 小森山支群第40号墳西側主休部完掘状況(西より)
2. 小森山支群第40号墳西側主休部遺物出土状況(西より)
- 第8図版 1. 小森山支群第40号墳東側主休部墓壇横断面(西より)
2. 小森山支群第40号墳東側主休部墓壇横断面(東より)
- 第9図版 1. 小森山支群第40号墳東側主休部完掘状況(西より)
2. 小森山支群第40号墳東側主休部遺物出土状況(西より)
- 第10図版 1. 小森山支群第40号墳東側主休部棺床検出状況(東より)
2. 小森山支群第40号墳後円部南側横断面(東より)
- 第11図版 1. 小森山支群第40号墳南側くびれ部・周溝完掘状況(東より)
2. 小森山支群第40号墳北側くびれ部・周溝完掘状況(北より)
- 第12図版 1. 小森山支群第40号墳前方部・7トレンチ完掘状況(西より)
2. 小森山支群第40号墳前方部・6トレンチ完掘状況(西より)
- 第13図版 1. 小森山支群第61号墳調査前全景(北西より)
2. 小森山支群第61号墳表土除去後状況(西より)
- 第14図版 1. 小森山支群第61号墳墓壇プラン検出状況(西より)
2. 小森山支群第61号墳第1号墓壇鉄刀出土状況(西より)
- 第15図版 1. 小森山支群第61号墳第1号墓壇土層断面(西より)
2. 小森山支群第61号墳第1号墓壇鉄刀出土状況(南西より)
- 第16図版 1. 小森山支群第61号墳調査区全景(西より)
2. 小森山支群第61号墳北側くびれ部遺物出土状況(南より)

- 第17図版 1. 小森山支群第61号墳周溝内遺物出土状況
2. 小森山支群第64号墳墳丘断面(Hトレンチ・北東より)
- 第18図版 1. 小森山支群第65号墳全景(南より)
2. 小森山支群第65号墳後円部周溝プラン確認状況(南西より)
- 第19図版 1. 小森山支群第65号墳前方部コーナー・周溝プラン確認状況(北西より)
2. 小森山支群第65号墳後円部周溝内遺物出土状況(南より)
- 第20図版 1. 小森山支群第77号墳調査前全景(東より)
2. 小森山支群第77号墳主休部・周溝プラン検出状況(西より)
- 第21図版 1. 小森山支群第77号墳刀子出土状況(西より)
2. 小森山支群第77号墳同上拡大
- 第22図版 1. 小森山支群第77号墳主休部土層断面(西より)
2. 小森山支群第77号墳同上拡大
- 第23図版 1. 小森山支群第77号墳主休部完掘状況(西より)
2. 小森山支群第77号墳周溝土層断面(西より)
- 第24図版 1. 小森山支群第98号墳調査前全景(北西より)
2. 小森山支群第98号墳同上(北より)
- 第25図版 1. 小森山支群第98号墳墳頂発掘区(南西より)
2. 小森山支群第98号墳主休部検出状況(北西より)
- 第26図版 1. 小森山支群第98号墳墓壇内横断面
2. 小森山支群第98号墳同上
- 第27図版 1. 小森山支群第98号墳炭化物分布状況(Ⅱ区・南東より)
2. 小森山支群第98号墳炭化物分布状況(Ⅰ区・南東より)
3. 小森山支群第98号墳調査区全景(北西より)
- 第28図版 1. 小森山支群第98号墳主休部検出状況(南東より)
- 第29図版 1. 小森山支群第98号墳墓壇北側側壁炭化材出土状況(南西より)
2. 小森山支群第98号墳墓壇南側側壁炭化材出土状況(東より)
3. 小森山支群第98号墳同上拡大
- 第30図版 1. 小森山支群第98号墳掘出土状況(北東より)
2. 小森山支群第98号墳Ⅰ区延長トレンチ土層断面(東より)
- 第31図版 1. 小森山支群第98号墳2トレンチ周溝完掘状況(北東より)
2. 小森山支群第98号墳3トレンチ拡張区完掘状況(南西より)
- 第32図版 1. 小森山支群第98号墳前方部周溝検出状況(北西より)
2. 小森山支群第98号墳南側くびれ部周溝検出状況(北西より)
- 第33図版 1. 小森山支群第98号墳12トレンチ完掘状況(東より)
2. 小森山支群第98号墳後円部北側周溝検出状況(西より)

- 第34図版 1. 小森山支群第98号墳14トレンチ土師器出土状況(北より)
2. 小森山支群第98号墳墳丘復元状況(北西より)
- 第35図版 1. 鷹待場支群第106号墳調査前状況
2. 鷹待場支群第106号墳主体部確認状況(東より)
- 第36図版 1. 鷹待場支群第106号墳主体部確認状況(西より)
2. 鷹待場支群第106号墳土層断面(拡大)
- 第37図版 1. 鷹待場支群第106号墳F調査区(北より)
2. 鷹待場支群第106号墳J調査区(北西より)
- 第38図版 1. 鷹待場支群第186号墳調査前全景(北より)
2. 鷹待場支群第186号墳L調査区(南東より)
- 第39図版 1. 鷹待場支群第186号墳M調査区土層断面(東より)
2. 鷹待場支群第186号墳N調査区土層断面(東より)
- 第40図版 1. 薬師沢支群第143号墳調査前全景(北東より)
2. 薬師沢支群第143号墳表土除去後状況(北東より)
- 第41図版 1. 薬師沢支群第143号墳主体部基礎確認状況(北より)
2. 薬師沢支群第143号墳同上拡大(東より)
- 第42図版 1. 薬師沢支群第143号墳主体部基礎プランおよび土層断面(南東より)
2. 薬師沢支群第143号墳基礎掘り下げ状況(東より)
- 第43図版 1. 薬師沢支群第143号墳基礎プラン覆土除去後状況(東より)
2. 薬師沢支群第143号墳棺プラン検出状況(西より)
- 第44図版 1. 薬師沢支群第143号墳副葬品出土状況(東より)
2. 薬師沢支群第143号墳主体部完掘状況(東より)
- 第45図版 1. 薬師沢支群第143号墳鉄器出土状況
2. 薬師沢支群第143号墳埴器出土状況
- 第46図版 1. 薬師沢支群第145号墳西側周溝調査前状況(南より)
2. 薬師沢支群第145号墳調査前全景(北西より)
- 第47図版 1. 薬師沢支群第145号墳周溝部調査区(南東より)
2. 薬師沢支群第145号墳同上拡大
- 第48図版 第61号墳出土遺物・X線写真
- 第49図版 第40号墳出土遺物・第64号墳出土遺物・第77号墳出土遺物・第143号墳出土遺物
- 第50図版 第143号墳出土遺物
- 第51図版 第143号墳出土遺物

山形県川西町 下小松古墳群(1)

第1章 下小松古墳群研究の意義

第1節 下小松古墳群研究の意義

下小松古墳群は、山形県東置賜郡川西町下小松に存在する古墳群である。古墳は総数で約200基といわれるが、分布調査の完了していない部分があって、その数はまだ確定していない。下小松古墳群は、古墳各々のまよりから見て、下小松丘陵の南から尼が沢支群・小森山支群・鷹待場支群・薬師沢支群・永松寺支群の五支群に分けることができる。この中で、発掘調査を実施していない尼が沢支群と永松寺支群は、古墳群としての確認を得ていないし、第1章第2節で述べるように、かつての発掘によって得られた資料が平安時代以降のものを含んでいるから、墳丘を持っているものの、単純に古墳とは断定できないものがある。従って、現在のところ上記二支群を除く小森山・鷹待場・薬師沢の各支群と、小森山と鷹待場の中間地点にある小支群とが、下小松古墳群と呼べるものと考えている。しかし、今後の調査によっては、なお変更せざるをえない状況が想定できる。

下小松古墳群が、ともあれ計200基近い古墳によって構成されているとすれば、東日本でも有数の、東北地方では最大の古墳群といえることができる。過去10年以上にわたって長野県大室古墳群の調査を続けてきたわれわれにとって、大室古墳群との比較のうえで、おそらく年代や被葬者の性格の異なる下小松古墳群についてその内容を究明したくなるのは当然のことであった。

以前より前方後方墳を全国的な規模で研究してきた中で、小森山支群の眼下に所在する天神森前方後方墳や、米沢市法領塚前方後方墳、さらには南陽市稲荷森前方後円墳は、東北南部における古墳文化の開始について多くの問題を提起するものとして注目してきた。さらに、近年になって明らかにされた南陽市灌生田古墳群は、前方後方形周溝墓を含む初期古墳として、東北南部における古墳文化開始についての重要な資料を提供した。川西町天神森古墳をはじめとする東北地方南部の初期古墳は、いずれも4世紀代の築造と考えられている。しかし下小松古墳群については、いまだにその築造年代の上限が確定できていない。わずかに鷹待場支群第186号墳の墳丘出土の底部穿孔土器に5世紀代前半の要素を見とれるにすぎず、依然として下小松古墳群開始時期についてはそれを推定する手がかりを得ていない。置賜盆地全体の中で、というよりも天神森古墳と下小松古墳群との時間的

な継続性を追求することが、東北地方南部での古墳文化定着の経緯を解明する糸口となるであろうことはいうまでもない。

一群集墳が、3～4支群に分かれて築造されることには、もちろん年代的な差異や被葬者の性格に各々相異があると考えられる。各々の支群中の古墳に共通する現象が抽出できるとすれば、各古墳間の有機的関係を推定しうるであろう。総数約200基という古墳数は、川西町周辺といった狭い範囲での被葬者を考えるのではなく、置賜盆地全体のこととして理解しなければ合理性を欠くことになる。いままでの調査結果からすると、下小松古墳群に見られる内部主体の中心は「木棺直葬」あるいはやや大規模な土壌中に木棺を取める方法であり、石材を用いた内部主体は見られない。置賜盆地の東側部分、米沢市戸塚山に展開する戸塚山古墳群には箱形石棺を内部主体とするものが見られるから、年代的な比較検討を推し進める中で、石材の有無といった自然条件にのみ左右されたのではない古墳築造の歴史的過程を見ることができよう。また、高島町安久津古墳群には凝灰岩を用いた載石による横穴式石室も存在するから、置賜盆地全体の中で、古墳被葬者の生前の政治的な領域分布を推定する手がかりが得られる。その中で、下小松古墳群の古墳総数は何を意味するのだろうか。群集墳の多くは、その被葬者群に特定な集団を想定するべきであろうか。後に出羽国置賜郡衛跡と推定される道伝遺跡が出現する背景の一つとして、下小松古墳群があげられるとすれば、なおさら下小松古墳群の被葬者群の本拠地としての川西町周辺に注目しなければならないだろう。

第2節 下小松古墳群調査・研究抄史

下小松古墳群は、地元の人々の間でかなり以前から墳丘の存在が知られていたらしい。最初の発掘は1923（大正12）年、後藤忠恵・平田源内・平田孫太郎の三氏によるもので、薬師沢支群の中の一辺22mの方墳を対象とし、60cm四方の板石を蓋とした須恵器系の壘を得たという。同じ頃に尼が沢支群において須恵器系の印花文四耳壺と鉄製短筒が出土している。

1930（昭和5）年8月、小森山支群中の円墳から鉄剣2口と骨片が発掘されたということがその状況は判然としなない。このことについては、小森山在住の江口家を中心となって発掘したと伝えられるが詳細は不明である。

下小松古墳群の分布図を最初に作成されたのは安倍三郎氏である。安倍氏は1931（昭和6）年7月から1948（昭和23）年4月までに下小松丘陵一帯を踏査され、宇切図（1：600）に墳丘の分布を記載した。この分布調査によると尼が沢支群には97基の円形・方形の塚が記録されている。小森山支群には70基、鷹待塚支群には9基、薬師沢支群には52基の円形の塚が記録されている。

下小松古墳群が最初に紹介されたのは1938（昭和13）年7月に刊行された「東置賜郡史」においてである。同書中に、西村眞次氏が「置賜盆地の古代文化」と題する文中に「下小松古墳群」としての記載がある。那史執筆に際して尼が沢支群中の一基を発掘したが、何の発見もなかったことを記載している。また、それまで発見されていた資料、すなわち須恵器系の壘や壺などを挙げて、下小松古墳群は平安時代後期から鎌倉時代早期のものとして推定した。その後、「羽陽文化」32号（1956・昭和31年10月刊）に高橋聖治氏が「小松の墳丘群考」と題して下小松古墳群を取り上げ、二墳連続に造られた「瓢塚」の形をした墳丘があるとの指摘があるが、古墳（前方後円墳）との断定には至っていない。

1977（昭和52）年11月の新聞記事に「減ってきた古墳群」として取り上げられ、五十嵐不二雄氏が300基を超した古墳群が120基に減少したとする記事があった。

下小松古墳群を対象として川西町教育委員会が最初に発掘調査を実施したのは1979（昭和54）年である。この調査は尼が沢支群の中の一辺7mの方墳を呈する塚を対象とした。発掘調査の結果、中国の流来銭をもつ火葬壺、供養塔、土葬墓など、いずれも中世の塚であることが確認された。この調査報告は川西町文化財調査報告書・第一集「千松寺遺跡」の中に取められている。次いで1983（昭和58）年秋に下小松丘陵の踏査を実施した。この年に天神森古墳の確認調査をも実施しているが、下小松古墳群については安倍三郎氏による分布図をもとに踏査し、約200基の墳丘の中に前方後円墳15基を確認することができた。川西町教育委員会では下小松古墳群を構成するものは中世の塚を含む部分があるものの、全体として古墳時代に属するものと判断するに至ったのである。しかし、当時、山形県内には前方後円墳は3基しか確認されていない状況であり、山形県在住の研究者間でもなお「中世塚」との見方をとる部分もあった。

前方後円墳の墳形を確認したものの、古墳とは断定しえない状況を打破するのは、発掘調査以外にはないと判断した川西町教育委員会は1985（昭和60）年6月より国庫補助を得て重要遺跡確認調査として小森山支群第61号墳（前方後円墳）・第64号墳（円墳）の発掘調

査を行なった。鉄製大刀・鉄鎌・土師器の発見により第61号墳が紛れもない古墳であることや、土師器によって古墳築造年代が6世紀前半に比定できることなどの大きな成果を得た。

1986(昭和61)年には唐待場支群第106号・第186号墳の二基の発掘調査によって底部穿孔蓋形土器片を得て、5世紀代の築造によることが判明した。次いで、1987(昭和62)年に薬師沢支群第143号墳(円墳)の発掘調査を実施して銅鏡・鉄鎌などを得た。

1988(昭和63)年以降は小森山支群の環境整備を中心に調査を進めることとなり、第65号墳・第77号墳の発掘調査と復元整備を実施してきた。1990(平成2)年からは川西町と明治大学と合同調査を実施する運びとなり、小森山支群第98号・第40号墳(いずれも前方後円墳)の発掘調査を継続し今日に至っている。

第3節 調査にいたるまでの経過

1. 川西町天神森古墳の指定まで

山形県に大形前方後円墳が確認されたという情報を大塚が最初に耳にしたのは1977年(昭和52)年秋のことであった。それは南陽市長岡にある墳丘長96mの稲荷森古墳のことであった。日本海沿岸地方最北限の前方後円墳として、学界の注目を浴びたことはいまでもない。稲荷森古墳については柏倉亮吉氏が1961(昭和36)年に調査を行なったが、前方後円墳とする最終的な結論は控えられた。

1977(昭和52)年4月から5月にかけて山形県史編さん事業の一環として測量が実施され、前方後円墳であることが県下の研究者によって承認されたのであった。その後、稲荷森古墳については1978(昭和53)年に第一次発掘調査、1979(昭和54)年に第二次発掘調査が実施され、1987(昭和62)年からは古墳整備のための調査が進行し、1988(昭和63)年に国史跡の指定を受けた。

一方、山形県米沢市においては奥羽本線置賜駅の東南方にある戸塚山頂には、56mの墳丘を有する前方後円墳139号墳のほか、2基の帆立貝式古墳が確認され、1982(昭和57)年に帆立貝式とする137号墳の発掘が行なわれた。137号墳の主体部は女性を埋葬した箱型石棺であり、山形県の古墳時代研究に重要な資料を提供した。

この頃、大塚は米沢市教育委員会の手塚孝氏が主宰する「まんぎり会」の要請をうけて、

米沢市戸塚山古墳群を見学し、東北地方の古墳について意見交換を行なった。その折に大塚が知ったことは、山形県における前方後円(方)墳・円墳・方墳として確実な例は、南陽市稲荷森古墳・米沢市戸塚山古墳群あるいは古くから発掘された赤湯古墳群など、きわめて限定的に認識されていることであった。川西町の天神森古墳は加藤徳氏の判断もあり前方後方墳として理解していることも知った。

川西町では1979(昭和54)年以来、置賜郡街跡とされる道伝遺跡の調査が行なわれ、古墳や古代地方官衙の歴史的環境への理解が急速に深まったと考えられる。

川西町天神森古墳が間違いない古墳なのか否か、とくに前方後方形なのかどうか、山形県内の研究者の間には疑問が存在していたようである。1983(昭和58)年8月に川西町教育委員会は、天神森古墳の墳丘確認調査を実施することにになり、調査指導委員に柏倉亮吉氏と大塚が依頼を受け、8月8日に大塚は調査中の天神森古墳を視察した。周堀が存在し、墳丘が盛土であること、前方部北側くびれ部の墳裾付近からは、底部穿孔の二重口縁蓋形土器片が出土し、古墳時代前期に属する前方後方墳であることが確認された。

出土土器の型式からいって、日本海側の東北最北の前方後円墳・稲荷森古墳より築造年代が先行する天神森古墳の確認は、東北古墳文化研究の新しい幕あけとなるものであった。

1983(昭和58)年12月21日に天神森古墳は川西町の指定史跡となった。次いで翌年の1984(昭和59)年6月21日に県史跡の指定を受け、東置賜地方に最初に出現した古墳が前方後方墳であったことが確実となった。この考古学上の意義は、広く東日本の各地で古墳出現期の墳丘形態が、ほぼ一様に前方後方形を採用していることと同様であり、川西町の古墳様相も東国各地の古墳様相と相通じるものという予測を私たちに抱かせたのであった。

2. 下小松古墳群の解明へ

川西町天神森古墳が町指定の史跡となり、さらに翌年の1984(昭和59)年に県指定史跡となっても、県内研究者のすべてが山形県の古墳への理解を根本的に変えたものではなかった。川西町では前に指摘したごとく、道伝遺跡のようなきわめて重要な遺跡が存在したことから、町内の遺跡分布調査がすでに1983(昭和58)年から開始されていた。大塚は川西町の文化財関係者に天神森前方後方墳に後続する古墳の存在することこそ、むしろ一般的な歴史的様相であることを伝え、古墳の有無をたずねると即座に下小松丘陵の名を挙げるのであった。1983(昭和58)年の川西町の分布調査の結果によると、川西町の西側下小松

山の丘陵上には前方後円墳15基を含む200基余の大小の古墳が確認されている。これらの古墳は小森山・鷹待場・薬師沢とよばれる三支丘にグループをつつて立地しており、これまでの古墳群研究の方式に沿って、小森山支群・鷹待場支群・薬師沢支群と称されている。

これら3支群のうち小森山支群内にのみ15基の前方後円墳が存在し、多くの円墳・方墳と共存して支群を形成している。また他の2支群はいずれも円墳と方墳とで構成されている。

小森山支群の前方後円墳の中で最大規模を示すのは、墳丘長35.5mの第79号墳であり、発掘された第61号墳は25.5m、小型例では20m前後である。

下小松丘陵上に立地する古墳に対しては、山形県内の考古学研究者である亀田高明・手塚孝氏は否定的に考え、「中世前後における出羽三山信仰の修験道に係わる供養塚的な遺構とする。また両氏は小森山を含めた下小松山丘陵(純山丘陵地帯といわれている)には「多くの中世墳墓や信仰的な塚群」があって、川西町史でも明らかにしていると説く。その上で「これまで調査した塚群の形態から前方後円墳類似型を有する形状を示す塚が存在していることも事実であり、思いきって言う川西町の小森山塚群も含めてその類に属するものと考えている」と主張されている。

以上のような川西町をはじめ南陽市などの丘陵根上に分布している前方後円・前方後方型の墳丘は、古墳ではなく中世の塚とする考え方を提起している。

川西町当局は下小松山一帯に分布する墳丘が古墳か中世の塚かという相異なる見解の中で、考古学的な学術調査を実施し、遺跡に関する正確な情報と分析結果を得ることを決断したのであった。1985(昭和60)年5月13日から7月25日にわたり川西町下小松山舞台山1914~11番地に所在する小森山支群第61号前方後円墳と第64号円墳の発掘調査が行われた。

川西町文化財専門員の藤田有宣氏が調査担当者となり、当時、山形県考古学会会長・米沢女子短期大学長であった柏倉亮吉氏と県考古学会副会長の加藤稔氏ならびに大塚が特別調査員となって調査体制が組まれた。発掘調査中の6月21日大塚は現地におもむき、第61号墳の後円部の墳頂下において、1号・2号の2例の木棺直葬土壌を確認した。さらに1号木棺内には長さ1.05mの鉄刀をはじめ鉄鎌その他鉄製品が副葬され、2号主体も木棺直葬の土壌墓であった。なお第61号墳の南側くびれ部付近の周溝部分に、わずかな高まりがあることに気付く。調査最終段階に発掘することを頼んで帰京した。後日、発掘によって

古墳時代の供獻土師器が出土し、第61号墳の埋葬年代の考定に貢献することとなった。

15基の前方後円墳の中の1基が中世の塚ではなく、まぎれもない6世紀初葉の古墳であったという確認の意義は大きい。第61号墳に接する第64号円墳もまた塚ではなく古墳であった。下小松古墳群の全体の性格を把握するためには、鷹待場および薬師沢両支群の内容についても検討を加える必要が生じてきた。

川西町教育委員会は大塚の助言を受けながら、1986(昭和61)年5月19日から9月18日の間に下小松山舞台山1933-33-34、字薬師沢1938-1に所在する鷹待場支群第105・106・186号墳の発掘調査を実施した。今回も柏倉亮吉・加藤稔氏とともに大塚が特別調査員として参画した。また調査にあたっては山形県教育庁文化課の指導を受けている。

鷹待場支群は外形観察によって方墳14基、円墳17基の計31基から形成され、前方後円墳を含まないことが特徴である。調査主任には川西町教育委員会の藤田有宣氏があり、月山隆弘氏が補助をつとめた。

調査の結果、第106・186号墳とともに方墳であり、第106号墳の割竹形木棺直葬の主体部は全長6mを超えるものであった。木棺内部は未発掘であるが、墳頂部表土層下および墳丘周溝から土師器と須恵器が出土し、土師器の中には底部穿孔型土器も含まれていた。

第105号墳は盛土によるものであるが遺構は未発見であった。

第186号墳では主体部は確認されなかったが、墳丘各調査区から土師器片が出土し、蓋笠IIA~III式土器とされる底部穿孔土器も含まれていた。以上の調査結果にもとづけば、第106・186号墳の両古墳と第105号円墳も、古墳として認めなければならないと思われる。つまり鷹待場支群の墳丘群の中には、少なくとも古墳が含まれていることが確実であり、中世の塚としてのみ考定することは誤りであると思う。

川西町は鷹待場支群における考古学上の所見によって、薬師沢支群の性格を究明しなければならなくなった。1987(昭和62)年6月15日より8月6日の予定で、川西町下小松薬師沢1936-1、1936-9地内にある薬師沢支群第143・145号墳の発掘調査を実施した。調査体制は前年と同様に川西町教育委員会が調査主体となり、調査は社会教育課の藤田有宣氏が担当し、大塚らは調査指導委員として参加し、山形県教育庁文化課・川西町文化財保護協会をはじめ奈良県の元興寺文化財研究所の調査協力を得た。

第143号墳は直径13.5m、高さ約1.5mの円墳で内部主体は長さ2.65m、幅1mの木棺直葬であった。内部から面積約5cmの青銅製鋸歯文鏡・鉄剣・鉄鎌・刀子・櫛・鉄鎌先など

が発見され、墳丘周溝内から土師器が出土している。

第145号墳は群中最大規模の円墳で径23m、高さ3mであるが、周溝内から須恵器片が発見されただけで主体部の痕跡はなく、古墳としての断定を下されていない。周溝内から若干の平石が発見されているが、第143号墳と同様の傾向であることが報告された。

1988（昭和63）年6月17日から11月10日におたり小森山支群第65号前方後円墳の墳丘確認調査が行なわれた。1985年に調査した第61号前方後円墳の東側8mに位置する墳丘長22mの前方後円墳であり、墳丘の復原と整備を目的とした調査であり、内部主体の発掘は実施していない。周溝内からは土師器片80個が発見された。

以上のように山形県とくに東置賜地方における古墳文化の展開については、少なくとも西暦4世紀代以来の歴史的发見の系譜を辿ることが可能になってきた。羽黒山信仰にかかわる修験道関係の中世遺跡が存在することは事実であるが、東北地方とりわけ山形県下に畿内地方と強い政治的関係を背景にもつとされる前方後円墳の存在に、山形県なるがゆえに否定的に捉えるという方向性は正しくないとと思われる。すでに米沢市法領塚古墳をはじめ南陽市蒲生田古墳群のように、4世紀代にまで遡る前方後方墳が確認されており川西町の下小松古墳群の15基の前方後円墳と他の多くの円墳・方墳のもっている歴史的な意義が大きく浮かび上がってくる。以上のような問題点を重要視した明治大学考古学研究室の大塚と小林は、1989（平成元）年以来、下小松古墳群の整備と活用方法について川西町当局といたくも協議を行ない、その方向性を検討した。その結果、古墳群の全体像と性格を採る基礎的な考古学資料がなお不十分であるとの考えが一致し、1990（平成2）年から数年にかけ川西町と明治大学との共同調査研究を継続することに決定した。調査費用も両者が応分に負担することとして、明治大学側は明治大学人文科学研究所重点共同研究費をこれにあてることとした。

1990（平成2）年7月23日から8月5日におたり小森山支群第98号墳の墳丘調査からこの共同研究は出発した。墳丘長26.5mの前方後円墳からは、墳頂部から須恵器片、周溝内から土師器が発見され、西暦5世紀末から6世紀前半頃の築造とする考え方が提示された。1991（平成3）年は8月19日から9月10日を期限として第2次調査が実施された。この調査は内部主体の検出を目的とした。全長6.48m、幅1.75m、深さ2.05mという山形県下最大規模の木棺直葬例が発見された。副葬品には鉄鏡片・木製漆塗椀・弓・不明革製品などがあり、須恵器・土師器の型式から6世紀後半頃の埋葬年代が与えられている。

小森山支群第98号墳の第3次調査は1992（平成4）年7月25日から8月8日まで行なわれ、前方部をはじめ墳丘の補足調査を実施して終了した。

小森山支群における前方後円墳の分布状態を見ると、丘陵の地形上からさらに数グループに分かれている。第61・65号墳を中核とするものと第98号墳のグループ、さらに南端部の第40号墳を中心とするグループなどに分類できる。

1994（平成6）年夏には第40号前方後円墳の発掘を実施した。全長約22mの墳丘の後円部には主軸平行に木棺直葬墓壙2基が存在した。大型墓壙の西側からは刀子1点、やや小型の東側墓壙から鉄刀1点が発見され、そのほか土師器なども出土した。

以上のように1985（昭和60）年から開始された小森山支群第61・64・65号墳、鷹待場支群第105・106・186号墳の調査は4カ年を経過した1988（昭和63）年に終り、その後、明治大学と川西町の合同調査に引き継がれ、小森山支群第40・98号墳の前方後円墳の調査が終了したのである。

下小松古墳群の全域が保存対象となっており、それらのすべてを発掘することは考えていないが、なお学術上明確にしなければならぬ点が多いことも事実である。これまでの経過をふり返ってみると、15基もの前方後円墳の密集する古墳群は、山形県は勿論のこと東北地方にもなく、やや異質の感があつたために、前方後円形の中世の塚とする決めつけが行なわれてきたものと理解している。従って下小松古墳群の調査の結果が、山形県の従来の古墳の考え方を再検討する契機になれば幸いだと思う。銅鏡文鏡とはいえ山形県内の数少ない出土鏡の1面が、径10数mという小型円墳に副葬されていた事実が、山形県の古墳の見直しを迫る必要性のあることを雄弁に物語っているように思われる。

第2章 下小松古墳群の概観

第1節 下小松古墳群の地理的環境

下小松古墳群は置賜盆地（米沢盆地）の北西丘陵地帯に位置する。置賜盆地は山形県の西南部にあり南は磐梯山塊、東は駒ヶ岳、素土山・峠田嶽、香城山、二ツ森山、不平等山など1000m級の山塊、西は飯豊山塊にかこまれた標高220mほどの盆地である。盆地の西側を最上川が流れる。

下小松古墳群が立地する場所は、置賜盆地の北西部にあたり、標高270～280mほどの穏やかな丘陵地帯である。置賜盆地の西縁部の玉庭丘陵が北に延びて盆地と接する部分にあたり、玉庭丘陵に源をもつ大川が黒川と合流し最上川に注ぐ沖積平野を眼下におさめ、置賜盆地を一望しうる佳景の地を占めている。

下小松古墳群の占地する丘陵は玉庭丘陵が北に延びて形成する眺山丘陵が盆地西縁と接する部分で、いくつかの支脈を形成する。古墳群はその支脈上に各々わかれて立地している。したがって、各々の支脈に分布する古墳群を便宜的に各支群として捉え、小字名を冠して支群名とすることとしている。

第2節 下小松古墳群の歴史的環境

置賜盆地には、盆地の縁辺部に接した丘陵地帯にいくつかの古墳群が形成されている。盆地中央部の沖積平野には、かなり濃密な各時代におたる遺跡群の存在が推定されるが、調査が行き届いていないこともあって、その全容は知り得ない。近時の顕著な調査例として「おんだし遺跡」が知られ、縄文時代にすでに大規模な遺跡がいとままれていたことが判明している。おんだし遺跡の調査例で知られるごとく、遺跡の本体は、あつい堆積土下に埋没しており、その発見は偶発的な契機がない限り不可能に近いと思われる。遺跡としての古墳は、盆地縁辺部の丘陵末端部にいとなまれることが多いので、その分布状況は比較的よくわかる。

置賜盆地にみられる古墳群は、米沢市東部の戸塚山丘陵を中心とするグループ、高畠町安久津古墳群を中心とするグループの上野山、七両塚古墳群をはじめとするグループ、長



第1図 下小松古墳群周辺の遺跡と地形

1. 下小松古墳群 2. 天神森古墳 3. 道伝遺跡

井市に点在する比較的小規模な古墳群と、さらに下小松古墳群とを指摘しうる。

これら古墳群が成立する基盤として、盆地平野部に立地する米沢市法領塚古墳、天神塚古墳はいずれも前方後方墳であり、稲荷森古墳は前方後円墳で全長90mを超す東北地方でも有数の古墳であり、それら有力古墳を出発点としていることは明らかである。全国的な視野でみると、各地の初期古墳が前方後方墳であることが共通した現象であることは、近時の研究者の一致した見方である。天神塚古墳での墳丘調査によって得られた資料、とくに出土土器の所見からすれば、東北地方の初期土師器、埴輪式土器の仲間として間違いないところであり、編年学的所見と照合して西暦4世紀代中葉をその上限として考えるのが妥当であろう。他の二者については、年代を考察する資料を欠くが、いずれも4世紀代から5世紀初め頃の年代に含めておいてよいのかも知れない。この三古墳が置賜盆地の中に、東・西・北と盤据していることの意味を改めて考えてみる必要がある。

第3章 下小松古墳群の概要

第1節 小森山支群の概要

小森山支群は、丘陵尾根上の最高所、標高約272m付近から南東方向にのびる尾根とその途中の標高約255m付近で南西に派生する尾根上に展開している。

総数83基の古墳が現在確認されており、その内訳は前方後円墳16基、円墳43基、方墳24基である。現在までに前方後円墳4基（第40・61・65・98号墳）、円墳2基（第64・77号墳）を調査しているが、6世紀代をさかのぼる古墳の存在は確認されておらず、支群全体の築造開始年代も6世紀と推測されている。

第2節 鷹待場支群の概要

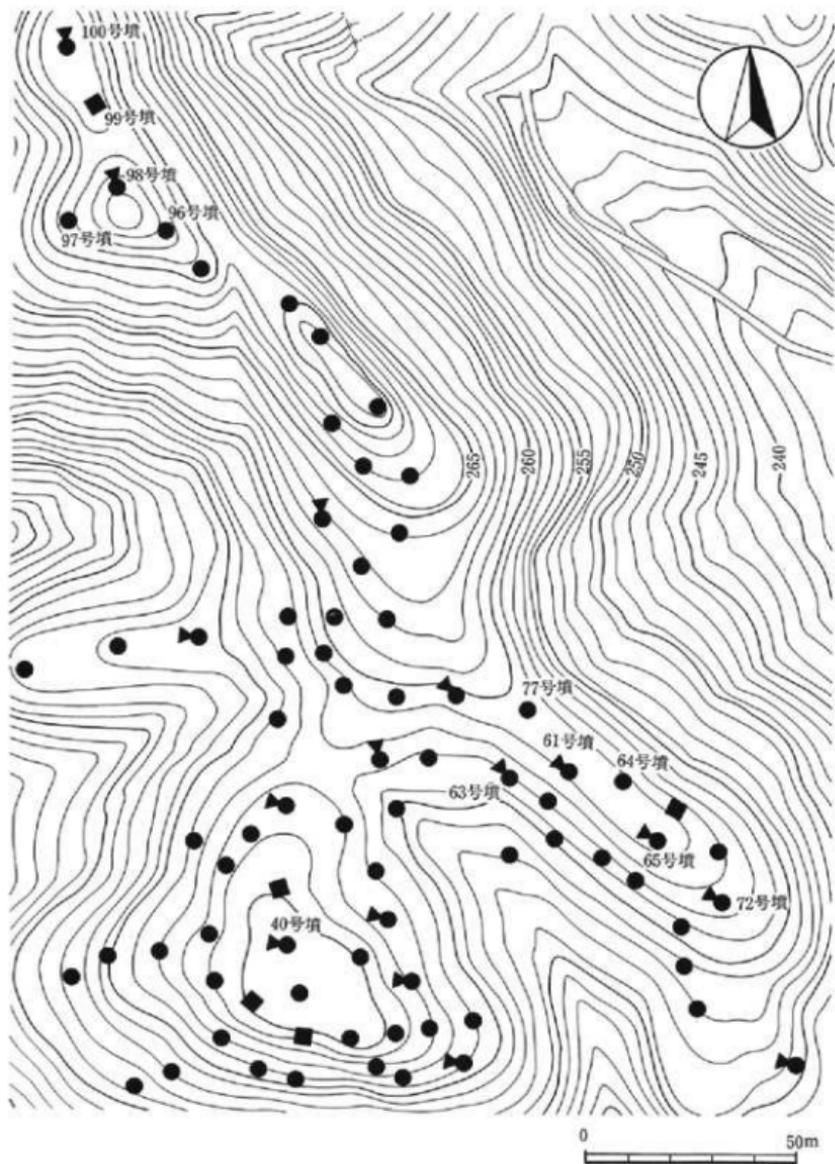
鷹待場支群は、古墳群中、小森山支群と薬師沢支群に挟まれた位置にあり、かつて中間支群とされていたが、現在では地名をとって呼称している。

標高約280m付近から南にのびる尾根の上に存在し、総数33基の古墳が現時点で確認されている。内訳は前方後円墳1基、円墳18基、方墳14基である。現段階で3基の古墳（第105・106・186号墳）を発掘しており、そのうち第186号墳は主体部を確認していないが、底部穿孔壺形土器と推定される土器2片が出土している。

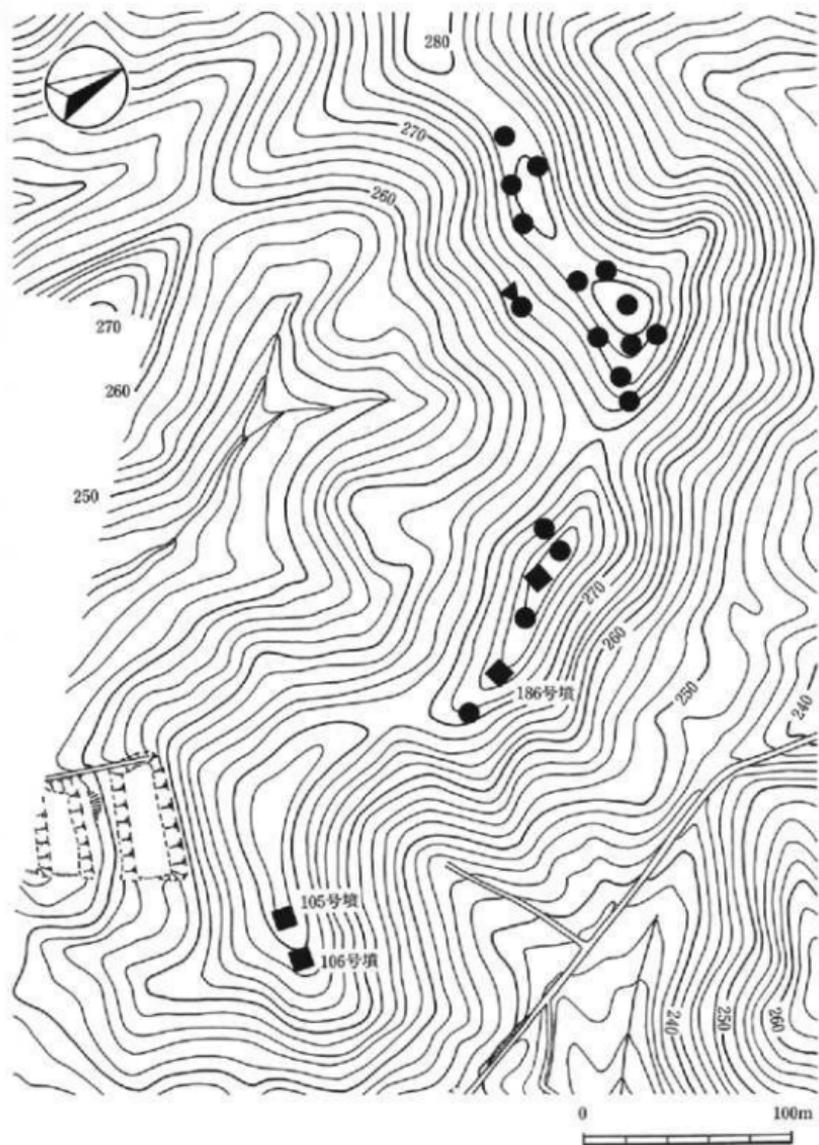
第3節 薬師沢支群の概要

薬師沢支群は、現時点までに総数63基の古墳が確認されており、そのうち円墳が50基、方墳が3基である。前方後円墳は確認されていない。

現在までに、2基の円墳（第143・145号墳）を発掘調査しており、そのうち銅鏡や鉄器類が多数出土して内容が判明した第143号墳は、5世紀末の築造と考えられている。第143号墳は山の緩傾斜面上に立地しており、山の頂部には未発掘の古墳が多数ある。これらの古墳が第143号墳より年代がさかのぼると考えた場合、支群の築造開始年代を5世紀初頭に推測できるものと考えている。



第2図 小森山支群分布図



第3図 鷹待場支群分布図



第4図 秦師沢支群分布図

第4章 下小松古墳群の調査

第1節 小森山支群の調査

第40号墳

第40号墳の調査は、明治大学考古学研究室と川西町教育委員会との合同調査として1993年より開始された。調査期間は、第1次調査1993年7月23日～8月3日、第2次調査1994年7月23日～8月11日である。以下の報告は、これらの調査結果を総合したものである。

調査の目的

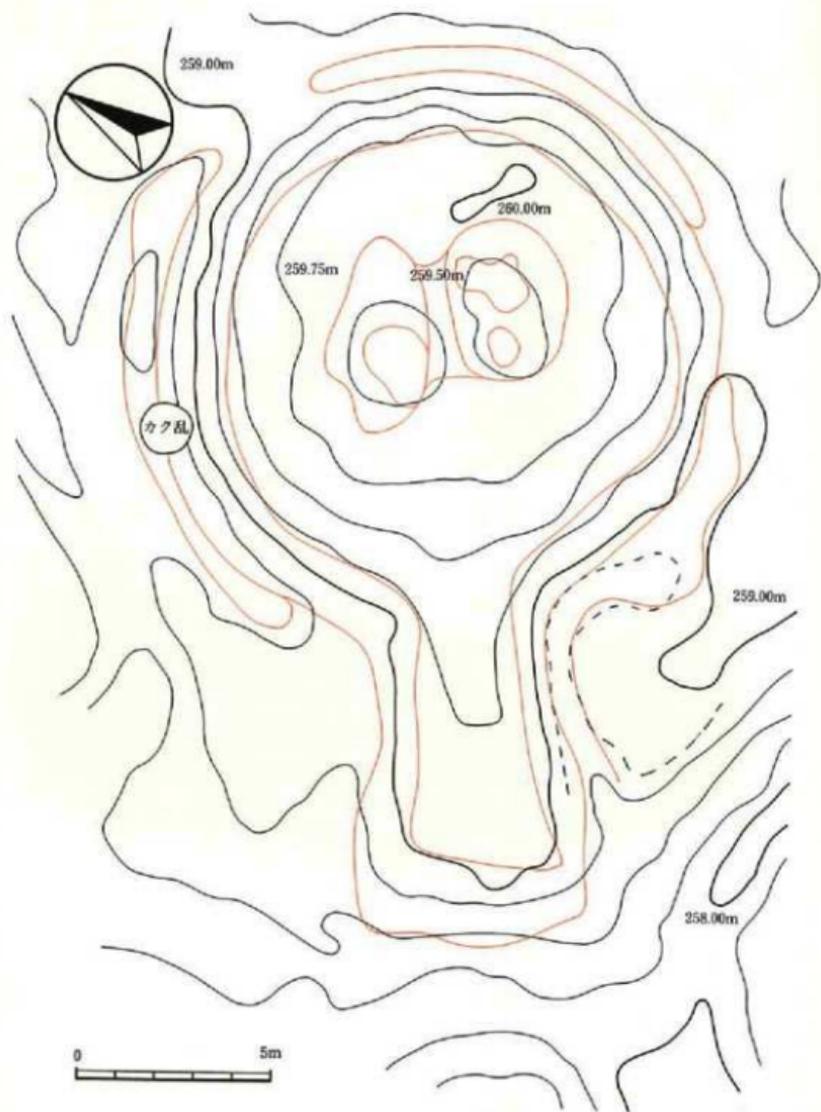
小森山支群の年代的性格を解明する調査の中で、一連の尾根上にある第61・64・65・77・98号墳の年代はいずれも6世紀代以降のものであると把握されつつある。しかし、分布調査によって、この尾根の途中から南西に派生する尾根上にも現在のところ前方後円墳5基、円墳22基、方墳3基、総数30基の古墳が確認されている。調査がすすむにつれて小森山支群の年代的性格を解明するうえで、これらの古墳の年代をすることが調査団の課題となっていた。

第40号墳の墳形は前方後円墳形であり、またこの尾根の最高所に立地することから、小森山支群の築造年代開始の上限を得られるのではないかと推測した。そこで、明治大学考古学研究室と川西町教育委員会は、第40号墳の築造年代および墳丘、埋葬主体の構造の把握を目的として調査を行なった。

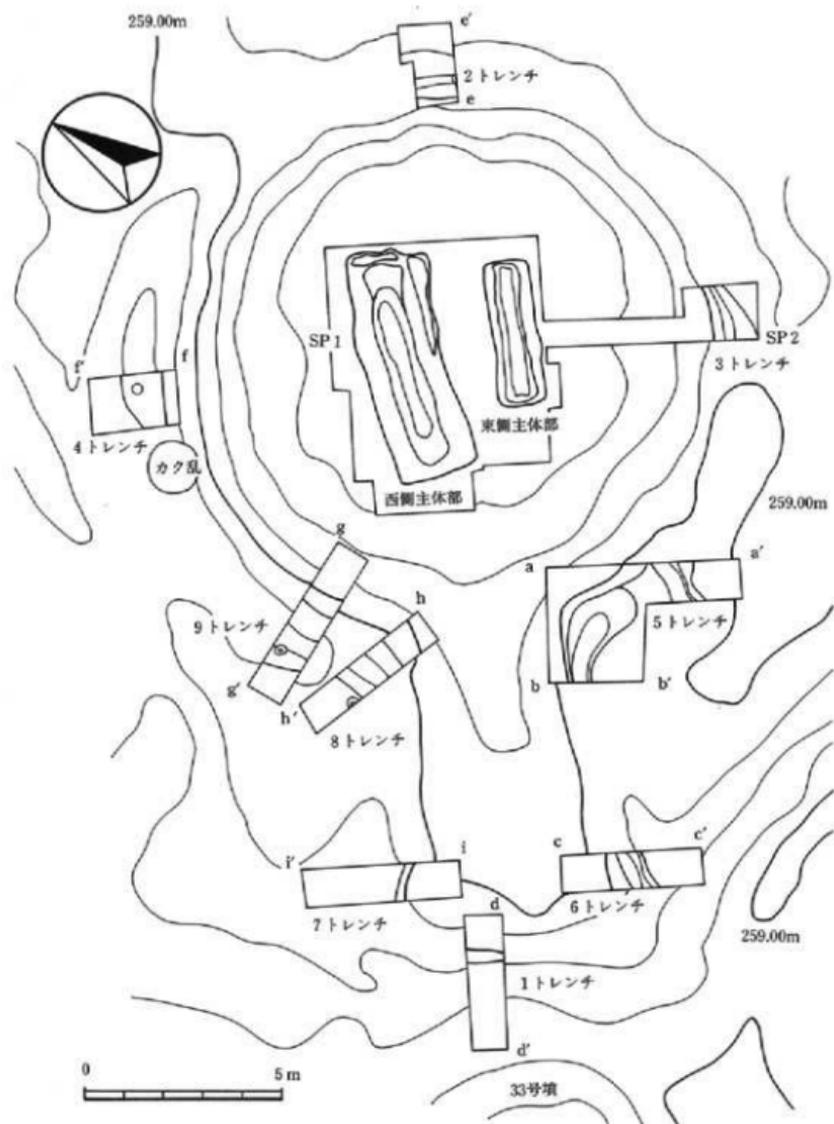
立地

第40号墳は、小森山の南南東にのびる尾根の標高約255m付近から南西に派生する尾根の最高所、後円部の地山面で標高約259mのところに立地する。南西に前方部をむける前方後円墳である。

後円部の北西側には第58号墳（方墳）が、また南東側には第38号墳（円墳）が近接して立地し、前方部前端側には第33号墳（円墳）が、前方部の南東側には第39号墳（円墳）がやはり近接して立地する。

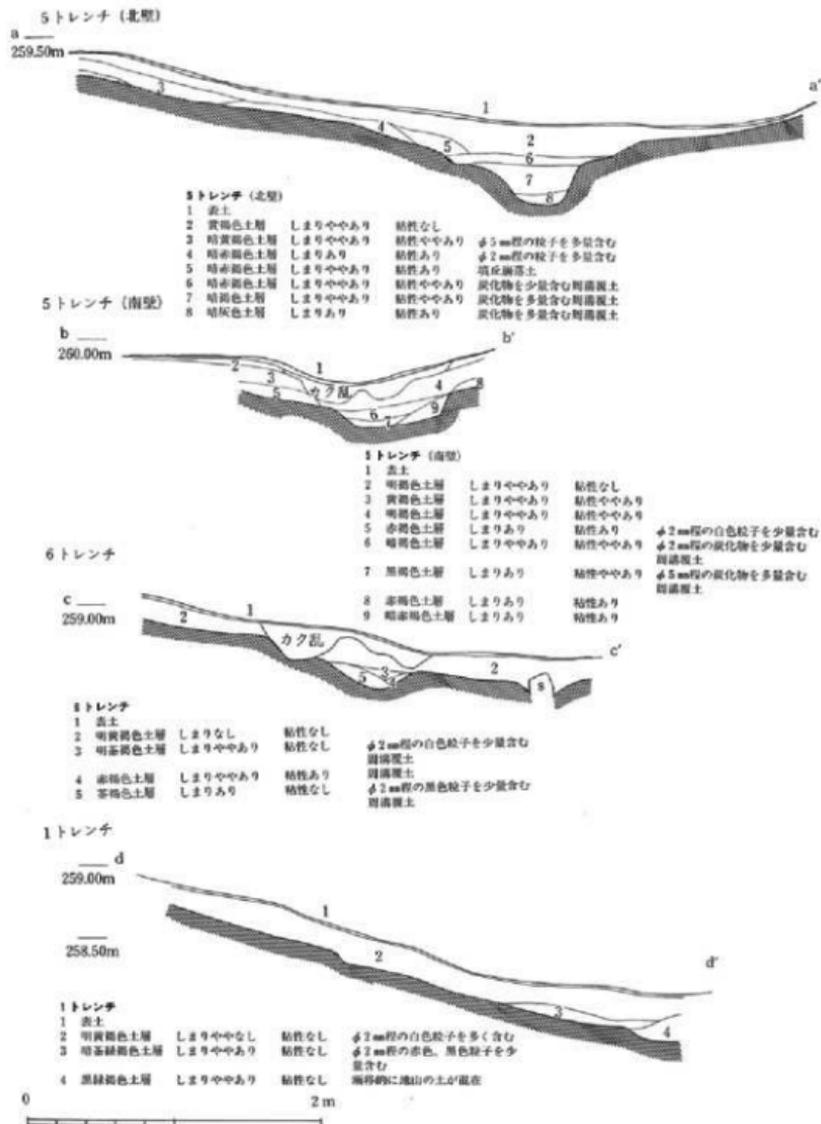


第5図 第40号墳丘測量図

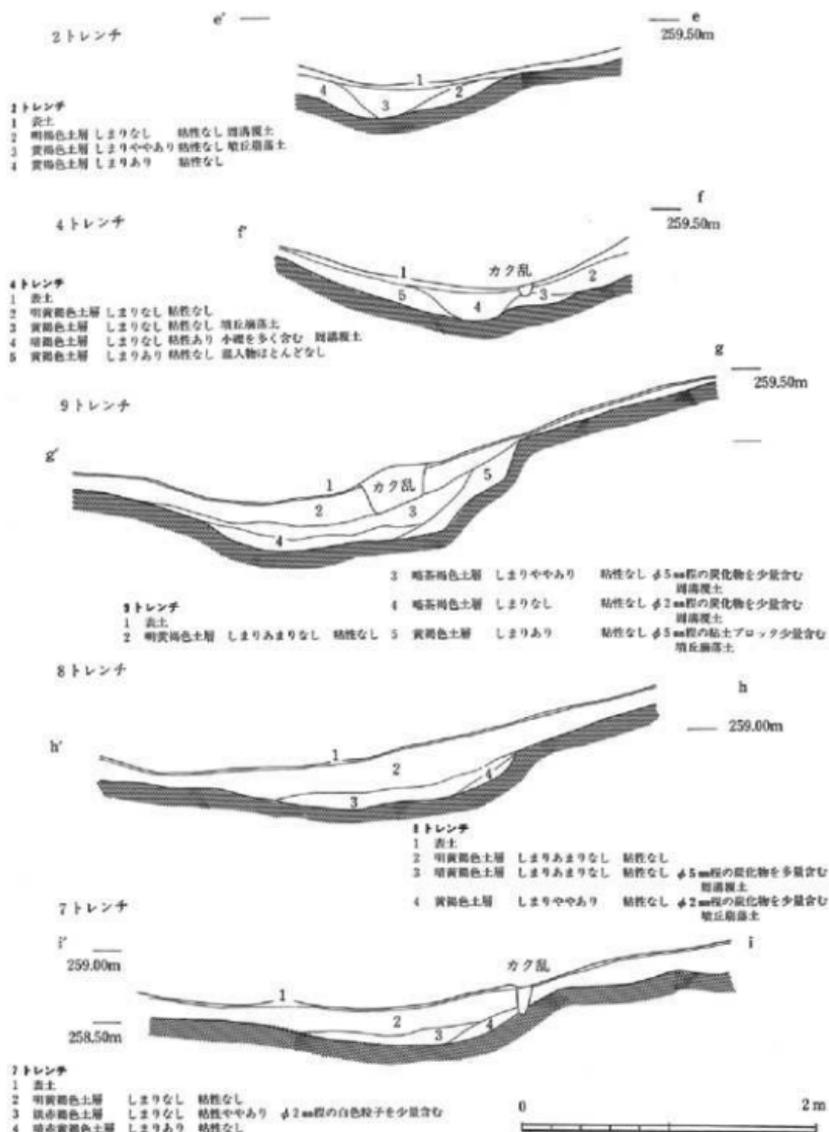


第6図 第40号墳トレンチ配置図

第4章 下小松古墳群の調査



第7-1図 第40号墳セクション図(1)



第7—2図 第40号墳セクション図(2)

調査前の第40号墳は目立った崩落のあともなく、小型ながら墳丘の姿をよくとどめ、周溝の痕跡もはっきり観察することができた。しかし、後円部の墳頂平坦面には二つの大きな落ちこみが認められ、そのために墳頂の中心部が全体的に低く、その周縁がリング状に高まっているという状態であった。このことから第40号墳の主体部はかなり大規模な攪乱を受けたものと当初推定していたが、発掘調査の結果、この二つの落ちこみは後円部墳頂に設けられた二つの墓壇の痕跡であることが判明した。

墳 丘

第40号墳は発掘調査の結果、全長約21.9m、後円部径約14m、周溝底面よりの後円部の高さ約0.4m、くびれ部幅約3.3m、前方部前端幅約5m、前方部高さ0.2mをはかり、現状で後円部と前方部の比高差は約0.7mである。墳丘の主軸は、N-128°-Wであった。しかし後円部平坦面の墳丘築造当時の盛土は、現状よりも高かったものと思われる。また、それ以外の各トレンチで確認された盛土は、0.1mに満たないものであり、ほとんど地山を削りだして構築されたものと考えられる。

調査は、墳丘の規模と周溝の有無および範囲を確認するために、後円部に3本、前方部に3本、くびれ部に3本、計9本のトレンチを設定し、行なった。このうち後円部の3トレンチでは、後円部墳丘の断ち割り調査を行ない、その結果後円部の盛土の状況と墓壇内埋土との関係を知ることができた。つまり、後円部ではまず地山を平らに整地して二つの墓壇をほりこみ、双方の埋葬が終了した時点で後円部全体に盛土を行なっている。よって墓壇は、墳丘築造終了後ではなく、墳丘が未完成の時点で掘られたものであり、埋葬終了後の盛土をもって第40号墳の築造が完了したということになる。また、直接地山面で墓壇を掘りこみ、その後盛土を行なっている点は、後述の同じ小森山支群に属する第61号墳と同様の築造方法である。

墳丘の観察や測量図から、周溝が存在することはほぼ確実であったが、一周するか部分的なものは不明であった。調査の結果、9本のトレンチのうち前方部の1トレンチ・7トレンチを除く、他の全てのトレンチで周溝が確認された。よって第40号墳の周溝は、後円部西側から後円部東側までは一周するが、後円部東側からくびれ部の間と前方部前端から前方部西側の間の2ヵ所で途切れていることになる。

後円部の2・3・4トレンチでは、上幅約0.5~1m、下幅0.2~0.3m、深さ約0.2mの周

溝が確認された。どのトレンチの周溝の底面も緩やかなU字形を描いており、周溝外側の立ち上がりはあまりはっきりとしない。どのトレンチも遺物の出土はなかったが、2・4トレンチで周溝の底面に直径約0.2~0.3m、深さ約0.2mのピットが検出された。土の堆積状況からピットが掘られたのは、第40号墳と同時期と考えられる。

東側くびれ部の5トレンチでは、上幅約0.8m、下幅約0.6m、深さ約0.2mの周溝が確認されたが、周溝は後円部の3トレンチにのびるのではなく、ほぼ後円部とくびれ部の境界のあたりで膨らみをもって収束している。この他に、後円部墳裾付近から上幅約1.1m、下幅約0.4m、深さ約0.4mの溝が、古墳の周溝を横切るような方向に検出されたが、周溝の上場のレベルから掘りくぼめられており、溝の底面は周溝の底部よりも0.4m程深くなっている。トレンチのセクションからどちらも第40号墳と同時期の遺構と考えられるが、遺物の出土はなかった。この性格については不明である。

西側くびれ部の8トレンチでは、上幅約2m、下幅約1.2m、深さ約0.3mの緩やかな断面U字形の周溝が確認された。また、隣接する9トレンチでは、上幅約2.1m、下幅約1.2m、深さ約0.2~0.4mの周溝が検出されている。他のトレンチの周溝は、墳丘裾から緩やかに落ち込み、そのまま緩やかに外側へ立ち上がるのに対して、9トレンチの周溝はある程度の傾斜を有しているのが観察された。8トレンチと9トレンチではそれぞれ、直径約0.2~0.3m、深さ約0.1~0.2mのピットが検出されており、第40号墳の築造と同時期の遺構と思われるが、遺物の出土はなく、その性格などは不明である。

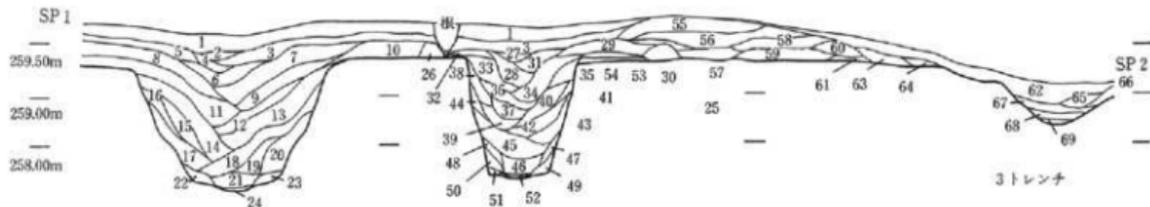
前方部東側の6トレンチでは、上幅約0.6m、下幅約0.2mの周溝が確認された。このトレンチでは周溝外から長さ約30cmほどの河原石が1個検出されたが、性格は不明である。

前方部1トレンチでは、墳丘裾の外側が下方へなだらかに傾斜しており、周溝の立ち上がりは検出されなかった。また、前方部東側に隣接している第33号墳の墳丘裾との関係も確認するに至らなかった。

前方部西側の7トレンチでは、1トレンチと同様、周溝は確認されなかった。このことより、第40号墳の西側の周溝は後円部からくびれ部にかけて徐々に深くなり、くびれ部で最深となってから前方部にかけて消滅することになる。

主 体 部

第40号墳の主体部は先述した通り、後円部墳頂に2基存在することが確認された。この



西側主体部			東側主体部		
1	黄褐色土層	しまり弱	粘性弱	φ3mm程度の小石を少量含む	
2	黄灰色土層	しまり弱	粘性弱		
3	赤褐色土層	しまり弱	粘性弱	φ3mm程度の小石を少量含む	
4	灰赤褐色土層	しまりややあり	粘性弱	礫を少量含む	
5	暗褐色土層	しまりややあり	粘性弱		
6	茶褐色土層	しまりあり	粘性弱		
7	灰赤褐色土層	しまり弱	粘性弱	黄灰色シルトブロックを多量に含む	
8	黄褐色土層	しまり弱	粘性弱		
9	暗褐色土層	しまりややあり	粘性弱	φ3mm程度の小石を少量含む	
10	暗赤褐色土層	しまり弱	粘性弱		
11	灰褐色土層	しまり弱	粘性弱	炭化物を僅かに含む	
12	灰褐色土層	しまりややあり	粘性弱		
13	赤褐色土層	しまり弱	粘性ややあり	黄灰色シルトブロックを多量に含む	
14	暗赤褐色土層	しまりややあり	粘性弱	礫を多量に含む	
15	暗赤褐色土層	しまり弱	粘性ややあり	礫を多量に含む	
16	赤褐色土層	しまりあり	粘性弱	礫を多量に含む	
17	暗赤褐色土層	しまりあり	粘性あり	礫を多量に含む	
18	赤褐色土層	しまり弱	粘性弱	φ3mm程度の礫を多量に含む	
19	赤褐色土層	しまり弱	粘性ややあり		
20	赤褐色土層	しまりあり	粘性ややあり	φ3mm程度の小石を多量に含む	
21	茶褐色土層	しまり弱	粘性あり		
22	黄色土層	しまり弱	粘性あり	地山直上の層	
23	黄色土層	しまり弱	粘性あり	地山直上の層	
24	黄褐色土層	しまりあり	粘性あり	根層	
25	暗赤褐色土層	しまりややあり	粘性なし	白色ブロックが多量に混在	
26	白褐色土層	しまりややあり	粘性なし		
27	茶褐色土層	しまりあり	粘性なし	白色礫を少量含む	
28	黄色土層	しまりなし	粘性なし	白色礫を多量含む	
29	赤褐色土層	しまりあり	粘性なし		
30	白色土層	しまりややあり	粘性なし		
31	黒褐色土層	しまりあり	粘性なし	白色礫、炭化物を少量含む	
32	褐色土層	しまりあり	粘性なし		
33	暗赤褐色土層	しまりややあり	粘性なし	白、黄色礫を多量、炭化物を少量含む	
34	暗赤褐色土層	しまりあり	粘性なし	白、黄色礫を多量に含む	
35	赤褐色土層	しまりなし	粘性なし	白色ブロック少量混在	
36	赤褐色土層	しまりなし	粘性なし	白色礫を少量含む	
37	赤褐色土層	しまりなし	粘性なし	白色ブロック、白色礫少量含む	
38	赤褐色土層	しまりなし	粘性なし	白色ブロックが多量に混在	
39	赤褐色土層	しまりなし	粘性なし	礫、白色ブロックを含まない	
40	褐色土層	しまりなし	粘性なし	白色礫を多量含む	
41	赤褐色土層	しまりなし	粘性なし	白色ブロックがやや多く混在	
42	暗赤褐色土層	しまりなし	粘性なし	白色ブロックが多量に混在	
43	暗赤褐色土層	しまりなし	粘性なし	白色ブロックが部分的に混在	
44	赤褐色土層	しまりなし	粘性なし	白色礫を少量含む	
45	赤褐色土層	しまりなし	粘性なし		
46	赤褐色土層	しまりなし	粘性なし	白色ブロックが多量に混在	
47	赤褐色土層	しまりなし	粘性なし	白色ブロックが多量に混在	
48	暗褐色土層	しまりなし	粘性なし	白色礫を多量に含む	
49	暗赤褐色土層	しまりなし	粘性ややあり	白色ブロックが多量に混在	
50	赤褐色土層	しまりなし	粘性なし	白、黄色礫を少量含む	
51	暗赤褐色土層	しまりなし	粘性ややあり	白色礫を少量含む	
52	赤褐色土層	しまりなし	粘性ややあり	白色礫を少量含む	
53	青灰色粘土層	しまりなし	粘性あり	根層	
54	暗赤褐色土層	しまりなし	粘性ややあり	白色礫を少量含む	
55	赤褐色砂質土層			礫を少量含む	
56	黒赤褐色砂質土層			白色シルトブロック混在	
57	黒赤褐色砂質土層			白色シルトブロックが50%より多く混在	
58	黒赤褐色砂質土層			白色シルトブロックが多く混在 棕色、白色砂粒を含む	
59	暗黄白色砂質土層			φ3mm程度の白色砂粒を含む 炭化物を僅かに含む	
60	黄褐色砂質土層				
61	淡黄褐色砂質土層			φ3mm程度の白色炭化物を少量含む	
62	黄褐色砂質土層			φ3mm程度の白色炭化物を少量含む	
63	淡黄褐色砂質土層			炭化物を僅かに含む	
64	淡黄褐色砂質土層				
65	暗灰色砂質土層			白、黄色礫を多量、炭化物を少量含む	
66	暗灰色砂質土層			白、黄色礫を多量に含む	
67	暗灰色砂質土層			白色ブロック少量混在	
68	黄褐色砂質土層			白色礫を少量含む	
69	暗褐色砂質土層			礫かに粘性を帯びる	

第8図 第40号墳部断面セクション図

ため調査の進行上、後円部西側に位置する大きい方の墓塚を西側主体部、東側に位置する小さい方の墓塚を東側主体部と呼称した。今回の報告においても、その呼称を継続して使用することとした。

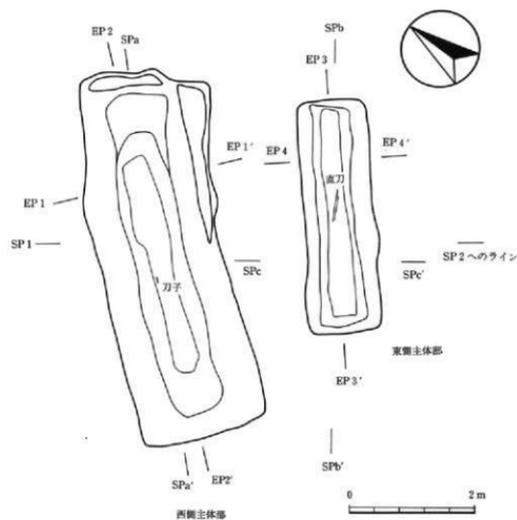
主体部の調査にあたって、後円部平坦面に墳丘主軸平行と直行の十字ベルトを設定し、発掘区を4区画設けて墓塚平面プランを検出した。その結果、西側主体部が墳丘主軸よりもやや北に傾いてはいるものの、墳丘主軸を挟んで配置され、また主軸と並行する形で2基の墓塚が確認された。墓塚主軸方位は、それぞれ西側主体部はN-138°-W、東側主体部はN-132°-Wであった。これらの墓塚の掘り方は、ほぼ259.300mでレベル差もなく切り合いも認められず、両主体部が共有する墓塚主軸直交ベルトにおいても前後関係を確認することはできなかった。したがって、平面プランおよびセクションのいずれからも両主体部の前後関係を決定する根拠は得られなかった。

〈西側主体部〉

西側主体部の墓塚は、掘りこみ面において長さ約6m、幅約1.8m、底面に至って長さ約6m、幅約0.8m、掘りこみ面からの深さは約1.4mをはかる。検出面の平面プランは中央でやや屈曲しているのが観察された。また、墓塚の南側短辺と西側長辺の壁はかなり垂直に掘りこまれているのに対して、北側短辺と東側長辺の壁は途中でわずかな段が存在し緩やかに掘り下げられている。

墓塚を掘り下げた結果、地山を掘り留めて造った断面U字形の棺床が検出された。棺床は長さ約3.5m、幅約0.5m、主軸方位はN-142°-Wで、墓塚主軸よりやや西にふれている。これらのことから、埋葬には割り竹形木棺が使用されたと考えられる。また、北側の棺床端部は丸くおさまっているのが確認されている。副葬品は、棺床中央部より刀子1点が切先を南西側に向け、刃を北西側に向けている状態で出土した。棺床の直上であり、棺内にあったものと考えられる。また、南側中央部の床面近くでは粘土質の灰色土が検出されたが、部分的なものにとどまった。

墓塚主軸直交ベルトのセクションを観察すると、9層・11層までが盛土で、12層以下が埋土と考えられる。盛土・埋土共にシマリは弱く、粘性に欠ける土質であった。ただし、盛土とされる土層を含めて、礫などを多量に含む赤褐色系土層と礫や炭化物などを含む灰褐色系の土層が交互に重なりあって、墓塚底面の中央に向けて、激しく落ち込んでいる状況がかなりはっきりと観察されている。このことから墓塚内には塚のような施設がかつて



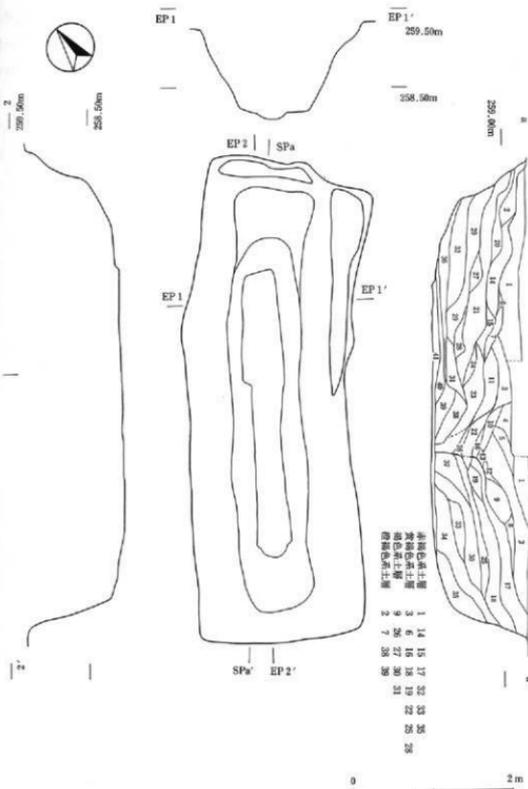
第9図 第40号墳主体部平面図

存在していて、それが朽ちて土層が落ち込んだと推定されるが、第98号墳のような炭化材の検出も見られないため、断定は避けたい。

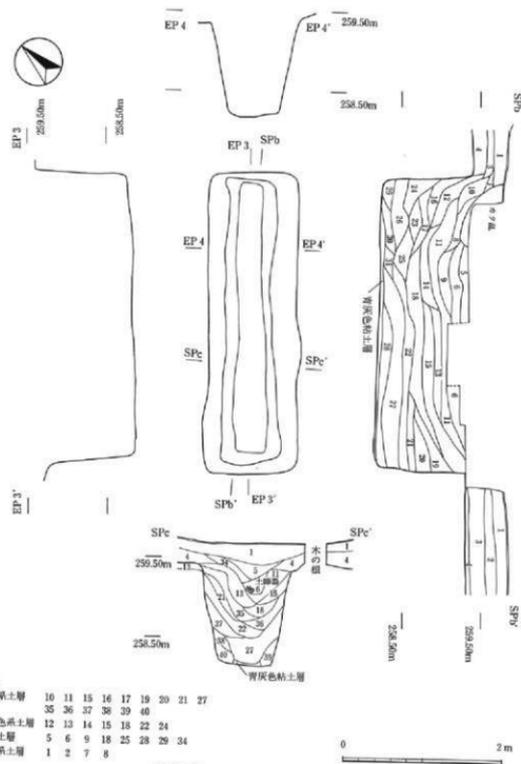
また、墓壇主軸ベルトのセクションにおいて、他のベルトでは見られない暗い灰黄色系の粘性をおびた土層の落ち込みが観察された。このような土質は反対側のセクションでは確認されず、墓壇内南西部のみの範囲でしか見られない。調査時には自然の落ち込みとしてセクションを切ったが、かなり早期の掘りこみの可能性も考えられる。それ以外に、判断しうるだけの材料がないため、その双方の可能性を指摘するにとどまりたい。

〈東側主体部〉

東側主体部の墓壇は、掘りこみ面において長さ約4.7m、幅約1.1m、床面にいたって長さ



第10図 第40号墳西側主体部



(2面共通)

第11図 第40号墳東側主体部

第11図

赤褐色赤土層	10	11	15	16	17	19	20	21	27
明赤褐色赤土層	12	13	14	15	18	22	24		
褐色赤土層	5	6	9	18	25	28	29	34	
黄褐色赤土層	1	2	7	8					

約3.5m、幅約0.6mであった。墓壁の壁はすべてほぼ垂直に掘りこまれている。平面プランはほぼ長方形を呈しており、墓壁を掘り下げてゆく段階で墓壁主軸直交ベルトより土師器片が検出された。この土師器片は、墓壁の埋土と考えられる暗赤褐色系土層と、その後の盛土と考えられる暗灰色土層との境から出土した。このため、埋め土を充填したのちに盛土を行なう前にこの土師器は墓壁上面に配置されたものと推察される。

墓壁を掘り下げた結果、墓壁底部には粘土を用いた断面U字形、長さ約3.3m、幅約0.3mの棺床が確認された。この断面形から、西側主体部と同様に設置された木棺は、割り竹形木棺であると考えられる。粘土棺床は墓壁底面の長軸いっぱいには確認されたが、底部の地山はゆるやかに自然傾斜しており、その傾斜を崩さずに整地し、粘土棺床を前方土にむけて厚くすることで水平を保とうとしていた。逆に、北側は検出が困難なほど粘土は薄いものであった。このような地山整地後に粘土を用いて棺床を構築する方法は、西側主体部の地山を掘り直した棺床構築方法とは異なっている。

遺物は粘土床中央付近から鉄刀が、切先を北東側に向け、刀を北西側に向けている状態で検出された。この鉄刀の配置された場所が棺内か棺の上面かは不明である。鉄刀直下の土には、明らかな棺材痕跡は認められなかった。棺床の粘土上面から出土したことを評価すれば、棺内遺物とも考えられる。

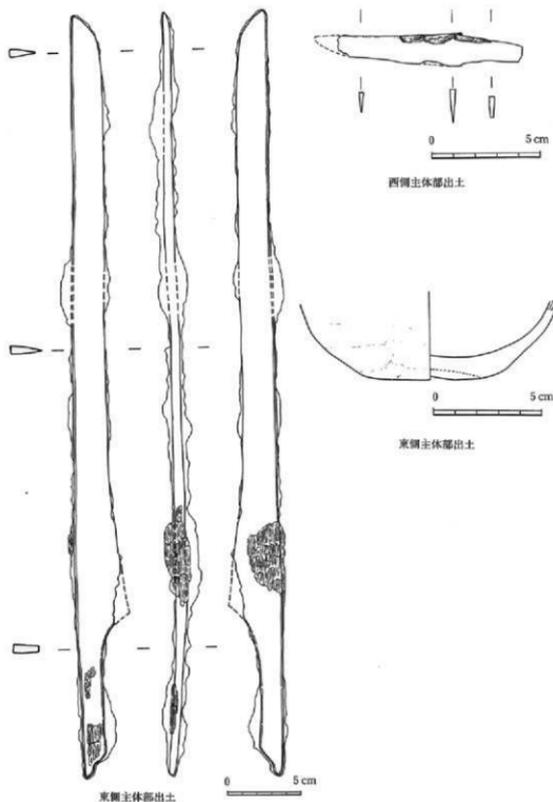
第40号墳出土遺物 (第12図)

〈西側主体部出土刀子〉第12図

西側主体部からは刀子1点のみが出土した。現存長9.5cm、釜長2.8cmをはかり、切先は欠損している。全体に薄いついで、鏽着は少ない。開部は背部にも開を持つ両開で、背部側・刃部側に均等につくように観察されるが、研ぎ減りを考慮するべきであろう。実際、刃部先端半分において研ぎ減りが観察される。なお目釘穴の有無や位置については不明である。刃部幅は身元付近で1.45cmをはかり、重量は6.2gである。

〈東側主体部出土鉄刀〉第12図

棺内から出土したと考えられる。全長51.3cmとやや小振りの鉄刀で、刃部長40.7cm、釜長10.6cm、重量は305gをはかる。開部は欠損のため観察が困難ではあるが、ふくらから徐々に身幅を増し開部において最大幅をもつものとする。刀身の反りは認められず、開部は片側のみは無開である。茎の形成については、表面からの内眼観察によると、身元からは



第12図 第40号墳出土遺物

とんど幅に変化なく葦尻に達し、葦尻は隅状尻であると判断される。なお、目釘穴の有無や位置については不明である。

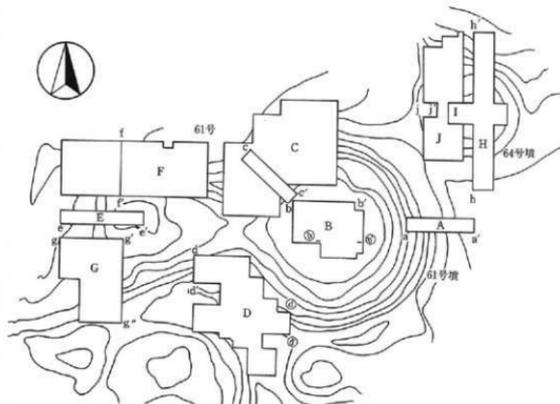
また木質の残存状況からみると、おそらく簡単な構造による木製の外装が考えられ、開付近にやや厚めに鑄着していた木質は鞘口である可能性が高い。

〈東側主体部出土土師器〉第12図

東側主体部の墓域埋土中より出土した土師器は、柄杓の底部で、底径4.4cm、残存高3.5cmをはかる。外面は底部近くに、非常に乱雑で、強いケズリが施されており、そのためやや不整形となる。内面はナデが観察された。成形は円盤状の底部に上部をつぎたして行なっている。焼成は良好とは言えず、部分的に器壁中が灰色化しているのがみえた。

第61号墳

小松山支群に属する第61・64号墳の調査は、1985年に川西町教育委員会によって行なわれた。調査期間は1985年5月13日～7月25日である。2基を同時に調査したため、調査区



第13図 第61・64号墳調査区

の番号は一連のものとして付されている。今回の再報告にあたっては、これを踏襲することにした。

調査の目的

小森山文群の性格および築造年代などの基礎資料を得ることを目的として、発掘調査を行った。

立地

小森山の尾根が南東方向と南西方向の二又に分かれるうち、南東側の尾根の緩傾斜面に第61号墳は立地している。標高は後円部地山面で258.30mである。後円部の北東側には第64号墳が近接し、さらに尾根上の東方には前方後円墳である第65・66号墳の2基が存在している。また、前方部南側近には周溝をはさんで円墳の第63号墳が存在する。

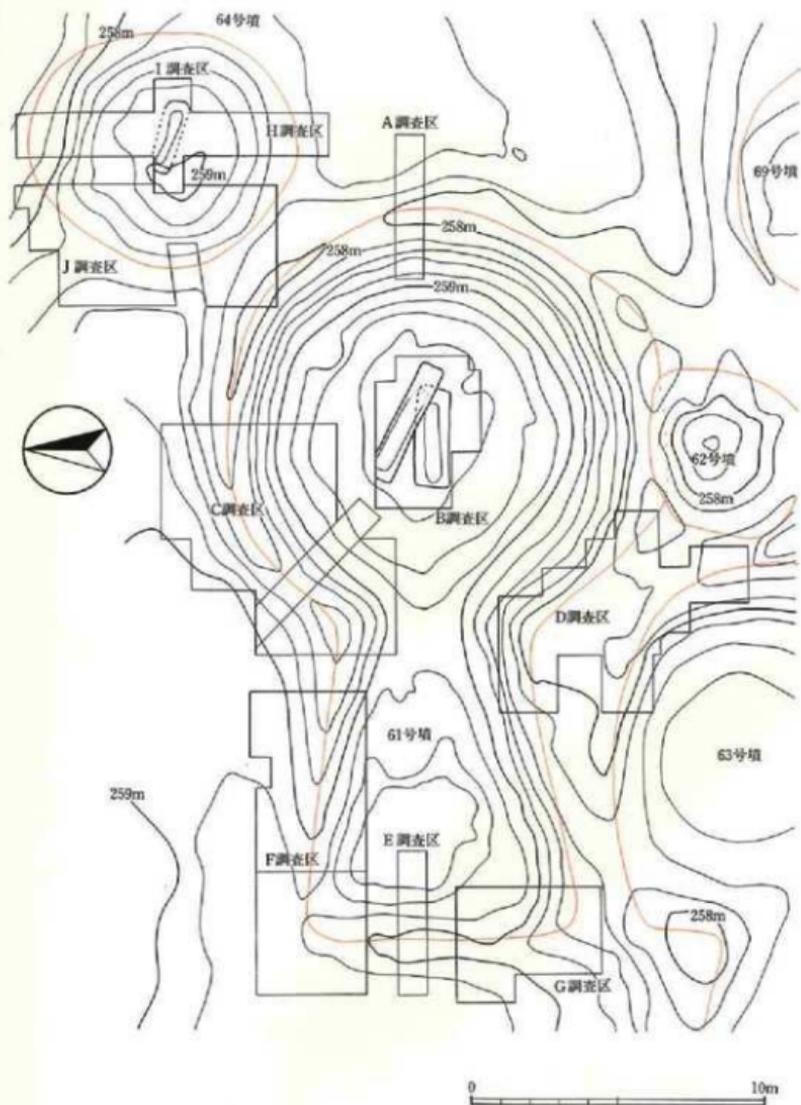
墳丘

第61号墳は発掘調査の結果、全長25.5m、後円部径15m、前方部前幅9m、周溝最深部より計測して後円部高約2m、前方部高約1.4m前方後円墳である。墳丘の主軸方位はN-90°-Wとなる。

第61号墳後円部東側のA調査区は、後円部墳裾と周溝の確認、主軸線の土層断面を調査するために、後円部墳頂部から北西方向にかけて長さ5m、幅1mで設定した。周溝部の覆土は約40cmの厚さをはかる黄褐色粘土質で、3層に分けられ、下層になるにしたがい暗さを増す。周溝の幅は約1.5~1.8mをはかる。このトレンチから遺物は検出されなかった。

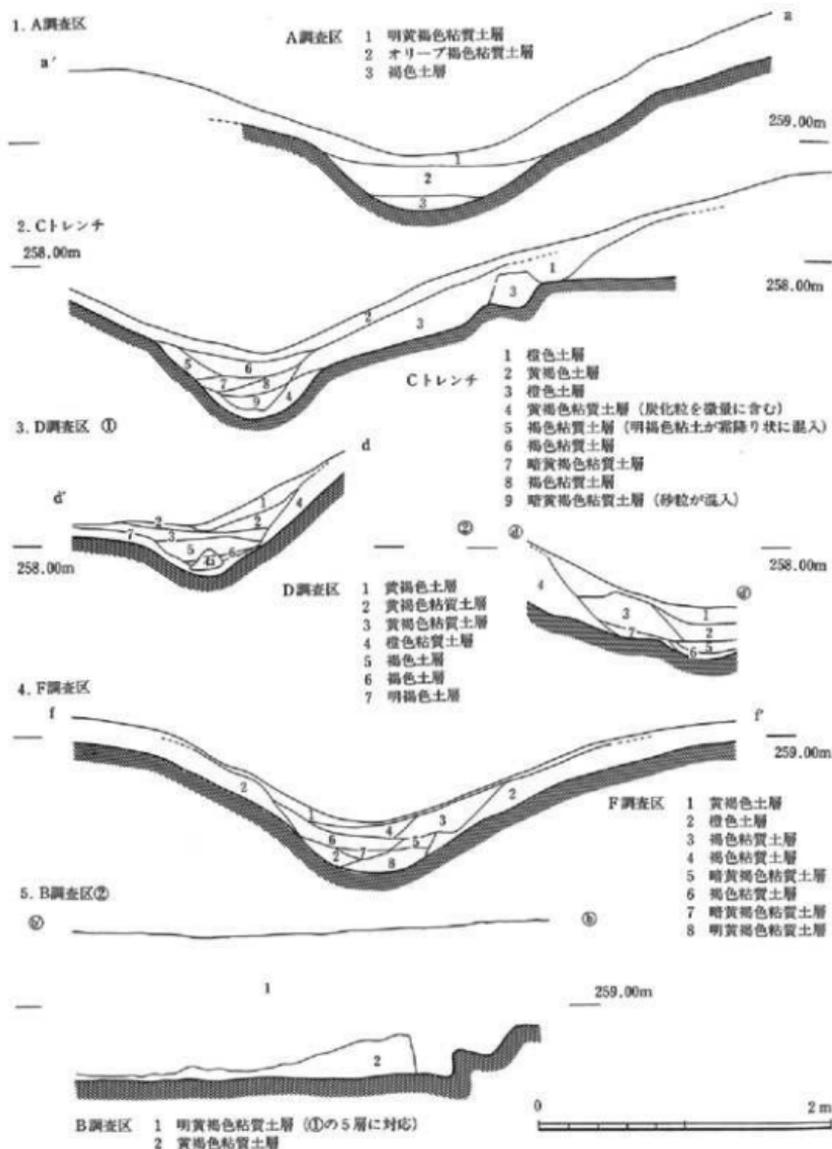
C調査区は、くびれ部およびその北側の周溝形態、土層断面を確認するための調査区で約8×7m範囲を発掘し、墳裾を確認した。この調査区では、まず後円部墳頂部から北西方向の周溝にかけて、5m×1mのトレンチを地山まで掘り下げた。この調査区における周溝の堆積層は厚さ45cmで、9層に分けられる。周溝の上幅は約1mで、溝底は丸みを持つ。周溝では、直径20cm前後と推定される河原石の一部が9層上面から検出されたが、他の遺物は確認されなかった。

墳丘南側のくびれ部および周溝を確認するために、約8.5m×4mのD調査区を設定した。周溝の覆土は3~5層に分けられた。周溝の上幅は約80cmで、深さ40cmを測る。1層

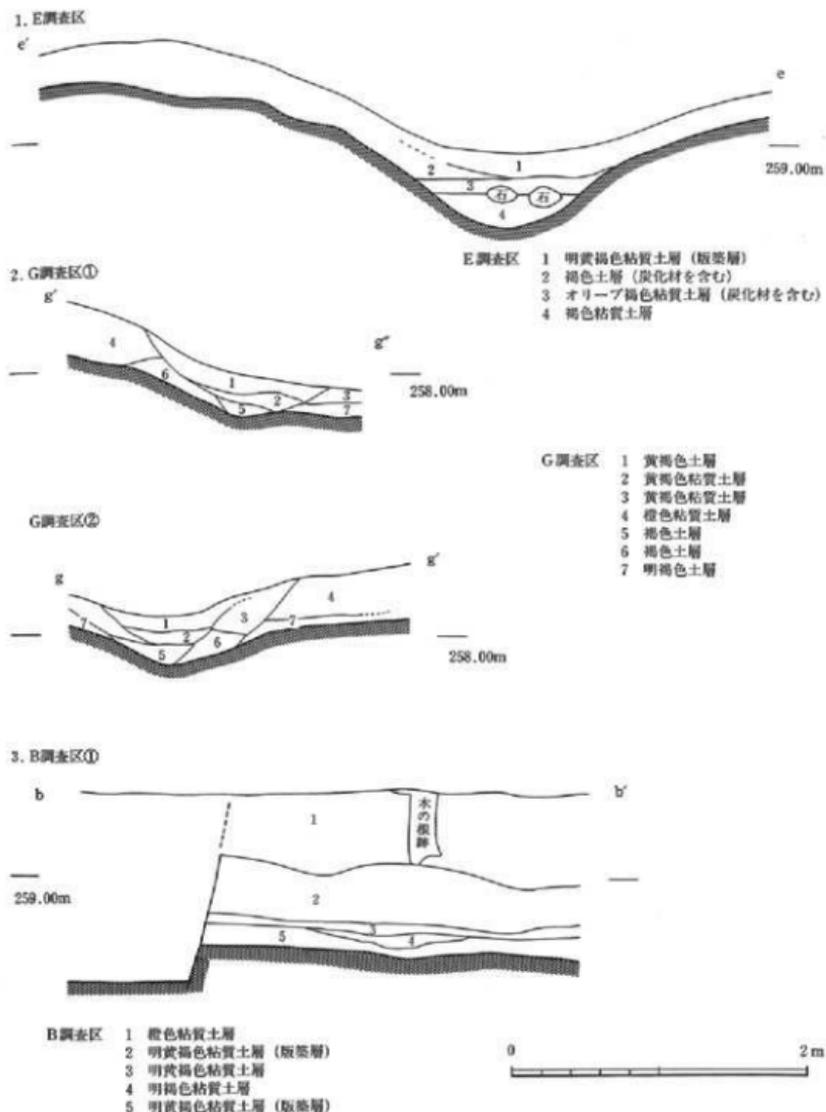


第14図 第61・64号墳丘測量図及び調査区配置図

第4章 下小松古墳群の調査



第15図 第61号墳セクション図(1)



第16図 第61号墳セクション図(2)

上面で河原石が1~2m間隔で確認され、この下、地山上から土師器片が出土した。これらは環1個体分、甕底部1個体分、甕胴部破片などがある。当初、第61号墳南側の第63号墳が、くびれ部が直角の平面形をなすことから、前方後方墳の可能性があると推測していた。そのためD調査区を拡張し、第63号墳の墳裾の確認を得ようとしたが、コーナーがゆるやかな円形を示し、墳形を判断するだけの結果は得られなかった。

前方部前端の主軸上の墳裾と堆積状況を調査するために長さ5m×幅1mのE調査区を設けた。周溝は、上面で幅1.5mをはかり、覆土は厚さ60cmで4層に分けられる、4層上面より長さ45cm、幅23cm、厚さ15cmの細長い河原石が出土している。前方部を1.2m掘り下げたところ、5層の土層が識別され、そのうち盛土は上部の2層に相当し、厚さ60cmをはかる。

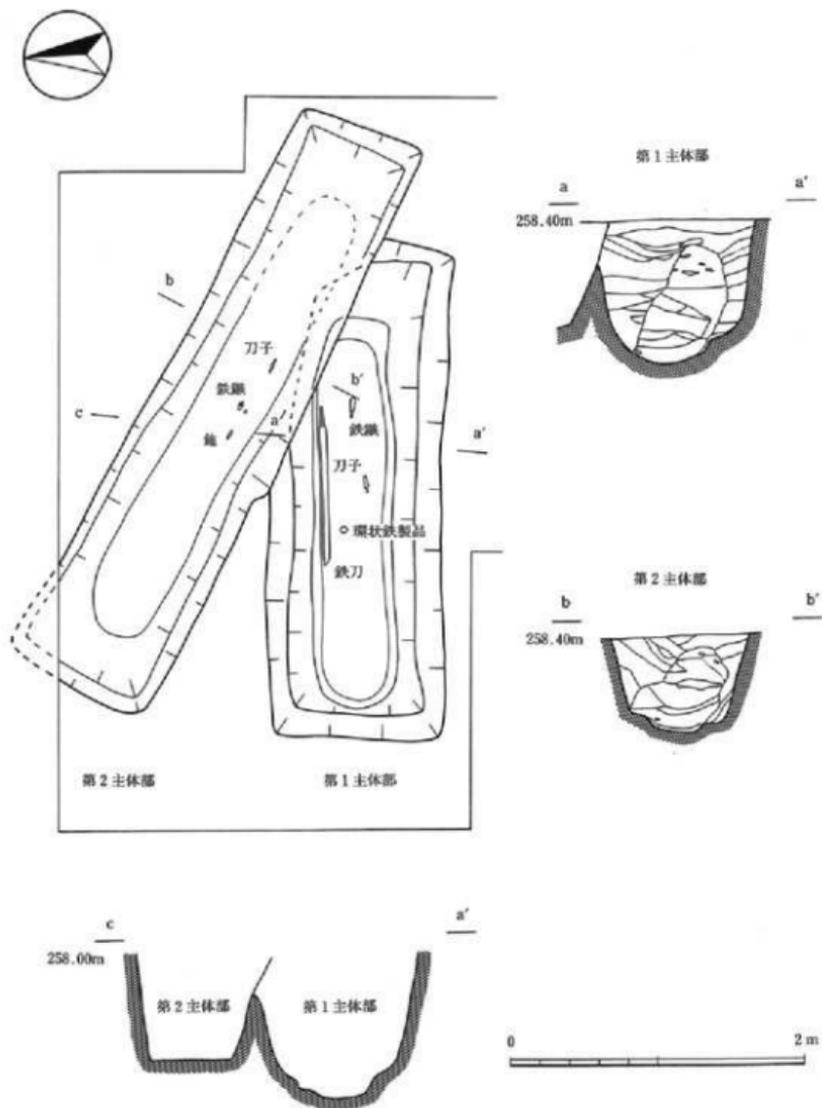
F・G調査区は、前方部の左右両端を確認するために設定した。F調査区は前方部北側コーナーの確認のため10m×4mで設けたが、完掘したのはコーナーの周溝のみである。この地点での周溝上幅は約1.15mで、深さ約30cmである。G調査区は前方部南側コーナーを確認するための3m×5mの調査区である。F調査区では墳裾が、調査前に推定した墳裾とはほぼ同じと確認されたが、G区においては調査前、墳裾としていたラインよりも内側に入る。周溝上幅は1.3m以上あり、深さ約30cmである。周溝内から、土師器片が出土している。

主体部

後円部の中央に約5m×3.5mのB調査区を設けた。墳丘表土から深さ0.9~1.0mのところの一部切りあっている二つの墓壇プランを確認した。主軸を東西方向にとる古い墓壇を第1号墓壇、第1号墓壇を切っている新しい方を第2号墓壇とした。

第1号墓壇

後円部の中央墳丘表土面から深さ1.0mで、地山を掘りこんだ墓壇プランが確認された。墓壇は、主軸 N-90°-Wとする、長さ(東西)3.5m、幅(南北)1mの長方形である。確認面からさらに1.3m掘り下げると墓壇底部にあたる。墳丘表土面から2.3mの深さとなる。墓壇中央部に長さ2.7m、幅0.6mの落ち込みが認められ、底部はゆるやかなU字状を呈し、床面には粘土が敷かれている。木棺の東側には、粘土塊が確認されていて、木棺を固定して粘土で覆って密封した粘土椀の一種と推定される。粘土を取り除いて0.2~0.25m掘



第17図 第61号墳主体部

り下げると副葬品が確認された。副葬品は、東西に長い楕円形の粘土椀の中央部北側に、大刀が切先を西に、柄部を東に置かれていて、大刀の切先近くより鉄環が出土した。また粘土椀中央部、大刀の柄部付近より、鉄鎌が切先を東向きに3個体まとまって出土した。副葬品は、同レベルから出土しており、配置は第17図のとおりである。

第2号墓墳

墳丘表土下0.2~0.3mから掘られた墓墳である。確認面で長さ4.2m、幅1mをはかる長方形で、第1号墓墳の北東側コーナーを斜めに切っている。主軸方位は、N-64°-Wである。墓墳の底部には粘土が敷かれていて、木棺直葬であるが、第1号墓墳のように木棺全体を粘土で覆っているわけではない。墓墳中央部より施が出土し、中央部よりやや東側から刀子、鉄鎌が刃先を墓墳主軸に沿って、北西に向けて出土した。

第61号墳出土遺物

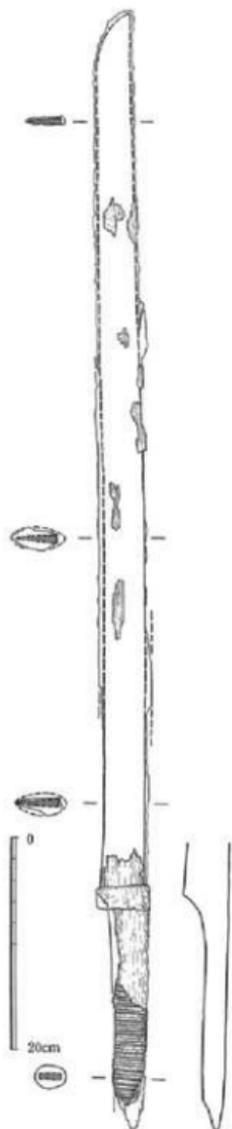
第61号墳の主体部から出土した遺物はすべて鉄製品である。また、周溝内から土師器が出土している。

〈第1号墓墳出土鉄器〉第18・19図-1~3

大刀 (第18図)

全長105.1cm、刀身長82.4cmをはかり、幅は切先付近で3.5cm、身元で4.3cmとなる。胴部の作りは錆着のためはっきりしないものの、おそらく片側のみの撫闕と思われる。茎の形状に闕しては、闕からやや幅を減しながら茎尻へ向かい、茎尻直前にて一段挟り込む隔扶尻であろうと推測される。なお、目釘穴の位置は不明である。

また、柄の拵えが比較的良好的な状態で残存していた。そ



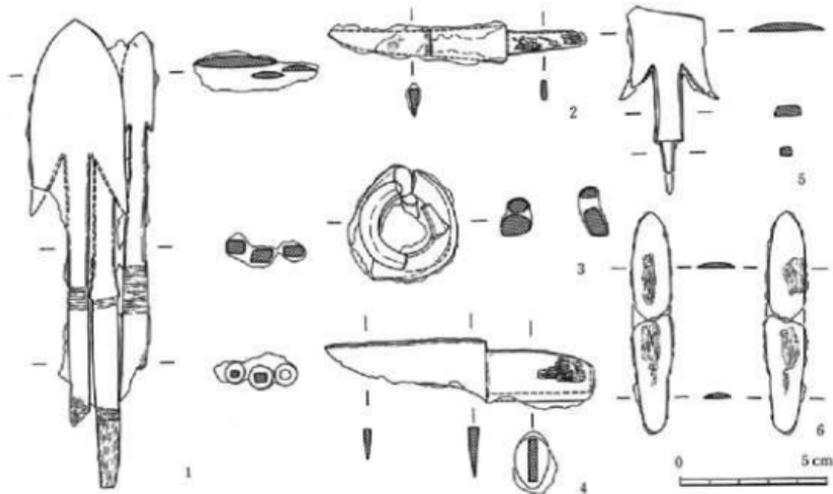
第18図 第61号墳出土遺物(1)

の構造は、柄木に茎を落とし込み目釘によって止めた後、紐状の有機質を巻いて固定したものと考えられる。

鉄鏃 (第19図-1)

3個体が鑄着した状態で出土した。鏃身の形状のわかるものが2個体、不明のもの1個体である。いずれも腸袂を持つ柳葉式で、腸袂に至る側縁の反りはほとんどなく、直線的である。一つは現存長14.0cm、鏃身長6.6cm、鏃身最大幅3.3cmをはかる平根式のものである。頸部の長さは4.0cm、関は直角関の可能性が高い。もう一方は、現存長11.7cm、鏃身長3.5cm、最大幅1.1cmとなる長頸の腸袂柳葉式である。頸部の長さは5.0cmをはかる。関は直角関の可能性が高い。なお、鏃身の形態が不明なものについて若干触れておくと、関の造りが台形を呈する点で既述したものとやや異なる点を指摘できる。また、3個体はいずれも樹皮による矢柄への装着が認められた。

刀子 (第19図-2)



第19図 第61号墳出土遺物(2)

現存長8.5cm、刃部長6.0cm、茎部長2.5cmをはかる。ほぼ完存している。背がやや外反し刃部には研ぎ減りらしき痕跡が認められる。

環状鉄製品 (第19図-3)

原形・用途ははっきり断定できないが、2個体が上下に鑄着したらしく、その造りから見て耳環の可能性が高い。上部のものがやや細い造りになっており、その規模は復元・推定で外径3.1cm、内径2.1cm、断面円形で0.5×0.7cmとなる。また、下部のものはやや大きく、外径3.6×4.0cm、内径1.8×2.0cm、断面は矩形に近く、0.7×0.9cmを測る。

〈第2号墓墳出土鉄器〉 第19図-4～6

鉄鎌 (第19図-4)

平根鵜挾柳葉式。残存長5.8cm、頸部長2.7cmである。鎌身断面形は扁平な片丸造で、厚さ0.3cmとやや薄手の造りとなっている。また、鎌身側縁が鵜挾端部に向かって緩やかに外反する。

刀子 (第19図-5)

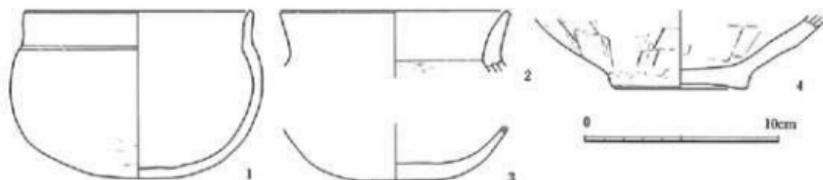
現存長9.0cm、刃部長5.5cm、茎部長3.5cmをはかる。ほぼ完存している。刃部がやや幅広く造られており、また、研ぎ減りの痕跡が認められる。柄の断面は楕円形を呈すると思われる。

鉋 (第19図-6)

刃部と思わしき部分の横断面に裏透き様のものが観察されること、また、茎状に側縁が折れることなどから鉋と判断した。全長は復元・推定で7.6cm、刃部の最大幅は1.4cm、厚みは非常に薄く0.1cmをはかる。また、身の中心で茎から縦に木質痕が認められた。刃部先端にまでは至っておらず、柄の可能性を指摘できる。

土師器 (第20図-1～4)

1は南側くびれ部の墳丘寄り周溝壁面、地山直上から出土した。2～4は周溝内から出土した。1は椀で反転復元を行ない、口径11.8cm、器高8.8cmをはかる。口縁部はわずかに外反しながら立ち上がり、底部はやや平らな面を持つがおおむね丸底である。外面は口



第20図 第61号墳出土遺物 (3)

縁部でヨコナデが施されており、頸部以下ではヘラゲズリのちナデと思われるが、やはり不明瞭である。2は甕の口縁部で反転復元を行ない口径11.8cm、残存高3.2cmをはかる。口唇部から頸部にかけて除々に肉厚になっている。外面と内面にはヨコナデが施されていて、内面では頸部以下にハケメが観察される。3は椀か杯の底部で、反転復元を行ない底径4.0cm、残存高2.8cmをはかる。底部は平底で、外面と内面にはハケが施されている。4は壺か甕の底部で底径6.8cm、残存高3.8cmをはかる。外面は縦方向のハケメで、底部には指押圧痕が見られる。底面は指ナデつけが行なわれ、内面はヘラナデが施されている。

まとめ

第61号墳の平面形は、ほぼ左右対称であるが、古墳が築かれた丘陵が北側に高く南側が低いため、標高差の分だけ墳裾が南側に拡張されている。そのために周溝も、墳丘北側が広くて深く、南側はゆるやかでテラス状となる。周溝底部の標高差により、雨水は後円部南側に流れ出るように造られており、排水を考えた構造となっている。

各調査区の土層観察により、第1号墓墳では古墳築造時に地山を1.3m掘り下げて墓墳を造り、棺を設置したことが確認された。棺の上に、厚さ10～20cmの粘りの強い粘土をはりつけて密封し、土で墓墳を埋める。さらに周溝を掘り上げた土を用いて墳丘を築造している。それから追葬の際に、墳頂部より掘り下げて、第2号墓墳を造り、棺を安置したものである。この第61号墳は、周溝がしっかりしていて、隣接する古墳の周溝より20～30cm深くになっている。この周溝の深さの違いは、第2号墓墳が追葬されたときに2度目の墳丘成形が行なわれた可能性を示唆する。墳丘は段築がなく、後円部墳丘上は広い平坦面をなす。調査前に後円部中央に見られた窪みは、墓墳部分と一致する。第61号墳に隣接する前方後円墳・第65号墳の長い楕円形の窪みも墓墳によるものと考えられる。

本調査により、主体部が木棺直葬と判明した。東北地方で木棺直葬が確認されているのは、山形県21基、宮城県4基、福島県5基である。県内の例は、山形市漆山の衛守塚2号墳、同市青野のお花山古墳群17基と今回の3基であり、これら21基の古墳は全て、全長5m以下の割竹形木棺であると推定される。県内の木棺直葬とされる例はすべて地山を掘りこんで主体部を築くという埋葬形態で、宮城県の六反田古墳、福島県の加倉古墳群3号墳・高見町1号墳・高野古墳などの県外の例も同様である。下小松古墳群第61号墳が前方後円墳である他は全て円墳である。

築造年代は、山形市のお花山古墳群が5世紀末から7世紀前半であり、その他の木棺直

葬の古墳は全て5世紀代に築かれたと考えられている。

下小松古墳群第61号墳の年代を知る資料として、第1号墓出土の大刀・鉄鎌・刀子などの副葬品がある。現時点では主体部が木棺直葬であることから、5世紀末から6世紀前半に築造されたと考えているが、今後これらの副葬品と類似する資料を収集し年代を決定してゆきたい。

第64号墳

第64号墳は第61号墳同様、1985年に川西町教育委員会によって発掘調査されたものである。再報告するにあたり、既述の体裁は改めたが、調査時の所見はそのまま採用した。

調査の目的

小森山支群の性格および築造年代の基礎資料を得ることを目的として発掘調査を行った。

立地

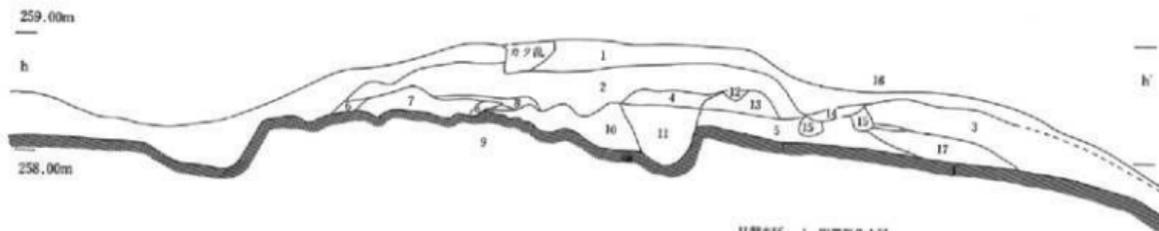
第64号墳は、第61号墳の北東に位置する円墳である。

墳丘

第64号墳は直径約7.5m、周溝を含めると約9m、周溝底面よりはかった高さ1.2mの円墳である。段築はない。墳丘の断ち割りを行なったH調査区の所見によると、地山を穿って主体部を構築し、埋葬を終了した後、周溝を掘り込み、その排土を利用して墳丘を築造するという、第61号墳とはほぼ同じ築造方法がとられているようである。盛土の厚さは60cm程度である。

第64号墳の墳形は墳裾のラインが直角とみられ、方墳と考えられたが、J調査区において周溝の西側半分を発掘したところ、周溝の弯曲から円墳であることが判明した。北側の周溝はそれほど深さを持たず、周溝と言うより、テラス状に整地されているようである。周溝の覆土は4層に分けられ、南側で上幅1m、深さ0.45m、北側はさらに浅く上幅0.5mである。土師器破片の出土が見られた。

1. 日調査区



2. J調査区



- J調査区
- 1 棕色粘質土層
 - 2 明褐色粘質土層
 - 3 黄褐色粘質土層
 - 4 暗黄褐色粘質土層
 - 5 明褐色粘質土層
 - 6 明褐色粘質土層

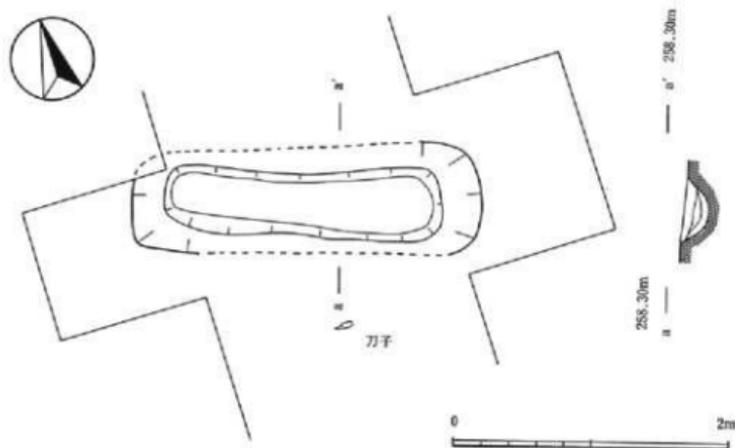
- 日調査区
- 1 明黄褐色土層
 - 2 明黄褐色土層
 - 3 赤褐色土層
 - 4 明黄褐色土層
 - 5 明黄褐色粘質土層
 - 6 明褐色粘質土層
 - 7 黄褐色粘質土層
 - 8 褐色土層
 - 9 明黄褐色粘質土層
 - 10 明黄褐色土層
 - 11 明黄褐色粘質土層
 - 12 黄褐色土層
 - 13 明褐色粘質土層
 - 14 褐色土層
 - 15 褐色土層
 - 16 明黄褐色粘質土層
 - 17 明黄褐色粘質土層



第21図 第64号填セクション図

主体部

墓壇は地山より掘りこまれており、主軸はN-252°-Wで、長さ2.55m、幅0.8m、深さ0.5mである。墓壇中央部よりやや東側に直径30cm、深さ30cmの土管状に焼成された土器



第22図 第64号墳主体部

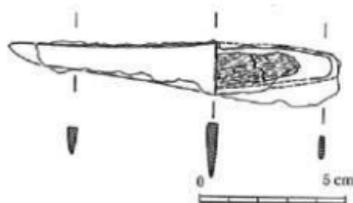
のようなものが検出され、中に炭と焼土が確認された。墳丘上で焼成されたものではないようであり、墳丘築造時に設置されたものと推測される。

また、墓壇外南側で、表土面より0.58m下で刀子が出土した。

第64号墳出土遺物 (第23図)

刀子

第64号墳からは刀子が1点出土した。全体にしっかりした造りで小刀に近い印象を与える。全長10.1cmを測る。刃部には研ぎ減りが認められ、背は身元に向かって若干反っている。刃部の長さは現存で6.1cmである。茎は長さが推定4.0cm、幅が0.8cmとなるが、厚みが非常に薄く0.2cmに満たない。



第23図 第64号墳出土遺物

第65号墳

小森山支群第65号墳の調査は、1988年に川西町教育委員会によって行なわれた。調査期間は1988年6月17日～11月10日である。今回再報告するにあたり、体裁を改めたが調査時の所見はそのまま採用した。

調査の目的

第65号墳は調査前、主軸の南側がくずれ、封土が流出していた。調査にあたっては墳丘の復元、保存を目的とした。したがって調査区を設定したのは古墳の主軸南側の周溝部分に限り、主体部確認などの調査は行なっていない。調査後は、周溝覆土を墳丘に盛り上げて、芝生を移植して古墳を復元、保存している。

立地

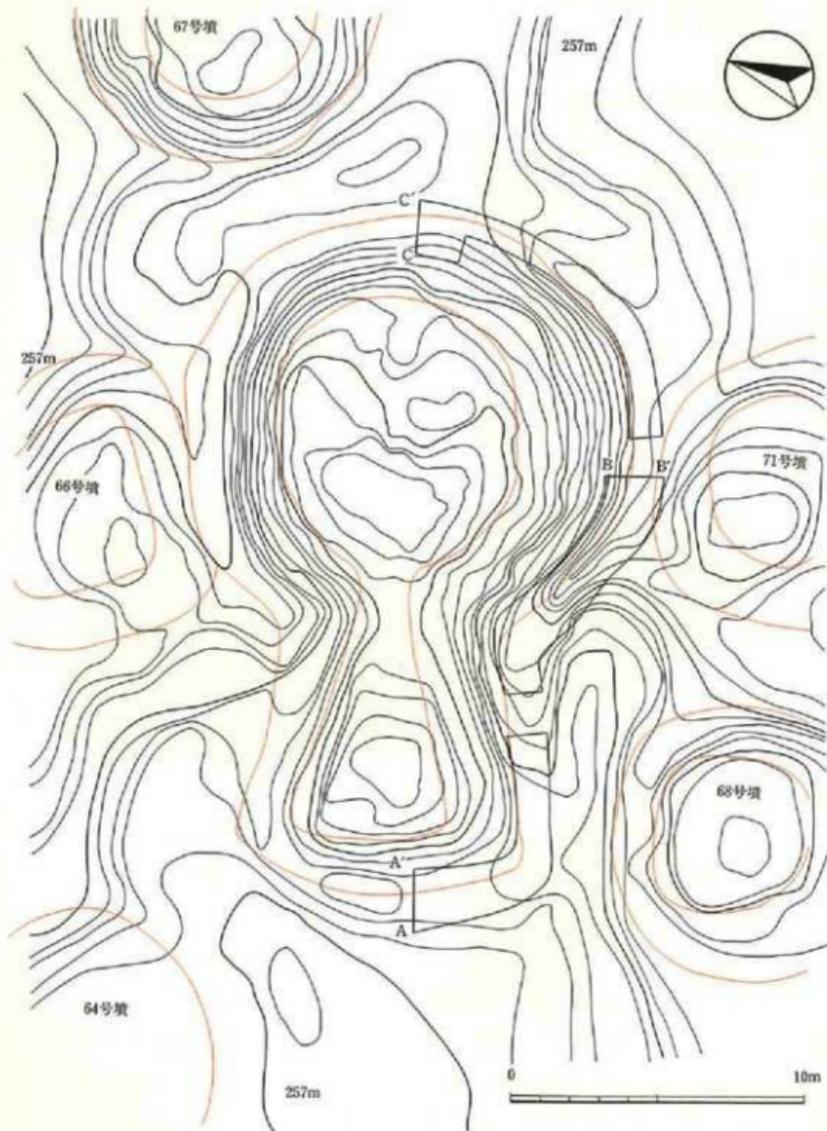
小森山の南東方向にのびる尾根の緩傾斜面に第61号墳（前方後円墳）に近接して築造されている。この東側には前方後円墳の第72号墳が存在している。

墳丘

主軸はN-107°-Wで、丘陵の尾根筋に沿って造られている。全長22.3m、前方部長8.5m、前方部前端幅8.8m、くびれ部幅6.9m、後円部径14.5m、南側周溝最深部からはかって後円部高2.1m、西側周溝最深部からはかって前方部高1.2mである。

古墳の盛土は、後円部の周溝調査区土層断面より見て、約1.7m程度と思われる。後円部の中央で、主軸に沿って長さ3.5m、幅1.2mの落ち込みのプランが確認された。この落ち込みが埋葬主体と推察する。

周溝の確認のため、主軸南側を調査した。下小松古墳群の墳丘の多くは、南西側が崩れており、保存整備などの配慮から周溝の南側を発掘した。北側は発掘調査を行わず原形を壊さない形で保存した。周溝は、墳丘を全周しており、表土より約25cm掘り下げたところで検出された。周溝の掘り方断面は、前方部と後円部では異なっており、前方部は緩やかなU字状となり、周溝上幅は約1.5～1.7mで、深さ約0.4mである。また、後円部はV字状を呈しているが既報告では記されているが、調査が不十分なため判断を保留したい。地



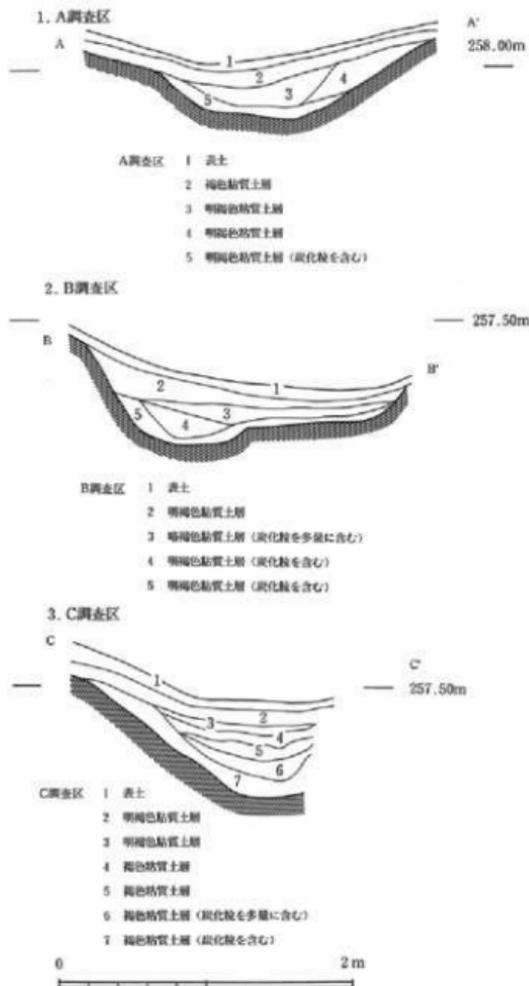
第24図 第65号墳丘測量図及び調査区配置図

山直上より摩滅した土師器片が約80点出土した。しかし、器形を完全に推察できるものは出土していない。

第65号墳出土遺物(第26図)

土師器

1と3は後円部周溝から出土し、2は前方部周溝の地山直上から出土した。1は壺の口縁部と思われ、反転復元を行ない、口径12.0cm、残存高2.0cmをはかる。口唇部はやや丸みつつも、稜を持つ。外面と内面はヨコナデが施されている。2は壺か甕の底部と思われ反転復元を行ない、底径10.2cm、残存高3.0cmをはかる。外面および内面はナデが施されている。器表に黄白色土が付着していた。3は椀が坏の底部で、反転復元を行ない、底径5.0cm、残存高2.8cmをはかる。底部は平底で、器表には黄白色土が付着して



第25図 第65号墳セクション図

いるために調査観察は困難であるが、外面と内面はナデられた可能性が高い。

まとめ

第65号墳の墳形は、1985年に発掘調査を行なった、当古墳に隣接する第61号墳（前方後



第26図 第65号墳出土遺物

円墳)と同形態であると思われる。特に前方部の造りにおいて、古墳の立地する地形が、南北で南側が低い場所であることから、南北の標高差の分だけ墳裾が南側に拡張される点や、周溝内の雨水が一定の場所に流れるよう、排水が計画されていると観察される点も類似している。

第65号墳の築造年代は、主体部の調査を実施していないため、副葬品・主体部の形態などから年代を推察することができない。ただし、副葬品から6世紀初頭と推察している第61号墳と築造形態が類似していることや、周溝から出土した土器群が谷柏式に位置付けられることから、築造年代は5世紀中葉から6世紀初頭と考える。

補足 墳丘の復元について

墳丘の凹凸は、周溝に堆積した土を用い復元し、盛土の流出を防ぐためコウライシバとノシバをはりつけ整備した。墳丘には赤松が生い茂っていることから2種類のシバのどちらかが適しているのか、シバの活着などにより、今後の古墳整備に活かしていきたいと思う。

墳丘の盛土に関して、第65号墳の全周溝覆土の南側半分の土量を盛土したが、調査前の墳丘の最高レベルより高くは行っていない。築造当時は、もう少し墳丘が高かったものと推察している。盛土の土量は約15.6m³である。

第77号墳

小森山支群に属する第77号墳の調査は1988年に川西町教育委員会によって行なわれた。調査期間は1989年7月10日～8月5日である。第77号墳の報告書は未刊行であったが、今回報告するにあたって、調査者から提出された原稿を若干補筆してここに載せた。

調査の目的

第77号墳は、墳丘観察と概測によると、墳丘の高さ0.6m、東西6.70m、南北7.30mの円墳である。下小松古墳群中の古墳は概して低墳丘のものが多く、それらと比較しても第

77号墳の墳丘の低さは特異なものであった。調査は、第77号墳が埋葬施設を持つ古墳であるかどうか確認することを目的として行なったものである。

立 地

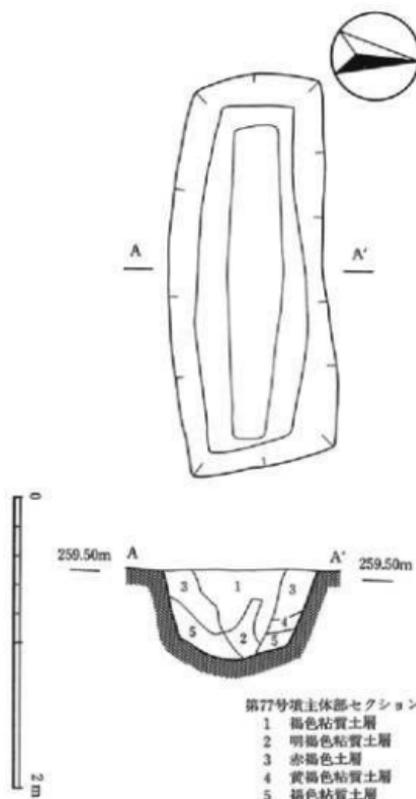
小森山の南東方向にのびる尾根の緩傾斜面には先述の第61・64号墳が近接して存在している。第77号墳は標高261m付近で、第61号墳の西側6mほどのところに立地している。

墳 丘

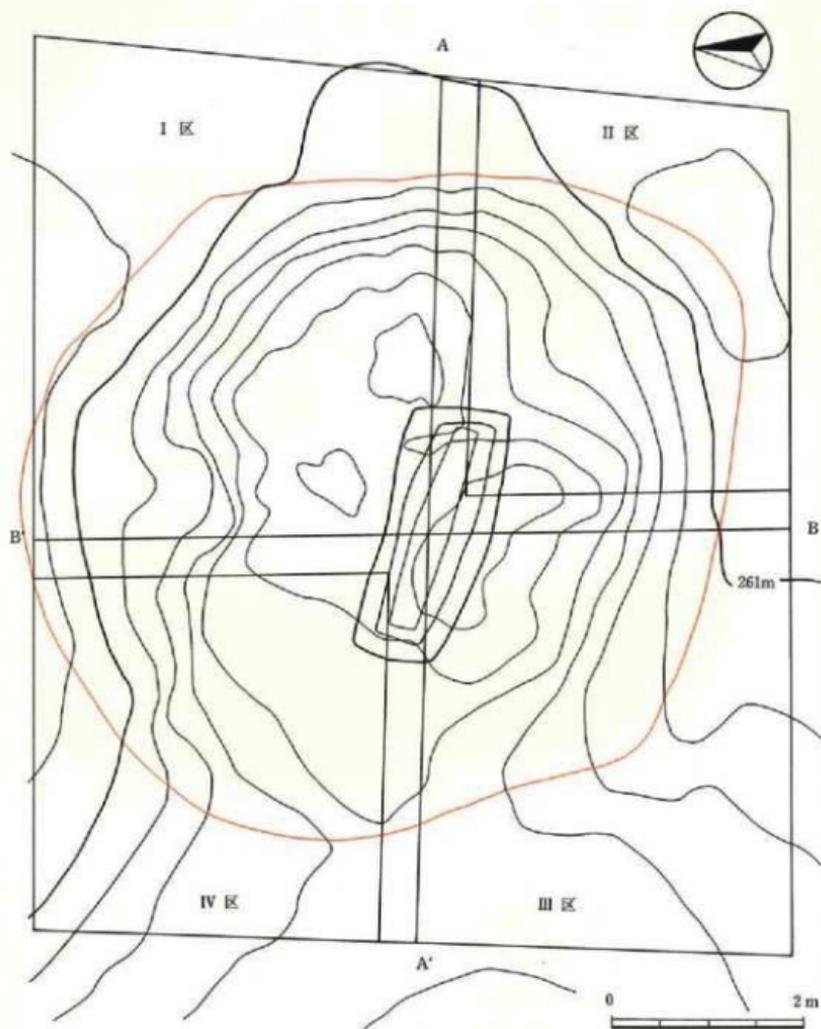
測量調査を終えた時点では、南北および東側の墳裾のラインが直線になるところから、方墳であることが推定できた。しかし調査の結果、検出した周溝のラインが円形を示すところから、円墳であると判明した。直径は約6～6.5mで、東西に長い不整形な円墳であった。

調査は、東西南北の方位にそって十字のセクションベルトを設定して、残った4区画を掘り下げていく方法をとった。その結果、周溝は古墳を一周することが明らかになった。しかし、ベルトをはさんで北側と西側では周溝が接続せず、ずれているのが確認されている。これが本来の状況であるか、それとも検出不十分であるかは、調査時の認識が不足していたため不明である。周溝の規模はばらつきがあり、上幅は0.35～1m、深さは確認面より0.1～0.3mをはかる。

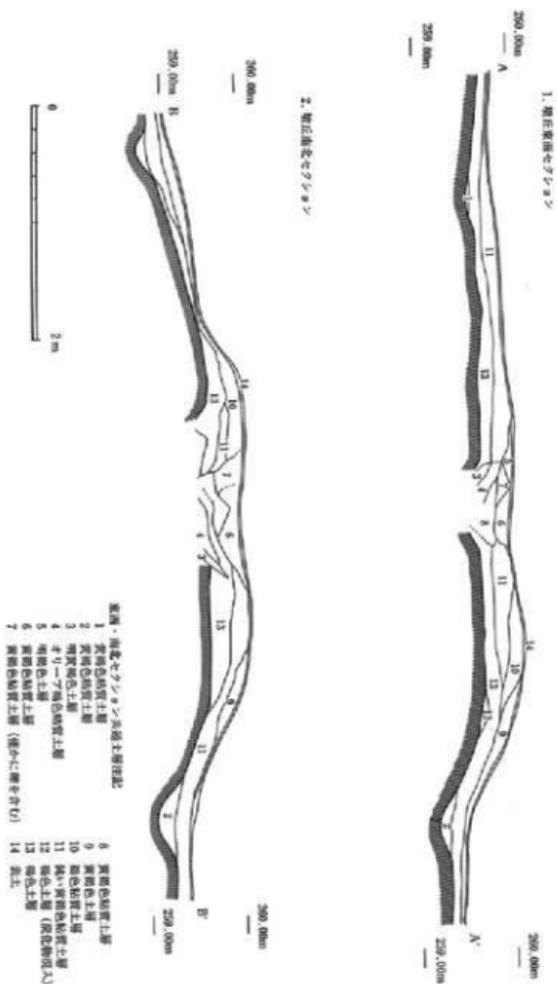
主 体 部



第29図 第77号墳主体部



第27図 第77号墳丘測量図及びトレンチ配置図



第28図 第77号墳セクション図

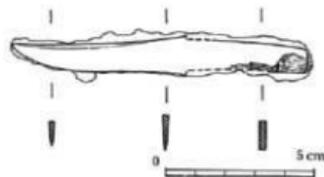
墓墳は墳丘中央部に造られており、主軸方位は、N-77°-Wである。規模は長さ東西2.7 m、幅1.1m、確認面よりの深さは0.6mで、2段に掘り込まれている。墓墳は最下部は長さ

2.1m、幅0.4mの浅いU字状を呈している。その東南側より、刀子1点が切先を西側に向けて出土した。墓壙中央部には、東西1.2m、南北0.85mの不定型な掘り方があり最下部にまで達していた。この覆土は単一層であった。

第77号墳出土遺物（第30図）

刀子

第77号墳からは刀子が1点出土した。残存形態が良好ではなく細かな観察は困難だが、刃部は完存しているらしい。全長9.8cm、刃部長5.7cm、茎部長4.1cmをはかる。また、研ぎ減りと思われる痕跡が認められ、背の反りも観察された。



第30図 第77号墳出土遺物

まとめ

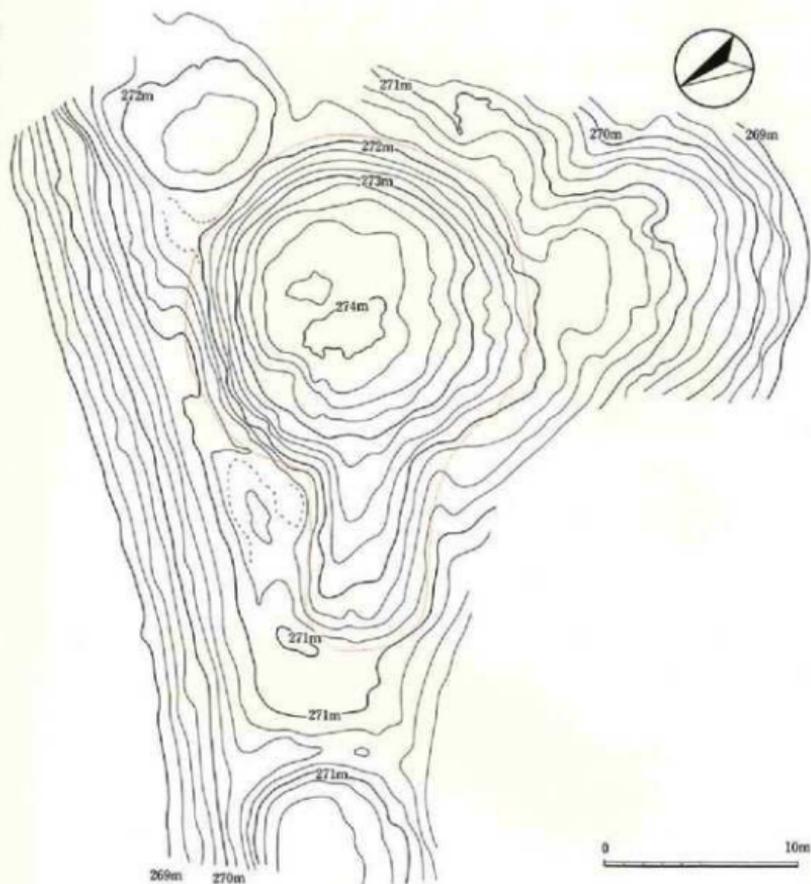
第77号墳の埋葬形態は木棺直葬で、主体部の掘り下げで確認された主体部中央にある不定型な最下部までの掘り下げは盗掘跡と推察できよう。この調査では土器の出土がなく、また副葬品からも築造年代をとらえることはできなかった。隣接する第61号墳の年代に併行するものと推測しておきたい。

第98号墳

第98号墳の調査は、明治大学考古学研究室と川西町教育委員会との合同調査として1990年度より開始された。調査期間は、第1次調査1990年8月18日～9月6日、第2次調査1991年8月21～9月18日、第3次調査1992年7月25日～8月8日である。以下の報告は、これらの調査結果を総合したものである。

調査の目的

下小松古墳群の立地する丘陵の東側に展開する米沢盆地西縁には、眼下に天神森古墳がある。1983年の調査によって全長75.5mにおよぶことが確認され、後方部やくびれ部から底部穿孔壺形土器片が出土した。土器の特徴から4世紀末から5世紀初頭の年代が推定され



第31図 第98号墳丘測量図

ている。現在のところ当地方では最も古い古墳である。しかし、通常前期古墳は丘陵上につくられるのが一般的である。そこで低地にある大型の前方後方墳である天神森古墳に先行するような古墳が、丘陵上の下小松古墳群に認められるかどうか問題となった。この問題を解決するために、小森山支群第98号墳の調査を行なった。

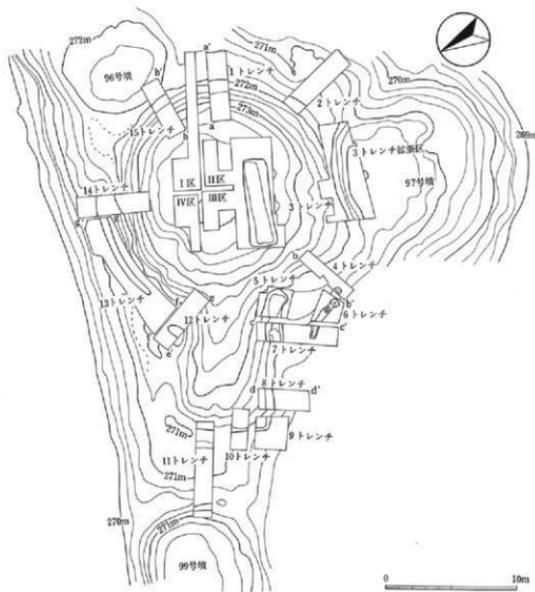
第98号墳は、南東にのびる小森山の最高所の標高272m付近に位置する。第98号墳の立地する尾根の前方部側には、第99号墳（方墳）、第100号墳（前方後円墳）が互いに近接している、また第98号墳の後円部の南東には第96号墳（円墳）が南西には第97号墳（円墳）がやはり近接して存在している。そのうち後述するように第97号墳は第98号墳の後円部の裾を一部破壊して築造されていた。第98号墳の調査前の状況は他の古墳と同じく樹木に覆われていた。樹木伐採後の墳丘観察では、後円部と比べて前方部が低く短いという特徴が見られた。古墳群中の他の前方後円墳が、前方部と後円部の比高差をあまり持たず、また墳丘も低い形態であることに対して、第98号墳の後円部高約3m、前方部高約1.5mという墳丘は、平面形とあわせて考えると時期的に先行するという可能性を推測させた。

当初、主体部は後円部の中心に予想されたが、主体部の存在を示す落ち込みなどの痕跡は後円部の墳頂平坦面の中心部にまったく見られなかった。これに対して、後に主体部を発見した南側では、コンターラインの乱れから読みとれるように地表面の大きな落ち込みを示していた。

墳 丘

第98号墳は発掘調査の結果によると、全長約26.5m、後円部径約18m（復元）、後円部高約3m、くびれ部幅約5.5m、前方部幅約6.5m、前方部高約1.5mの前方後円墳である。墳丘の主軸方位はN-115°-Wである。

墳丘の発掘に際しては、墳丘の旧状の形態と規模を確認するために計16ヶ所の調査区を設けた。このうち特に後円部の主軸方位に設定したトレンチでは、後円部墳丘の断ち割り調査を行なうことができて、墳丘の構築状況の一部が明らかになった。それによると後円部の東側では周縁付近を一度掘削し、墳丘全体に軽く盛土をしてなだらかな丘を造り、次に溝内側の墳丘縁部に塊状の盛土を行ない、その後中心部側を盛るという構築方法をとっている。また主体部の土壌は、地山上にある程度盛土が盛られてから掘り込まれていることが確認された。この点は、同じ小森山支群に属する第61号墳では、地山に直接墓壇を穿って埋葬を終了したのち、盛土しているという過程をとるのと異なっている。第98号墳の墓壇掘り込み面にあたる土層上、特に主体部の北側（後円部の中心）では炭化材が多く検出されたが、焼土は見られなかった。このことから墳丘の盛土過程のある段階で、墓壇が掘り込まれ、埋葬と同時に墳頂部に炭化材を置き、埋葬終了後に墓壇を埋め、さらに墳丘



第32図 第98号墳トレンチ配置図

全体に盛土をしていることが判明した。

墳丘の観察と測量図とによって、古墳には周溝がめぐらされていることは明らかであったが、周溝が古墳を一周するものか、部分的なものかが問題となった。発掘調査の結果、前方部前端、南側くびれ部、後円部東側、後円部北側から北側くびれ部に周溝が存在することが確認された。

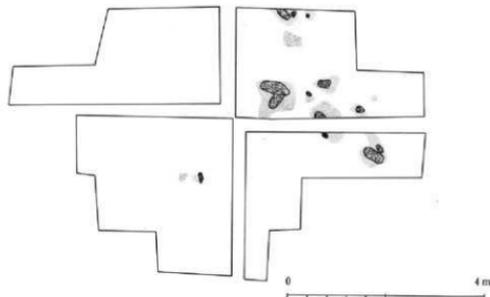
前方部前端に存在する周溝は、上幅約1.8m、下幅約1m、深さ約0.5mである11トレンチ

の南側にこの周溝を追うと、外側の立ち上がりが見られない。おそらく尾根線上にあって前方部と自然地形とを画するために設けられたものだろう。

南側くびれ部に存在する周溝は、7トレンチにおいて確認したところでは上幅約1.1m、下幅約0.5m、深さ約0.5mであった。この周溝はとなりの5トレンチでは、上幅1.2m～1.6m、深さ約0.4mでくびれ部の墳裾にそって若干弯曲した形で途絶えていることを確認した。また7トレンチより西側(8・9トレンチ)では、周溝の外側の立ち上がりが見られなかった。

南側のくびれ部では、島状の地ふくれ部があることが墳丘観察から分かっていった。同様な島状の地ふくれ部は、小森山支群第61号墳においても、やはりくびれ部で確認されており、そこでは土師器を用いた祭祀の痕跡が認められた。第98号墳のものも同じ性格のものであると推定して調査したところ遺物の出土は見られず、島状地ふくれ部も人為的な盛土ではなく、本来の地山の起伏状に墳丘崩落土あるいは自然堆積土が堆積した結果と思われ、造り出しのような人工的地設と判断することはできなかった。

また、4・6・7トレンチ南端では、小ビット2ヶ所に切られる部分を伴う溝状遺構が検出された。深さ約20～80cm程度の小ビットは、炭化物を多量に含むことから抜根の痕跡



第33図 第98号墳墳頂部トレンチ配置図及び炭化材分布図

と思われるが、溝状遺構は島状地ふくれ部の縁辺に沿って検出され、また溝状遺構を確認したトレンチのセクションを観察した結果でも古墳と同時期と考えられるが、その性格については不明である。

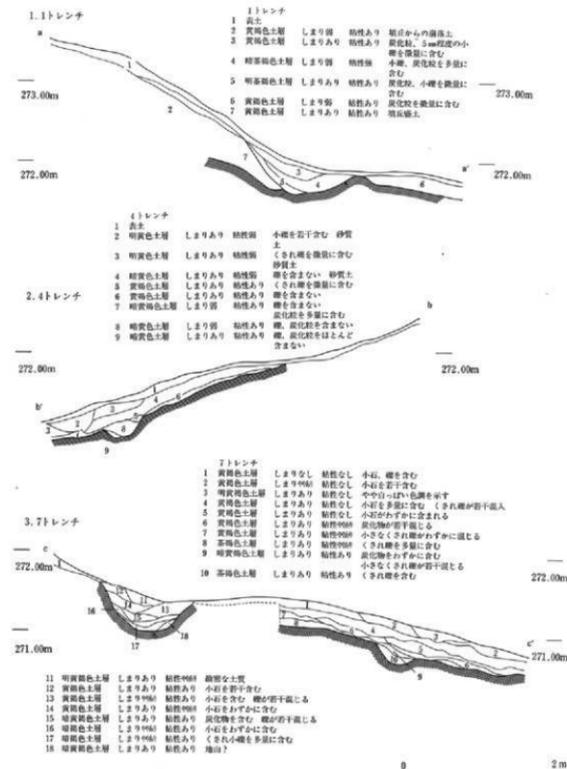
後円部南側で検出したU字状の周溝は、第98号墳の後円部墳丘を約40cm削って変形させており、第97号墳側へ弯曲する平面形を示していた。このことから後円部南側に近接する第97号墳は、第98号墳の後円部を削って周溝を築いていると判断した。したがって、本来第98号墳では後円部南側に周溝は造られなかったものとする。

後円部の東側では1・2・15トレンチにおいて周溝が確認されている。溝の規模は1トレンチで平均して上幅約1.1m、下幅約0.5m、深さ約0.4mであるが、2トレンチにおいてはその規模が縮小していて、この両側の間もないところで周溝は途絶えると思われる。この周溝が後円部北側からくびれ部にかけて存在する周溝と接続するかは、未調査のため不明である。しかし後円部北東隅には土橋状の高まり(補助コンターで示した部分)が見られ、これを境に北側くびれ部にかけて墳裾のレベルが下がり始める。また後円部の東側では、自然地形の尾根線にあたり、前方部前端での周溝のあり方をあわせて考えても、周溝は北東部分で途絶えると思われる。

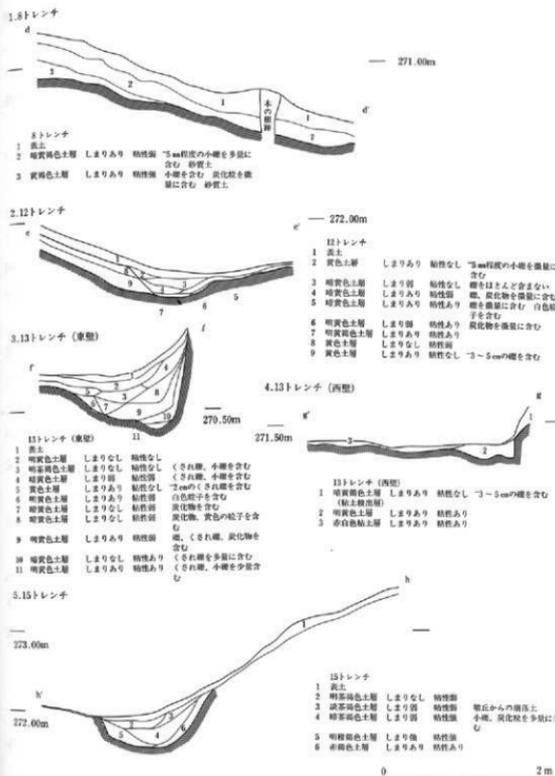
主体部

主体部は、後円部の主軸上からやや南側によったところで検出された。主軸方位はN-25°-Wである。主体部が主軸上ではなく、南側に存在するあり方は、複数埋葬の可能性も想定された。しかし、後円部墳頂に設定した発掘区(I・II・III・IV区)において、地山面まで検出した結果、後円部中央に盗掘坑が確認されたものの、埋葬の痕跡は認められなかった。

先述したように、墓壇は、地山を整形したあとに若干の盛土を行なった時点で掘りこまれている。墓壇の上端はこの掘りこみ面の長さは6.48m、幅1.7～1.95mである。レベルは墓壇の東側で273.35m、西側で273.15m、北側で273.35m、南側で273.00mというように北東側が高く、南西側が低く傾斜している。墓壇の底面は平坦で、標高は東側が273.30m、西側が273.20mであり、西側の方が0.1m程低くなっている。幅は東側が0.95m、西側が1.5mであった。また、墓壇底面の西壁際には約0.15mほどの段が検出されている。しかし木棺の痕跡は認められなかった。



第35図 第98号墳セクション図(2)



第36図 第98号墳セクション図(3)

頭位方向であるが、墓墳底面のレベルが高い東側は幅が狭く、底面のレベルが低い西側は幅が広いというデータは、頭位方向を判断するには不十分であった。

墓墳内にいかなる形態を持つ埋葬主体が存在したかという問題は、十分な確証を得ていない現状では判断できない。以下には、いくつかの状況証拠から類推できることを可能性として示したいと考える。

埋葬施設の構造を知る手がかりとして、墓墳の埋土のセクションと墓墳内より検出した炭化材とその出土位置が挙げられる。墓墳内の埋土セクションを観察すると、長軸セクションでは中央部が大きく落ちこみ、それに引きずられて周辺の土層もゆるい傾斜を示しながら落ちこんでいることがわかる。短軸セクションにはその現象がより端的に表現されていて、赤褐色系の土と黄褐色系の土層が、交互にしまりや弱めながら落ちこんでいる。両者の状況を考えあわせると、墓墳内に木棺ないし木柩による空間があり、それが腐朽して埋土が陥没したということが想定される。

また、炭化材の出土状況を見ると、墓墳南側の壁の下部から現状での長さ約3.6mある炭化材が3枚以上、直線的に南壁を造るように配されている。しかし、墓墳北側の下部にこれに相当するものは存在せず、約1.1m上部に現状での長さ約3mほどの木材が検出された。これらの炭化材が崩れた状態ではなく、何らかの構築物の残存であることは、墓墳上端が南東側で不整形に歪んでいるのに対して、下端ではこの内側と南西隅を結ぶライン上に炭化材が歪みを矯正するように位置していることからわかる。

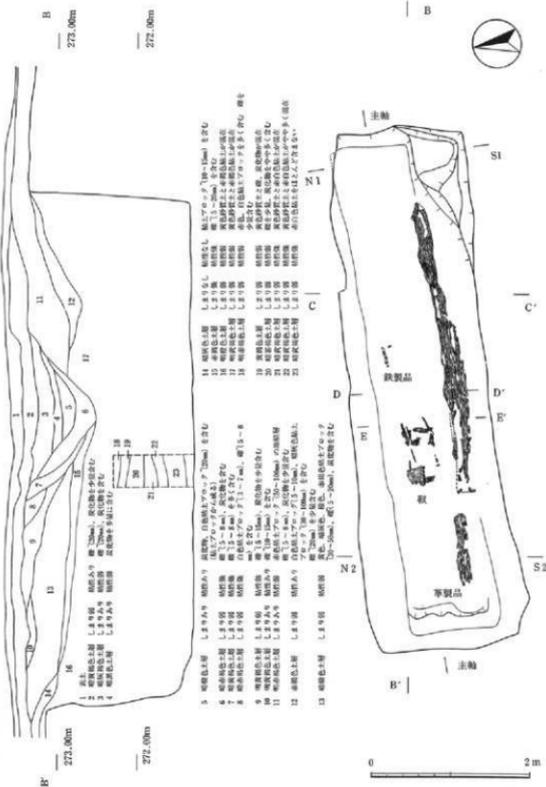
この炭化材が構築物の残存であるとする、北側の壁際に底面より約1.6mはなれて検出した炭化材も南側の炭化材と関連したものであろう。

以上のことから木棺の存在の有無とはまた別に、炭化材が構築された高さ底面より1.6m以上ある木柩状の埋葬施設を想定することも可能である。しかし、これらのことを裏付ける確実な証拠を把握していない現状では、当古墳群中における類例の増加を待って、構造解明の手がかりを掴まなければならない。

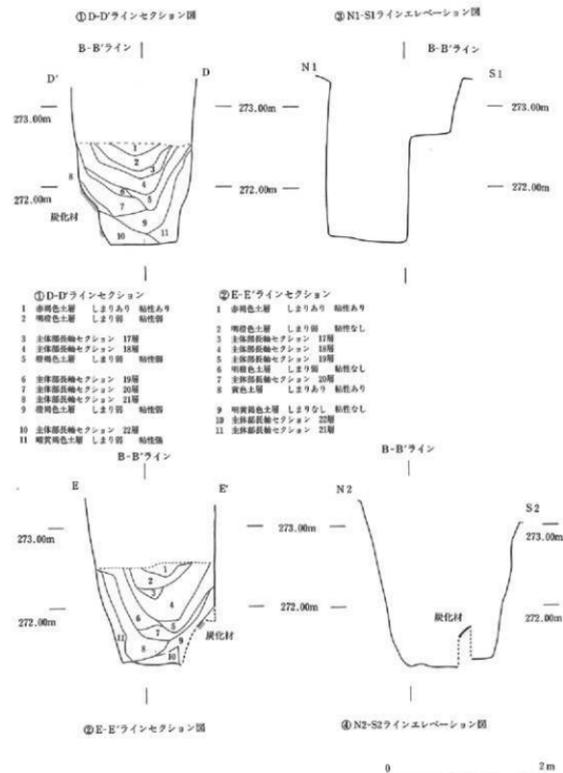
遺物出土状態

墓墳底面からは、鉄製品・靱・不明革製品が出土している。上述の理由から棺内・棺外遺物の区別はつけられないので、東側から順に記述する。

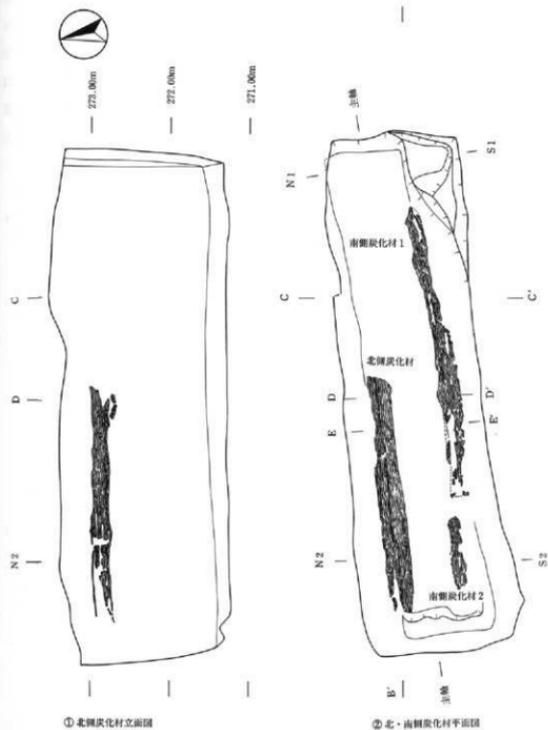
墓墳中央部の東側からは、長さ1.5cm、直径0.2~0.3cmの棒状の鉄製品が出土してい



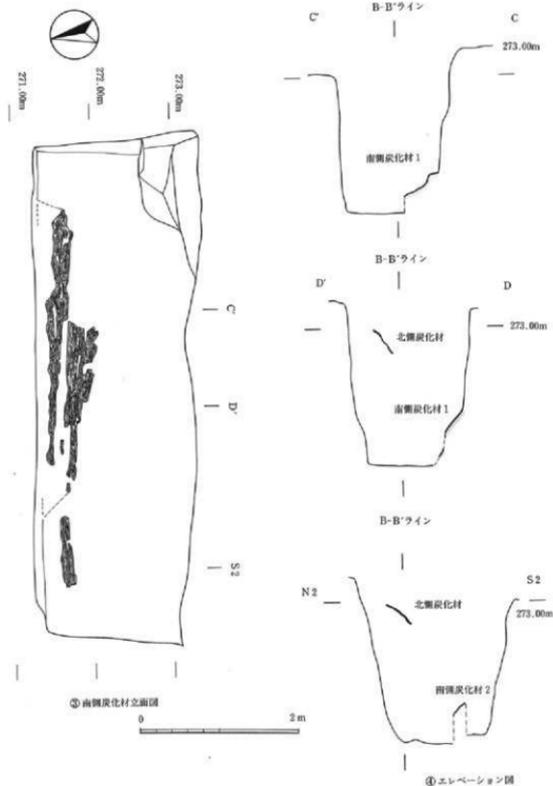
第37図 第98号墳主体部(1)



第38図 第98号墳主体部 (2)



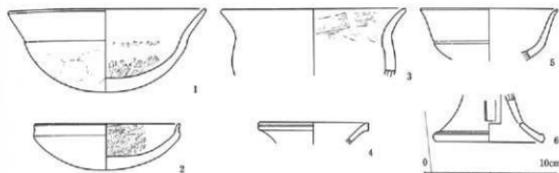
第39図 第98号墳主体部炭化材出土状況図 (1)



第40図 第98号墳主体部炭化材出土状況図(2)

周囲には木材の痕跡が認められたが、これらの性格は不明である。また、この近くからは鉄線の破片が1点出土している。これより1mほど離れた西側には、木製黒漆塗りの板が出土している。しかし、土圧で潰れて原形を復元するものも困難な状態であった。これについては、第5章考察で触れられている。また、西壁の隙で段に若干かかるようにして、現状で長さ約82cm、幅約10cm程の革製品が床にはりついているのを検出したが、形状の復元はもとより、革の種類も確認はできなかった。

第98号墳出土遺物(第41図)



第41図 第98号墳出土遺物

土師器(第41図-1~3)

1・3は墓壇内から出土し、2はEトレンチ周溝内の覆土から出土した。1は大形の埴で、反転復元を行ない、口径15.1cm、器高は6.25cmをはかる。口唇部は若干つまみあげられており、底部は内厚な丸底である。外面の調整はケズリであるが、器表が荒れているため単位は不明瞭である。内面は縦方向のヘラミガキが確認され、口縁部付近はヨコナデのちヘラミガキが施されている。内面は黒色処理をしていると思われる。3は須恵器の模倣埴と思われ、口径11.2cm、器高3.5cmをはかる。口縁部は反外気味に、稜を持って立ち上がり、環部の上半と下半の境には段差が見られる。外面は器表が荒れているので、口縁部のヨコナデ以外の調整は不明である。内面は、口縁部では横方向のヘラミガキで、それ以下は縦方向のヘラミガキが施されている。やはり内面は黒色処理をしている。3は突で、反転復元を行ない、口径13.8cm、残存高は4.9cmをはかる。外面はヨコナデが施されていて、内面は単位は不明瞭であるが横方向のハケメが見られた。

須恵器 (第41図-4~6)

4は後円部墳頂の表土直下から、5と6は墓墳内から出土している。4は密の口縁部と思われるが、器種は明確ではなく、口径8.4cm、残存高1.6cmをはかる。口縁部と頸部との段差が明確で、外面と内面はヨコナデで調整されている。口縁部の内面には自然軸が観察された。5は高環の坏部で、反転復元を行ない、口径10.4cm、残存高3.9cmをはかる。坏部には明瞭な稜がめぐり、口唇部はつまみあげてやや外反している。外面の下半部の調整は不明だが、上半部はヨコナデが見られ、内面にもヨコナデが観察される。口唇部の一部には自然軸が見られた。6は高環の脚部で、底径8.2cm、残存高3.5cmをはかる。残存状況は良くないが、透かし孔は三方向に入っていたと推測される。端部は明瞭な稜が見えていて、丸くおさまらない。外面と内面はヨコナデで調整されていて、自然軸が見られた。

付 記

第98号墳の墓墳内より検出された炭化材については、バリノ・サーヴェイ株式会社の本崇夫氏に依頼し、鑑定して頂いた。その結果、これらの炭化材の樹種はヒノキ科であることが判明した。

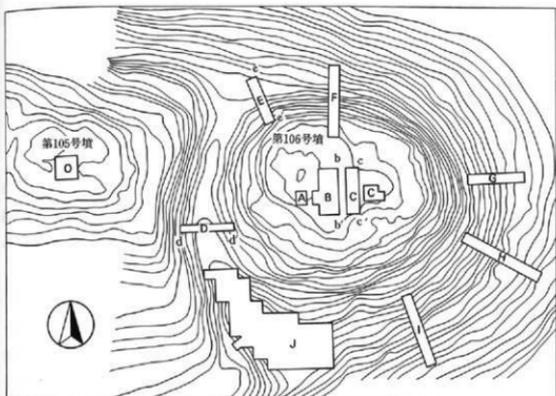
第2節 鷹待場支群の調査

第105号墳

鷹待場支群に属する第105・106・186号墳の調査は、1986年に川西町教育委員会によって行なわれた。調査期間は1986年5月19日～9月18日である。3基を同時に調査したために、調査区の番号は一連のものとして付されている。今回再報告するにあたっては、これを踏襲することにした。

調査の目的

鷹待場支群の性格および築造年代などの基礎資料を得るための調査の一貫として第105号墳を調査した。しかし、付近は松茸を多く採取できるところでもあり、調査全体の主眼



第42図 第105・106号墳調査区

を第106・186号墳にさいたため、墳頂平坦面の発掘にとどまらざるを得なかった。

立 地

第105号墳は、鷹待場支群の標高269m付近に存在する方墳である。第105号墳のすぐ東には第106号墳(方墳)が存在するが、現在の地表を観察する限りにおいては第106号墳との切り合い関係は見られない。

墳 丘

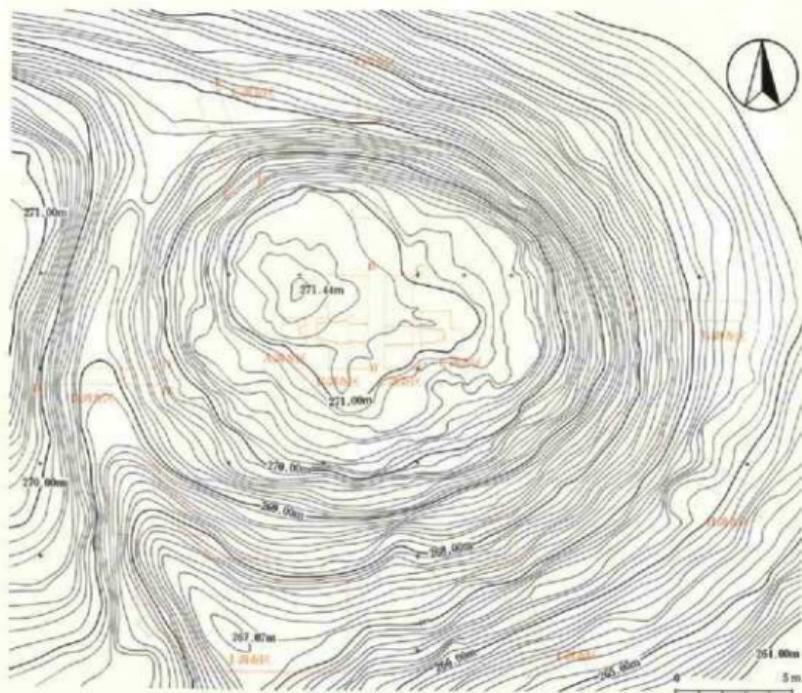
発掘調査によって墳裾のラインを確定していないために正確なデータは示せないが、墳丘測量の結果によると東西11.5m、南北7m、高さ約1mの方墳である。墳頂に設定した2×2mのグリッドで確認したセクションによると、表土下20cmの深さで地山層が検出された。おそらく墳丘の大部分が地山の削りだしによっていると推測できる。周溝の有無は測量図では判断できなかった。

主体部

O査区で表土を取りのぞくと、5～10cmの浅く窪んだところが見られたが、遺構らしきものは検出されなかった。第105号墳における主体部の有無は、今回の調査では確認できなかった。

第106号墳

第106号墳は、第105・186号墳同様、1986年に川西町教育委員会によって発掘調査されたものである。再報告するにあたり、記述の体裁は改めたが、古墳の年代に関する所見はそのまま採用した。



第43図 第106号墳丘測量図及び調査区配置図

調査の目的

塵待場支群の性格および年代などの基礎資料を得るために発掘調査を行なった。

立 地

第106号墳は塵待場支群の標高268m付近に存在する。近接して第105号墳があることは先述した通りである。当初、第106号墳は円墳であると推定されていた。しかし、現状の墳丘は南西側で盛土の崩落が著しいことが調査の結果判明し、一見円墳のようではあるが本来の墳形は方墳であると既報告では判断している。

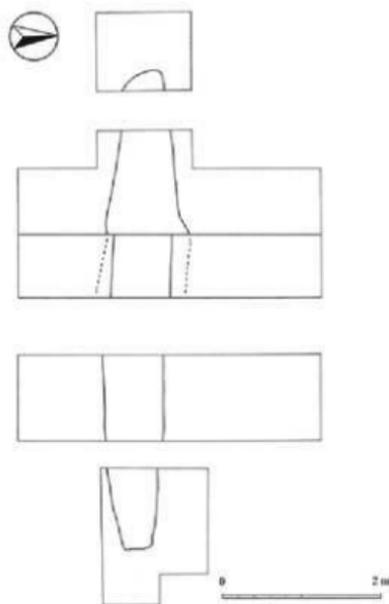
墳 丘

調査の結果、東西24m、南北19.5m、高さ1.4mの方墳であることが分かった。段築の有無は未調査であるが、測量図からは無段であると思われる。

盛土については、墳頂において掘り下げを行なった部分は表土下0.8m前後のレベルであったが、ボーリングの結果では表土下約1.4mまでが盛土であるとの所見を得ている。

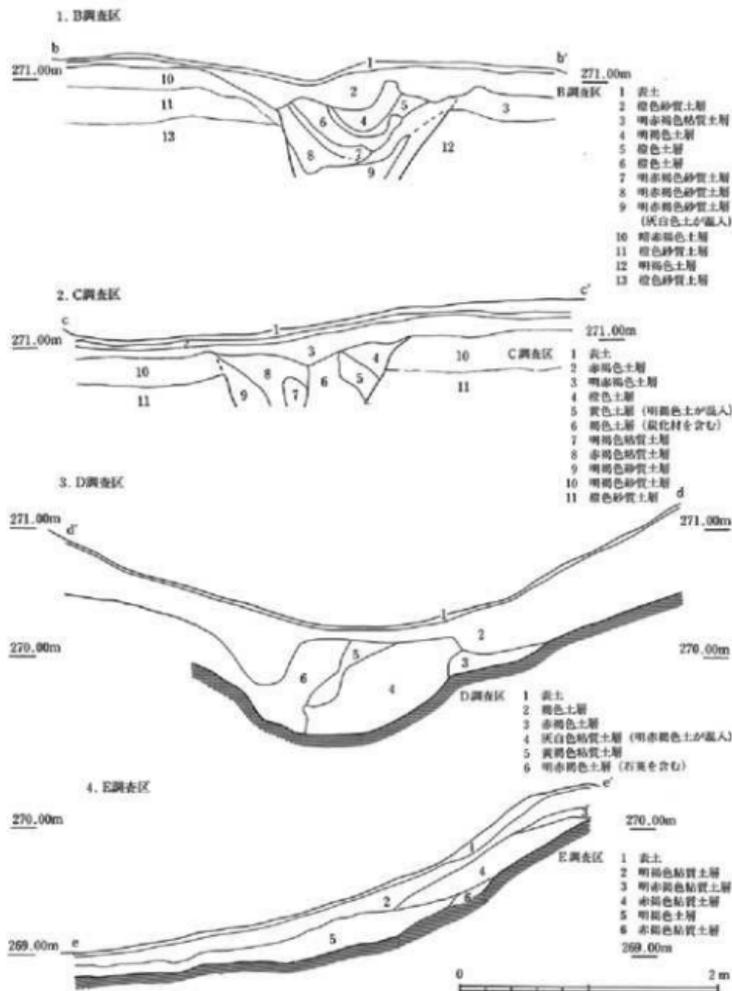
周溝の確認および墳裾の確定のために、D～J調査区の計7区を設定した。E～I調査区では墳裾のラインを検出することができた。特に北側のE・F調査区において確認した墳裾が一直線であることから、既報告では方墳であると断定している。

周溝の断面を確認するために墳丘東側にD調査区を設定した。その結果、覆土は0.85mほど堆積しており、周溝の上幅は1.7mであった。J調査区では表土下0.15mしか掘



第45図 第106号墳主体部確認プラン

第4章 下小松古墳群の調査



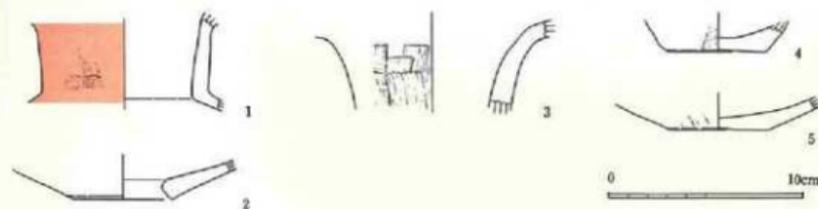
第44図 第106号墳セクション図

り下げておらず、周溝プランは確認できなかつた。またその他の調査区においても周溝は確認できなかつた。

主体部

主体部の有無を確認するために、墳頂平坦部の中央に 2×4 mのグリッドを設定したところ、表土下0.1mで東西方向にのびる墓壇のプランを検出した。墓壇のプラン全体を明確にするために、ベルトを残しながら東西にグリッドを設定した。調査時には墓壇のプランに関わらず、グリッドを掘り下げてしまったので、掘り込み面の規模はセクションからしか判断できない。表土下0.75~0.85mのレベルで、グリッドの全面的な掘り下げを停止した際の墓壇の規模は、長さ6.2m、幅0.7mである。このレベル以下の掘り下げは現状保存の立場から行っていない。しかし、一部ボーリングを行なったところ、墳丘表土下1.07mのところに墓壇の最深部があると思われる。

第106号墳出土遺物 (第46図)



第46図 第106号墳出土遺物

土師器

1は壺の口縁部直下の頸部で反転復元を行ない、残存高4.2cmをはかる。外面には縦方向のハケメが施されていて、赤彩が観察される。2は壺の底部で、焼成前に穿孔されていて底径5.2cm、残存高1.5cmを測る。胴部の器壁は薄いものと予想される。3はI区周溝表土下0.2mの覆土から出土した。壺の頸部で反転復元を行ない、残存高4.6cmをはかる。外面には縦方向のハケメが施され、内面は器表の風化が激しいので調整は不明である。4はH区周溝表土下0.23mの覆土から出土した。壺の底部と思われる底径5.1cm、残存高1.6cmをはかる。底面近くにきれいな稜を持ち、外面はハケメのちナデが施されている。内面はナデと思われるが不明瞭である。5は墳丘平坦面表土下0.25mで出土した。壺か甕の底部で底径

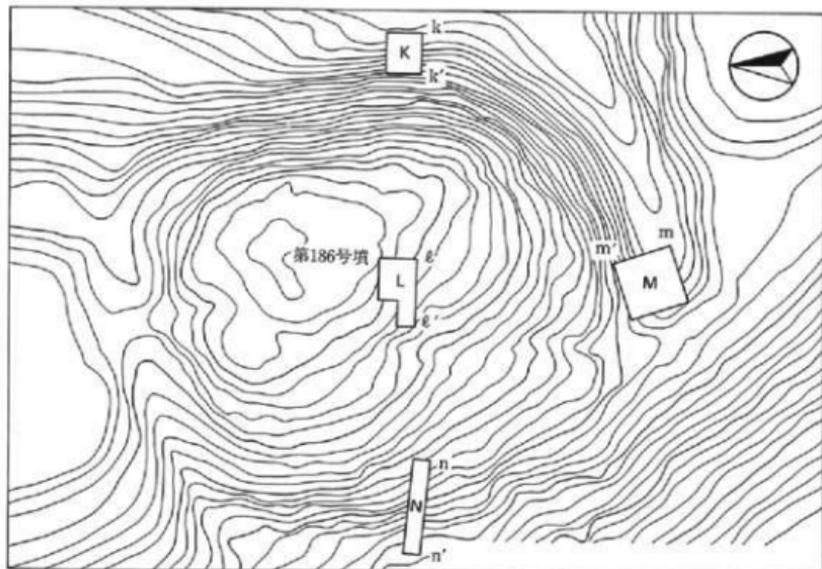
5.3cm、残存高1.7cmをはかる。外面はハケメで調整しているが単位・条などは不明である。底面はヘラケズリが行なわれていて、はっきりとした稜をつくりだしている。

ま と め

第106号墳は主体部の掘り下げを停止したため、副葬品などは確認されていない。しかし、盛土を掘りこんで墓壇を営むという方法がとられていて、当古墳群の小森山支群第61号墳の主体部構築方法とは異なる。

第 186 号 墳

第186号墳は、第105・106号墳同様、1986年に川西町教育委員会によって発掘調査されたものである。再報告するにあたり、記述の体裁は改めたが、古墳の年代に関する所見はそのまま採用した。



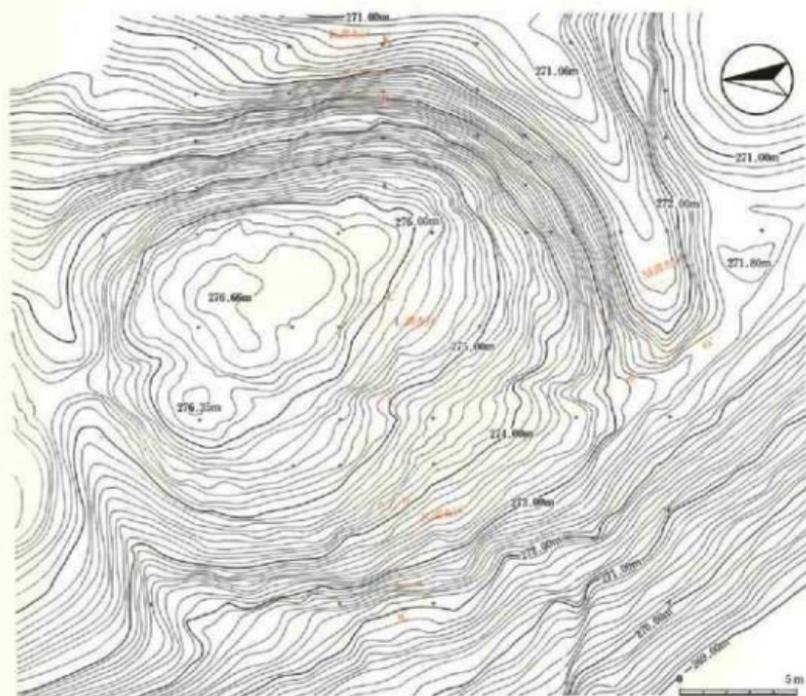
第47図 第186号墳調査区

調査の目的

鷹待場支群の性格および年代などの基礎資料を得るために発掘調査を行なった。墳丘の規模、形態、主体部の確認など基礎的データを得ることを目的としたが、現状保存の理由から墳頂には調査区を設定したのみで、主体部の位置を確認するための調査区の拡張はできなかった。

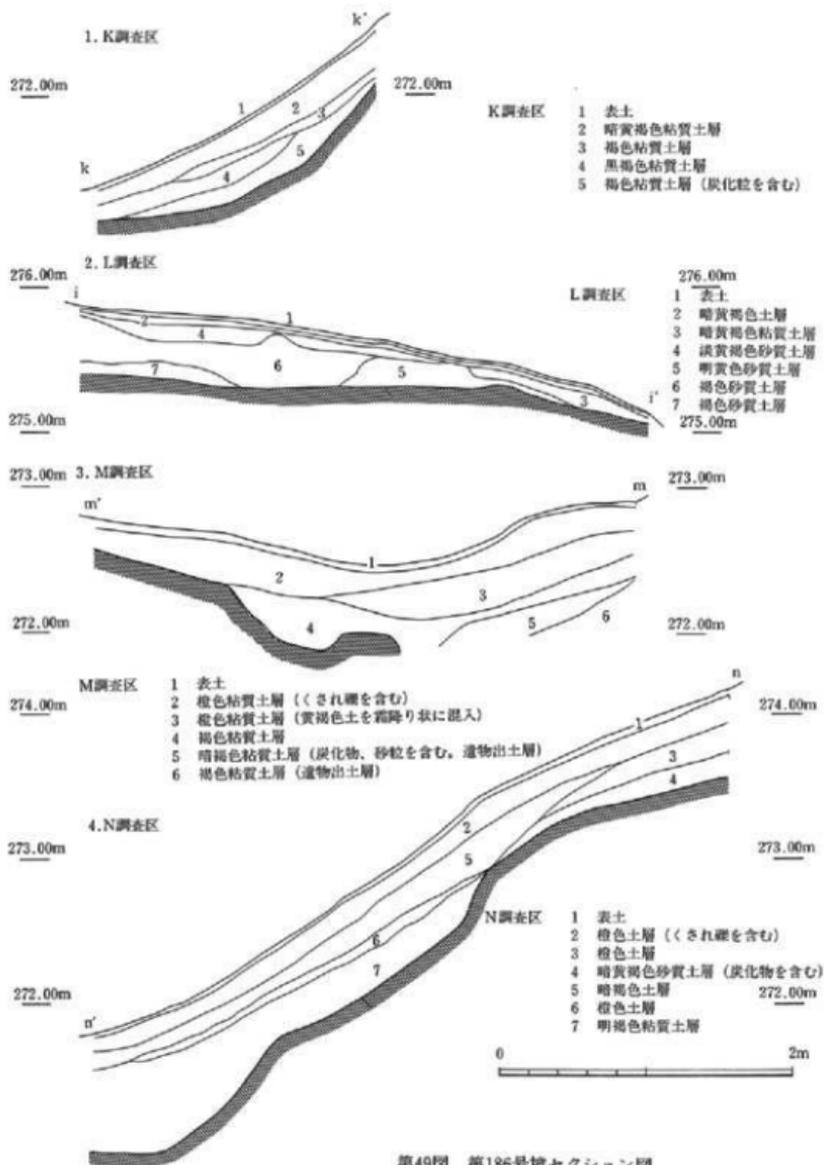
立地

第186号墳は、鷹待場支群の標高272mに立地する。鷹待場支群の位置する東側にのびる尾



第48図 第186号墳墳丘測量図及び調査区配置図

第4章 下松古墳群の調査



第49図 第186号墳セクション図

根の中で、一段高く見晴らしの良いところに造られた方墳である。

墳 丘

調査区の設定は、周溝の有無を確認することに重点をおいたため、方墳のコーナ一部分を検出することはできなかったが、東西方向についてはトレンチの所見から、南北方向については測量図から判断すると、東西22m、南北23m、高さ約4mの方墳である。段築の有無は確認できなかったが、測量図から推測すると無段であると思われる。

古墳の盛土の状況について知ることができたのは、墳頂に設定したL調査区のみであった。L調査区は長さ4m、幅2mで、墳頂表土から0.2~0.9m掘り下げを行なった。しかし付近は松茸が多く採取できる場所でもあり、占有者の関係から調査区の掘り下げや拡張は中止せざるを得なかった。したがってこのL調査区では、墓壇プランを確認することはできず、また地山面の検出も行っていない。

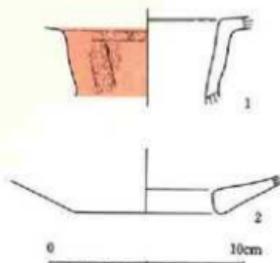
墳丘の東側および南側の墳裾の確認のために、K・N調査区を設定した。この二つの調査区では、墳裾を確認することができ、それによって方墳の東西の規模が22mであることが判明した。また、N調査区で地山直上から底部穿孔の壺形土器片が検出された。現在のところ、第186号墳の年代を考える唯一の資料である。

測量を行なった時点の所見によれば、第186号墳のコーナ一部には土橋状の施設が存在することが想定できた。この部分に関しては、N調査区を設定して発掘を行なったところ、この堆積は盛土の崩落による可能性が高いと判断した。

第186号墳出土土遺物（第50図）

土師器

1と2は同一個体と思われる複合口縁の底部穿孔壺で、N区墳裾表土下0.85mの地山直上から出土した。1は壺の口縁部直下の頸部で反転復元を行ない、残存高4.9cmをはかる。外面は縦方向のハケメが施されていて、のちなでているらしいが、正確な単位まではわからない。器表には赤彩が見られる。内面は器表が荒れているため、調整は不明確である。2は壺の底部で反転復元を行ない



第50図 第186号墳出土土遺物

第4章 下小松古墳群の調査

底径7.8cm、残存高2.0cmをはかる。穿孔は焼成前で、胴部の器壁は底部の立ち上がりから比較的薄手になるとと思われる。やはり器表の荒れが激しいために調整は不明であった。

ま と め

第186号墳においては、主体部を確認していない。しかし、調査により土器片を検出できた。器種の推定できる底部穿孔壺形土器片により、築造年代を考察することが可能だろう。この土器は、4世紀の塩釜式II A～III式の範疇におさまることができると既報告ではされている。東北地方の方形周溝墓および古墳から発見された底部穿孔壺形土器は、宮城県名取市今熊野1号方形周溝墓、宇賀崎1号墳、雷神山古墳、仙台市安久東古墳、遠見塚古墳、古川市青塚古墳、宮崎町庚申森古墳、山形県川西町天神森古墳の計8基である。これら8基の古墳は4世紀から5世紀初頭に位置付けられることから、第186号墳も同様な時期と推定する。

第3節 葉師沢支群の調査

第143号墳

葉師沢支群に属する第143・145号墳の調査は、1987年に川西町教育委員会によって行なわれた。調査期間は1987年6月15日～8月6日である。再報告するにあたり、記述の体裁は改めたが、年代などの所見はそのまま採用した。

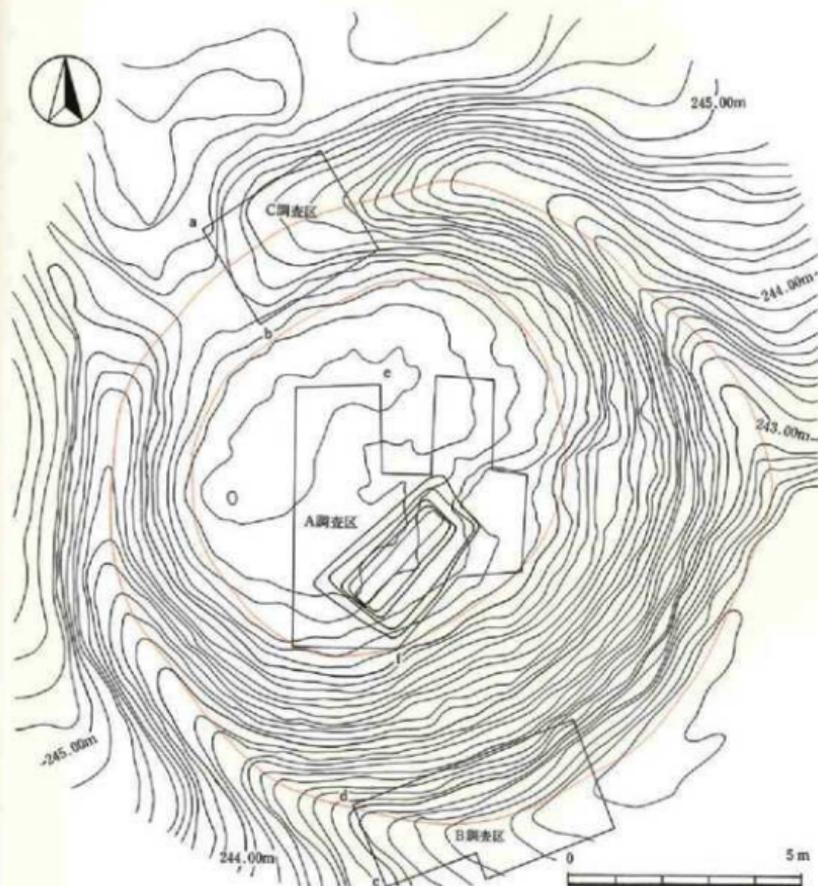
調査の目的

川西町教育委員会によってすすめられた調査の3年目に、葉師沢支群の基礎的資料を得るために調査を行なった。第143号墳の調査は、第145号墳が後述するような理由で調査範囲が限定されたため、墳丘の形態、規模、埋葬施設の有無、遺物の確認を主眼として行なわれた。

立 地

第143号墳は、東にのびる尾根の先端の傾斜面に存在する。付近には、同規模の円墳が数基見られる。

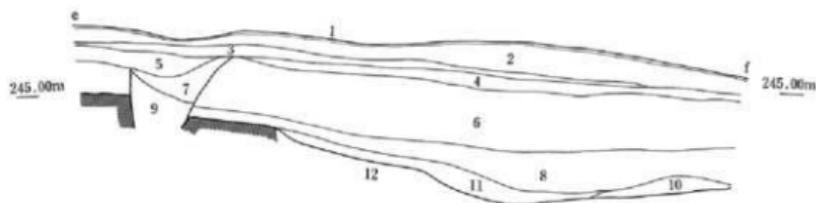
表土を除去したところ墳丘上部には長さ10~20cmの平たい河原石が集積されていて、その数は約2500個ほどを数える。またその他に石英粗面岩質凝灰岩片が墳丘全体に散在していた。この石英粗面岩質凝灰岩片に関連すると推定できる、幅0.4m、深さ0.1mの凹部が墳



第51図 第143号墳丘測量図及び調査区配置図

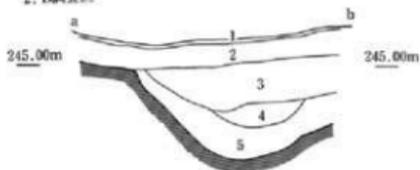
第4章 下小松古墳群の調査

1. A調査区 (主体部発掘前)



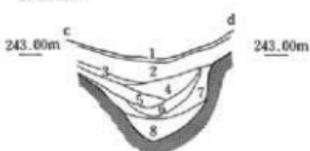
- A調査区
- 1 表土
 - 2 褐色土層 (礫を少量含む)
 - 3 黄棕色砂質土層
 - 4 暗黄褐色粘質土層
 - 5 暗黄褐色粘質土層
 - 6 棕色粘質土層 (礫を少量含む)
 - 7 暗黄褐色土層 (炭化粒を含む)
 - 8 暗黄褐色土層
 - 9 暗褐色土層
 - 10 明黄褐色土層
 - 11 明黄褐色土層
 - 12 黄褐色土層 (墓室の埋め土)

2. B調査区



- B調査区
- 1 表土
 - 2 明褐色土層 (礫を少量含む)
 - 3 明赤褐色砂質土層 (礫を少量含む)
 - 4 明赤褐色粘質土層 (礫を僅かに含む)
 - 5 褐色粘質土層

3. C調査区



- C調査区
- 1 表土
 - 2 暗黄褐色土層
 - 3 黄褐色粘質土層
 - 4 黄褐色粘質土層 (礫を微量に含む)
 - 5 黒褐色土層
 - 6 褐色粘質土層
 - 7 暗黄褐色土層
 - 8 暗褐色土層



第52図 第143号墳セクション図

頂において直径2mほどの環状に見られ、その中央部に直径0.6mの楕円形の窪みが見られた。おそらく第145号墳のように、後世の信仰にかかわる凝灰岩質の石塔が建立されていたと考えられる。

墳 丘

第143号墳は、直径13.5m、尾根側周溝底からの高さ1.5m、谷側周溝底から高さ3.4mの円墳である。測量図からの検討によると、段築はないものと思われる。

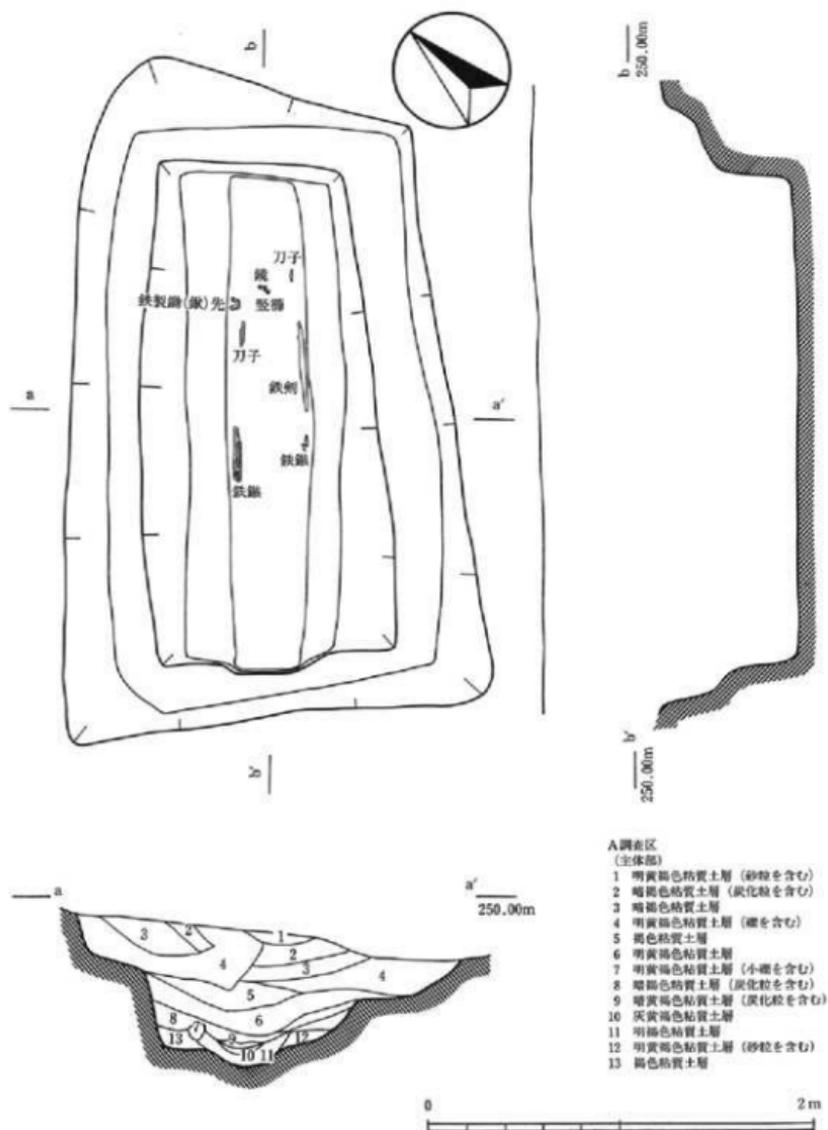
盛土の厚さは、墳頂の発掘区の土層セクションによると約1mほどある。この盛土は、第61号墳同様、整地した地山に主体部を設置して埋葬を終えた後、周溝を掘り、その排土で築造されたと考えられる。

周溝は、測量図によると古墳を一周するものと推定されるが、調査を行なったのは、山側と谷側の一カ所ずつである。谷側のB調査区では、5×2.5mの範囲で掘り下げを行なった。土層は8層に分けられ、4層目より土師器と須恵器の小片が出土した。出土状況より墳丘より流れこんだものと考えられる。周溝は上幅1～1.5m、深さ約0.7mである。

山側のC調査区では3×2.5mの範囲で掘り下げを行なった。この部分では土橋状の盛土が表面観察で確認されていて、その土層を調査したものである。発掘調査の結果、この盛土は古墳築造後になされたもので、土層の状況により古墳の築造年代と併行するものではないことが判明した。覆土は5層に分けられ、地山層を約1mあまり掘り込んで、周溝を造っていることが分かった。C調査区では、第143号墳に属する遺物は検出されなかったが、2層下部より石塔片が出土した。

主 体 部

主体部は、墳頂平坦面のやや南側に寄ったところに構築されている。しかし、周溝によって知られる墳丘から見るとその円形のはほぼ中心に存在している。主体部の主軸方位はN-130°-Eである。墓壇プランの規模は、長さ3.5m、幅2mでやや台形状である。墓壇の掘り方は3段階掘りである。はじめは、丘陵斜面に対し平行に長さ2.9m、幅1.7mで0.2mの深さに掘り、次にその掘り下げを行なった段階で中央部を長さ2.65m、幅1mを0.25～0.45mの深さに掘り下げて、底部を水平にし、長方形を造っている。最後に、さらに中央部を半円柱状に長さ2.5m、幅0.35m、深さ0.1mに掘り下げて、墓壇をつくっている。墓壇の底面



第53図 第143号墳主体部

は、ほぼ水平なレベルで標高243.18m、墓墳直上の墳丘表土より墓墳底部までの深さは、2.15mである。

墓墳内部の土層状況および形態より、割竹形木棺直葬と推察され、土層断面などから長さ2.5m、幅0.55mをはかると思われる。主体部の覆土は9層に分けられる。

副葬品は鏡、鉄剣、鉄鏃、刀子、鉄製鋤(鉞)、笠桶が出土しており、棺内遺物と考えられる。

第143号墳出土遺物 (第54～58図)

鏡 (第49図版)

桶とはほぼ同位置から出土したもので、既報告では無文鏡として報告された。出土時には全体が細片となってひとかたまりになっていた。おそらく埋葬後、土圧の影響によって破砕したものだろう。

したがって文様の遺存も、錆上りの悪さも加わって極めて良くない。かろうじて文様構成がわかるものである。観察によると、外区部分に鋸歯文帯が一圍めぐり、その内側にはわずかな段がついていて鋸歯文帯が一周する。内区主文様が入るべき部分は無文帯となっていて、その幅は他の文様帯とほとんど変わらない。鈕座はない。現状で直径4.9cm、縁厚0.9mm、反り0.5mm、鈕径8.9mm、鈕高5mmをはかる。

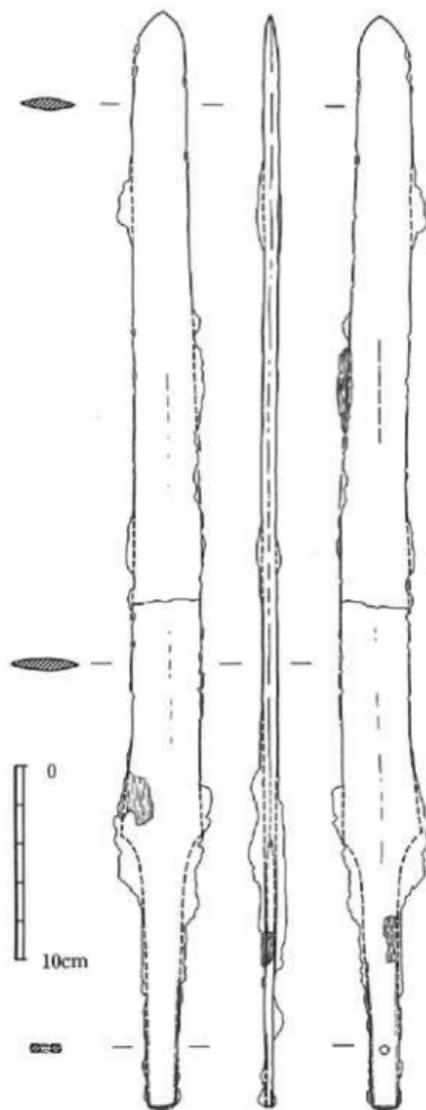
鉄剣 (第54図)

全長56.2cm、剣身長42.3cmに及ぶ。茎の長さは13.9cmとなり、関から次第に幅を減しながら茎尻へ達する。剣身の幅はふくらで2.5cm、身元付近で4.1cmとなる。剣身断面は両丸造で、厚さは0.6cmをはかる。また、錆は部分的な確認にとどまっている。さらに、錆着のため関の形状は不明であるが、部分的な観察からすると茎のつけられた方が片方に寄っており、不均等な形を呈することが推定される。なお、拵えの痕跡はほとんど無く、わずかに木質の残存が認められる程度である。

鉄鏃 (第55・56図)

長頸式・平根脇扶柳葉式・短茎式・無茎式の各種が出土しており、以下この順で記していく。

長頸式 (第55・56図) は約22個体出土している。鏃身の確認できる範囲においてはそのすべてが片刃箭式で、法量の規格性も高いことが指摘できる (表1) のだが、同時に、鏃身

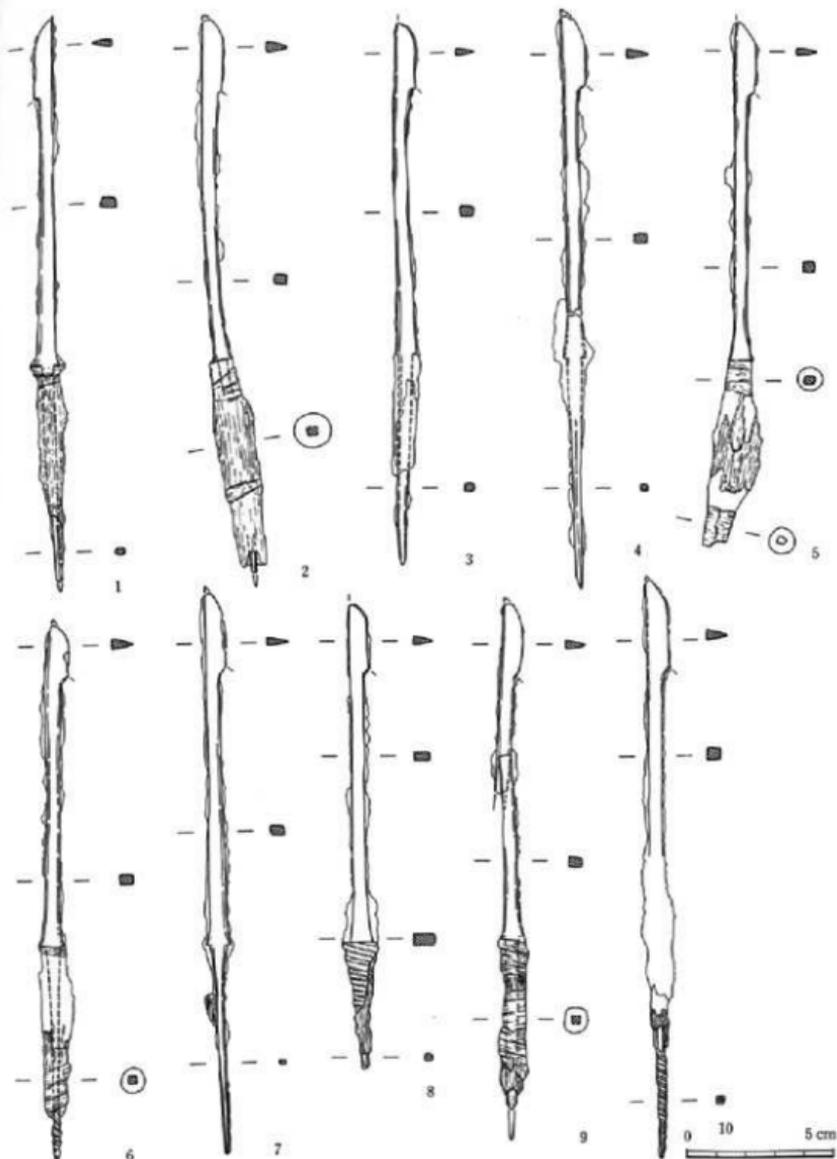


第54図 第143号墳出土遺物(1)

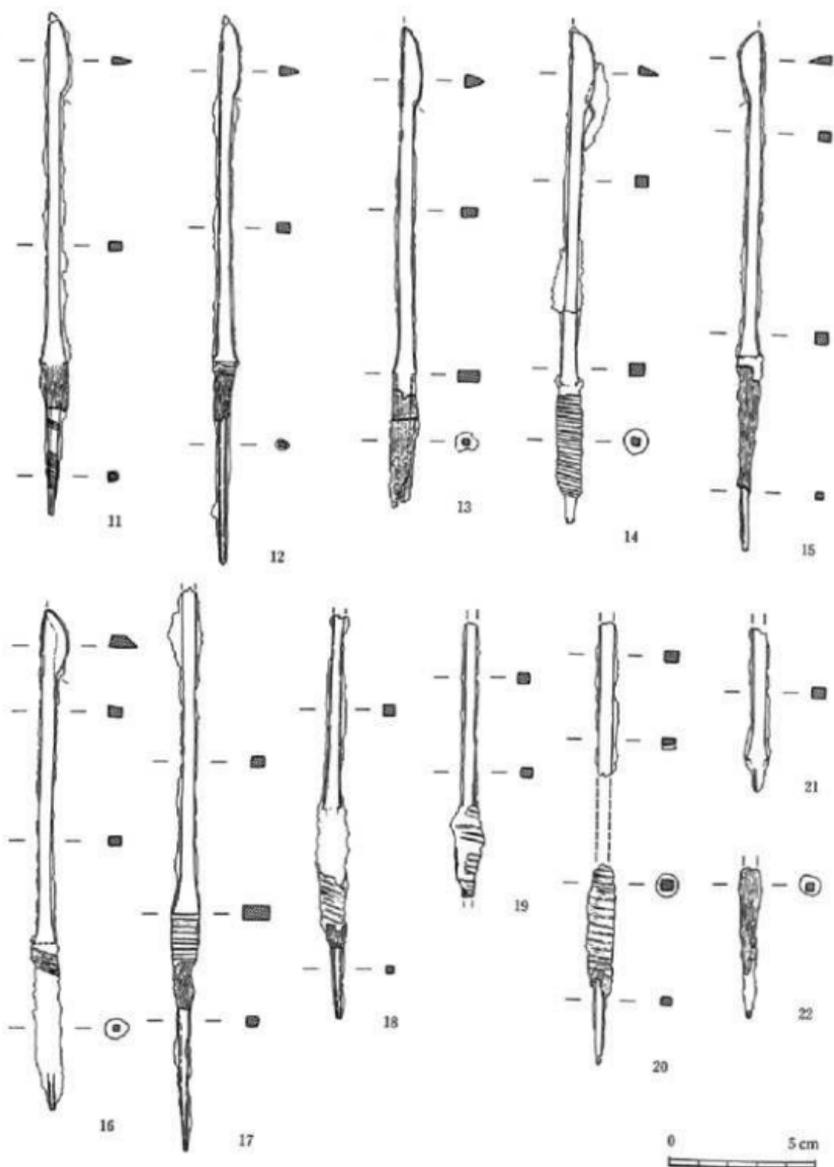
関部の造り方によって大きく二つに分類が可能である。まず、関を直角あるいは斜関とする一群(1~10)と、撫関を持つもの(11~16)とに分けられる。また、鉄身の形態についてもいくつかのバリエーションが見られ、最大幅を鉄身上半部に持つもの、中央に持つもの、鉄身関部を持つものの三者があるが、上記した二つの分類基準の間に厳密な規則性は看取できず、ここでは鉄身関部の造り方による二大別をもって分類するにとどめたい。また頸部の関はいずれも台形を呈している。鉄身断面形はほとんどが平片刃造であったが、中には片平片刃造(14・15)や片切刃造(16)のものも存在する。

矢柄への固定方法には2種が観察された。一つは樹皮によるものと、もう一つは細い紐状の有機質による装着である。また、茎に直接紐状の有機質を巻き付けている例もあり、これについては矢柄との間隙を埋める目的を果たしていたのではないかと考えられる。

平根腸袂柳葉式(第57図-1・2)は二つのタイプが見られた。一つは腸袂に至るまでほとんど弯曲が認められず、鉄身形態が三角形を呈するもの(1)、もう一つは側縁の弯曲がはっきりと認められ柳葉形を呈し、舟形の穿孔を有するものである(2)。1は残存長が12.3cm、鉄



第55図 第143号墳出土遺物(2)



第56図 第143号墳出土遺物(3)

身長6.7cm、最大幅を腸扶端部に持ち、3.1cmをはかる。頸部長は4.8cm、頸部関は台形関で、鎌身断面は扁平な片丸造であった。2は残存長10.9cm、鎌身長7.9cm最大幅を腸扶端部に持ち、3.3cmをはかる。頸部長は3.3cm、頸部関は直角関で、鎌身断面は扁平な両丸造であった。また、1の茎断面は方形であるのに対して、2は隅丸方形を呈する。

短茎式(3)は現存長2.6cm、鎌身長2.5cmをはかり、二等辺三角形状を呈する。断面は扁平な隅丸方形で、厚さ0.2cmである。無茎鎌には二つのタイプがある。基部が凹むもの(4・5)と平らなもの(6)で、4は鎌身長3.3cm、最大幅2.6cmをはかり、5は鎌身長2.0cm、最大幅2.5cmであった。いずれも鎌身中央に木質の残存が認められ、矢柄装着の痕跡と思われる。

ここで出土状況との関連で見ると、長頸鎌と平根腸扶柳葉式(2)がまとまって出土しており、それに対置する形で平根腸扶柳葉式(1)と短茎・無茎鎌が一群となっていた。このように、長頸鎌がすべて同一形式によって構成されていること、さらに多数の長頸式と少数の平根式といった比較的広く分布するセット関係が認められていることなどに注目した場合、鉄鎌の副葬が明確な意図のもとに行なわれていたのではないかと考えられる。

刀子(第57図-7・8)

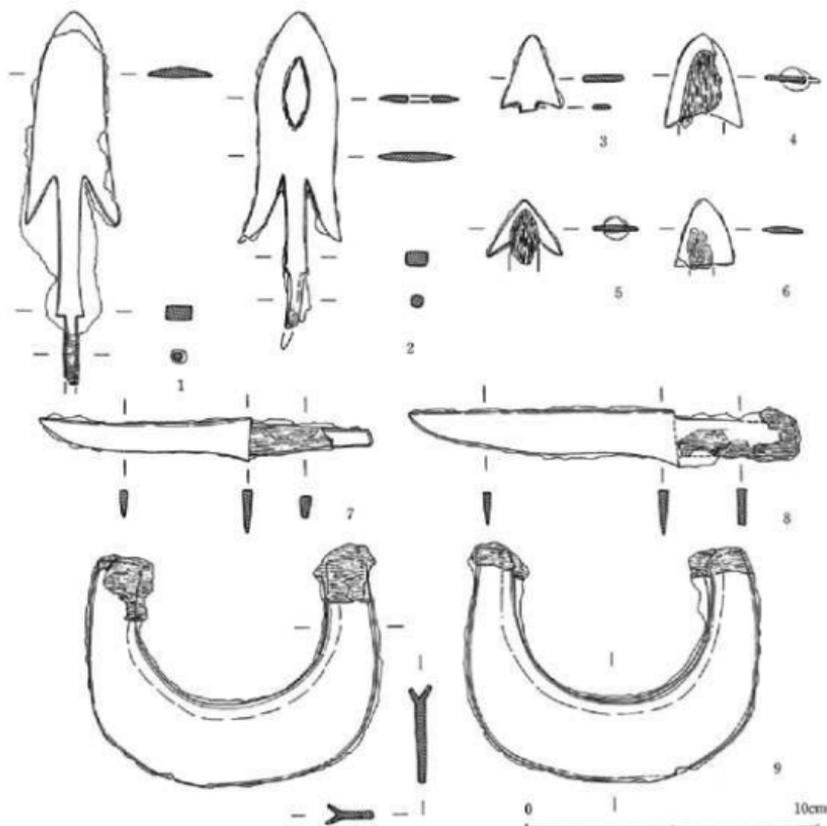
7は、鏡や櫛に近い位置から出土していた。完存品で、全長11.4cm、刃部長7.3cmをはかる。刃部には研ぎ減りと思われる偏向が見られ、背は若干反り上がる形になっている。刃部幅が研ぎ減りの無い個所で1.0cmとやや細身の刀子である。8もほぼ完存しており、全長13.2cmとやや大型の刀子である。刃部長9.1cm、刃部幅1.2cmをはかり、研ぎ減りが認められた。柄の有機質は7・8いずれも木質で、鹿角製の柄ではない。

鉄製鋤(鎌)先(第57図-9)

U字形を呈する。全体的な造りは精緻であるが、全長7.9cm、幅9.8cmと小型である。風呂部両端の幅は9.1cmをはかり、溝の内法は0.6cmほどあった。また、明瞭な刃部を持たず、溝の内側には木質の痕跡が認められなかったことなどから、実用品としての性格を保持していたかどうか定かではない。さらに、端部に残存していた木目の方向が着柄した場合のものとは反対であり、この種の鉄製鋤(鎌)には別用途を想定することが相応しいかもしれない。

竖櫛(第58図)

第143号墳から出土した遺物で金属器以外のものとしては竖櫛3点が知られるが、その



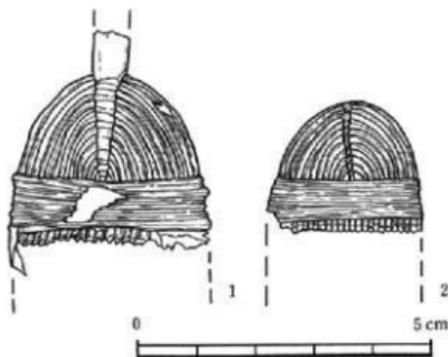
第57図 第143号墳出土遺物(4)

内、残存状態の良好な2点(1・2)について記すと、1は残存長3.7cmで歯部を欠損している。頭部中央には結束のために軸材が用いられており、幅は最大0.6cmをはかる。欠損と中央の結縛のため軸材の全長を知ることはできないが、残存長は2.6cmとなる。中央結縛部長は0.9cmで、幅は3.4cmであった。2の残存長は2.3cm、中央結縛部長は0.7cmで最大幅は2.7cmをはかる。これも歯部を欠いており、全長は不明である。また、2の頭部中央に見られる結束は材ではなく糸状の繊維によって行なわれている。従って、1のような頭部の突起は見られなかった。

なお製作技法については、第5章考察において触れられている。

まとめ

第143号墳の築造年代を推定するには、主体部の築造法と副葬品が資料となる。主体部は割竹形木棺の直葬であり、長さ2.65m、幅1mの大きさである。山形県において木棺直葬の埋葬形態は、お花山古墳群衛守塚2号墳、下小松古墳群小森山支群第61号墳のみで



第58図 第143号墳出土遺物(5)

ある。中でもお花山古墳群1号墳とはよく類似している。このお花山古墳群の築造年代は5世紀後半から7世紀前半に位置づけられていて、その内1号墳はお花山古墳群の成立から展開期の築造とされる。東北地方における割竹形木棺直葬の多くは、4世紀末から5世紀末と考えられていることから、出土品などに鑑み5世紀末葉としておきたい。

薬師沢支群全体の調査を待たないと支群の築造年代は明確にはならないが、山頂部に立地する古墳の年代を第143号墳より古いと考え、薬師沢支群は5世紀初頭には築造が開始されたものと推定している。

第145号墳

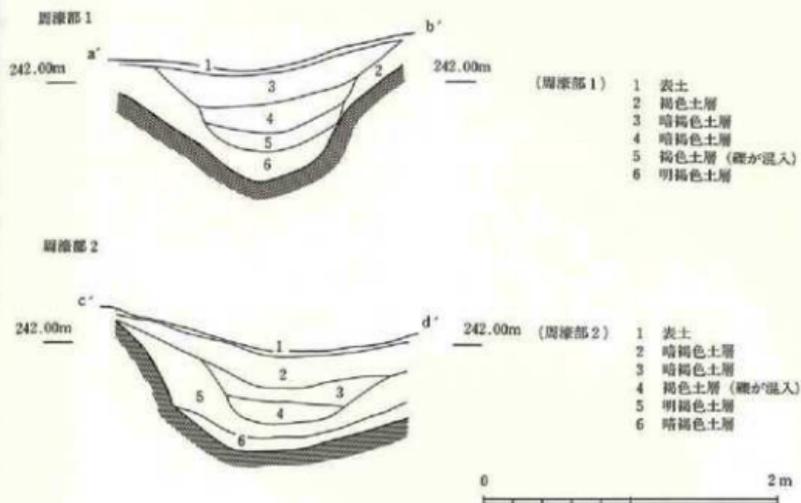
第145号墳は、第143号墳と同様、1987年に川西町教育委員会によって発掘調査されたものである。

調査の目的

第145号墳は、薬師沢支群最大の円墳である。年代に関する基礎資料を得ることを目的とする調査であったが、現在でもなお信仰の場として用いられているという制約のため、調査区を周溝の一カ所にとどめて発掘を行なった。



第59図 第145号墳丘測量図及び調査区配置図



第60図 第145号墳セクション図

立地

第145号墳は薬師沢支群の存在する、東にのびる尾根の先端に立地する。付近には、小規模な円墳が多数存在する。

墳丘

墳丘は直径約23m、尾根側の表土よりの高さ約3m、谷側の調査区で検出した周溝底より高さ約4.5mで、段築の有無については確認していない。墳丘上部には第143号墳と同じく平たい河原石が散乱していた。

唯一の調査区であった墳丘南東側の調査区では、周溝を確認することができた。周溝の覆土は5層に分けられ、2層からは須恵器片(甕)が出土した。また、同層より平たい河原石が同様に出土している。覆土の混入物および土層の観察から、中世の石塔の建立時に周溝に対して何らかの人為的行為が加えられた可能性が高い。

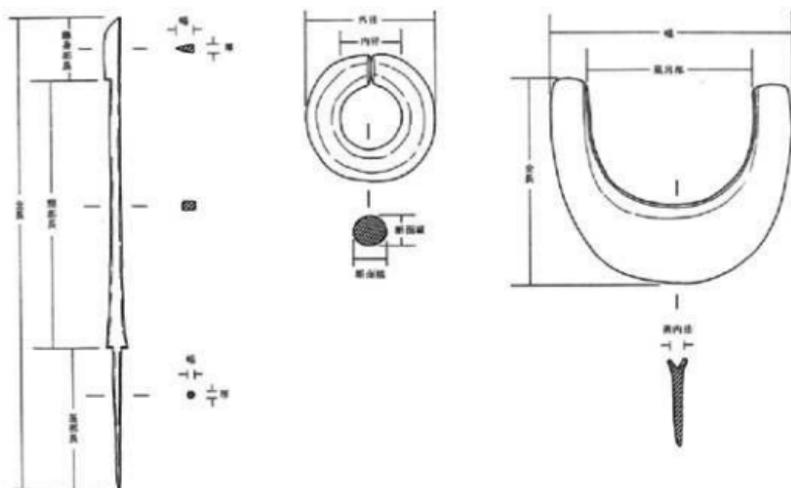
まとめ

1987年の調査では、調査区を思うように設定できず、古墳であるかの確定にも至ってい

ない。様々な制約のために、今後は基礎資料を発掘調査によって検討材料を得ることが必要と思われる。

No.	現存長	鎌身部(長×幅)	頸部(長×幅)	茎部(長×幅)	備考
1	19.4	2.7 × 0.7 × 0.2	9.2 × 0.5 × 0.4	(7.4) × 0.3 × 0.2	ほぼ完存
2	19.2	(2.5) × 0.8 × 0.4	9.2 × 0.5 × 0.4	(7.5) × 0.3 × 0.2	
3	18.6	2.2 × 0.7 × 0.2	9.1 × 0.5 × 0.4	7.3 × 0.4 × 0.3	完存
4	19.8	(2.5) × 0.8 × 0.3	9.3 × 0.5 × 0.4	(8.0) × 0.2 × 0.2	
5	18.1	2.6 × 0.7 × 0.2	9.1 × 0.4 × 0.4	—	
6	18.7	(2.1) × 0.8 × 0.4	9.0 × 0.5 × 0.4	7.1 × 0.3 × 0.3	ほぼ完存
7	19.4	(3.0) × 0.7 × 0.3	9.1 × 0.6 × 0.3	7.3 × 0.2 × 0.2	ほぼ完存
8	16.1	2.4 × 0.7 × 0.3	9.3 × 0.5 × 0.3	(4.4) × 0.3 × 0.3	
9	18.6	(2.4) × 0.7 × 0.3	9.0 × 0.5 × 0.4	(6.0) × 0.3 × 0.3	別個体の可能性あり
10	20.1	(3.3) × 0.7 × 0.4	— × 0.5 × 0.4	— × 0.2 × 0.2	ほぼ完存
11	17.2	(2.5) × 0.7 × 0.3	9.4 × 0.5 × 0.3	(5.3) × 0.3 × 0.3	
12	18.8	(2.5) × 0.6 × 0.3	9.2 × 0.4 × 0.4	(7.1) × 0.3 × 0.3	ほぼ完存
13	16.6	2.8 × 0.7 × 0.5	9.3 × 0.5 × 0.3	(4.5) × — × —	
14	17.1	2.8 × 0.7 × 0.3	9.3 × 0.4 × 0.4	(5.0) × 0.3 × 0.3	
15	18.1	2.4 × 0.8 × 0.3	9.0 × 0.5 × 0.4	(6.7) × 0.3 × 0.3	ほぼ完存
16	17.4	2.2 × 0.9 × 0.4	9.3 × 0.4 × 0.3	(5.9) × 0.2 × 0.2	ほぼ完存
17	19.5	—	(11.3) × 0.5 × 0.4	8.2 × 0.4 × 0.4	
18	14.0	—	(6.7) × 0.4 × 0.4	(7.3) × 0.2 × 0.2	
19	9.5	—	— × 0.4 × 0.4	—	
20	15.1	—	— × 0.5 × 0.4	— × 0.4 × 0.3	別個体の可能性あり
21	5.7	—	(4.5) × 0.5 × 0.4	—	21, 22 は同一個体の可能性あり
22	5.2	—	—	(5.2) × 0.3 × 0.3	

(註) 単位は全てcmを使用し、計測値は小数点以下第二位を四捨五入したものである。また、()内は現存長を、「—」は計測不能をそれぞれ意味する。



第61図 鉄器計測部位模式図